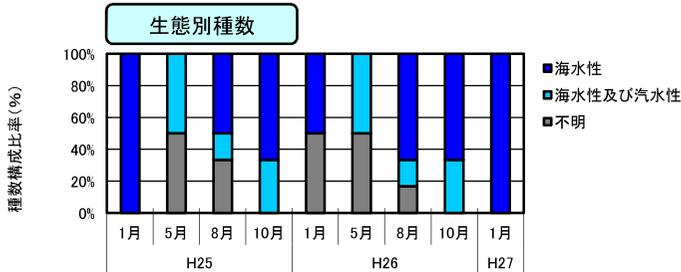
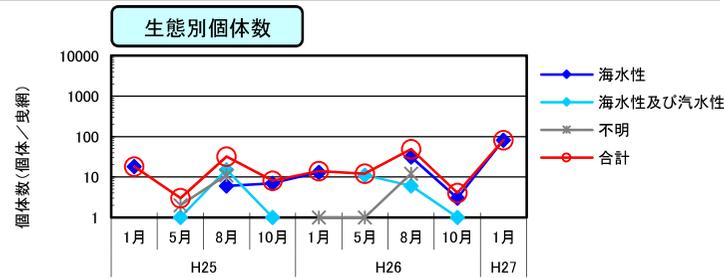
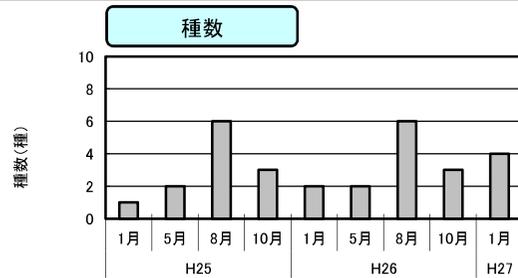
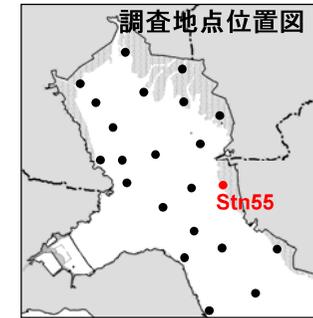


諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

(7)水生生物 3)魚卵・稚仔魚(稚仔魚)

③4 有明海(Stn55)

- 種数は1～6種で、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。
- 個体数は3～81個体/曳網で、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。
- 主な種はイカナゴ、カタクチイワシ、サツパ、コノシロ、トウゴロウイワシ、ハゼ科などであった。



主な出現種 (Main species appearing)

項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
主な出現種 (%)	ニシン目	海・汽	サツパ		46.9			12.2		
		海・汽	コノシロ	33.3			91.7			
		海	カタクチイワシ		75.0			○	50.0	
	トウゴロウイワシ目	海	トウゴロウイワシ		○	12.5		36.7		
		海	メバル(種不詳)							1.2
	カサゴ目	海	メバル属							3.7
		海	アイナメ属							2.5
		不	ヒイラギ属		12.5			24.5		
	スズキ目	海・汽	キチヌ			12.5				25.0
		不	ヘダイ亜科					8.3		
		海	シロギス			6.3			12.2	
		海	イカナゴ	100.0				92.9		92.6
		海	ナベカ			9.4			8.2	
		不	ミミズハゼ属					7.1		
		不	ハゼ科		66.7	21.9				
カレイ目	海	アカシタビラメ							25.0	

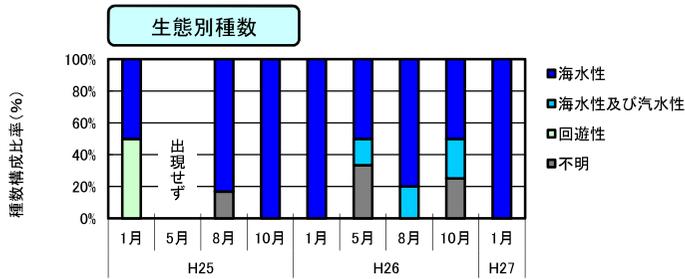
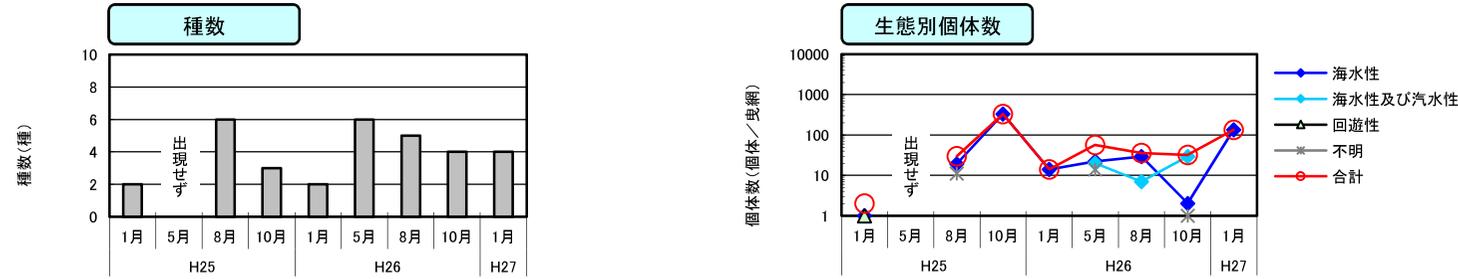


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種(同定不能種)、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月の上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、回:回遊性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 3)魚卵・稚仔魚(稚仔魚)

③⑤有明海(Stn57)

- 種数は0～6種で、生態別には主に海水性、回遊性で構成されていた。
- 個体数は0～326個体/曳網で、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性、回遊性で構成されていた。
- 主な種はカタクチイワシ、イカナゴ、コノシロ、アユ、メバル属、キチヌ、ハゼ科などであった。



主な出現種 (Main species appearing)

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年
			1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
主な出現種 (%)	ニシン目	海・汽	サツバ							19.4	
		海・汽	コノシロ					35.7			
		海	カタクチイワシ		13.3	98.2		25.0	33.3	3.1	
	サケ目	回	アユ	50.0							
	トウゴロウイワシ目	海	トウゴロウイワシ			10.0					
	カサゴ目	海	カサゴ								0.7
		海	メバル属	50.0				7.1			0.7
		海	ホウボウ								0.7
	スズキ目	海・汽	キチヌ								90.6
		不	ヘダイ亜科						8.9		
		海	シロギス			20.0	1.5			16.7	
		海	イカナゴ					92.9			97.8
		海	イソギンボ						12.5	3.1	
		海	ナベカ				0.3			5.6	
		海	ナベカ属			16.7				25.0	
不	ハゼ科			36.7			16.1				

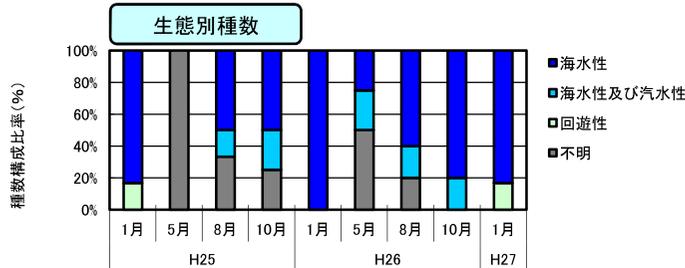
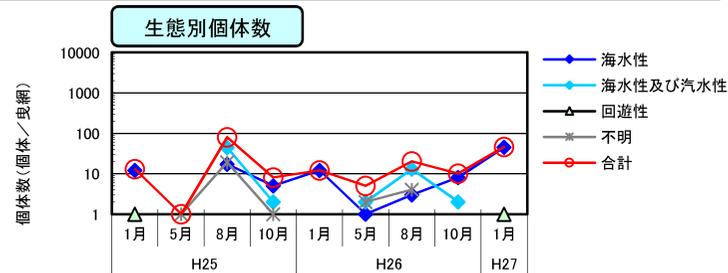
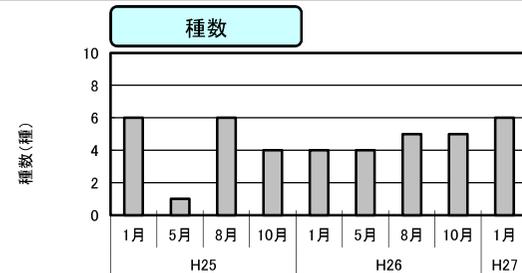


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種(同定不能種)、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月の上位5種となった種の個体数構成比率(%)を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、回:回遊性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 3)魚卵・稚仔魚(稚仔魚)

③⑥有明海(Stn58)

- 種数は1～6種で、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。
- 個体数は1～80個体/曳網で、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。
- 主な種はイカナゴ、サツパ、カタクチイワシ、コノシロ、フグ科などであった。



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年	
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	
主な出現種 (%)	ニシン目	海・汽 サツパ			55.0				65.0		
		海・汽 コノシロ						40.0			
		海 カタクチイワシ	7.7			50.0			5.0	50.0	
	サケ目	回 アユ	7.7								
		トウゴロイワシ目	海 トウゴロイワシ			7.5					
	カサゴ目	海 カサゴ								4.3	
		海 メバル(種不詳)								2.2	
		海 ムラソイ						8.3			
		海 メバル属	30.8					16.7			
		海 アイナメ属	7.7					25.0		2.2	
		海 アナハゼ亜科	7.7								
		スズキ目	回 スズキ								2.2
			海・汽 キチヌ				25.0				20.0
			海 シロギス						5.0		10.0
			海 イカナゴ	38.5					50.0		76.1
海 ダイナンギンポ									13.0		
海 ナベカ				8.8	12.5		20.0	5.0			
海 ナベカ属				5.0							
海 ネズツボ科									10.0		
カレイ目	不 ハゼ科			21.3			20.0	20.0			
	海 アカシタピラメ								10.0		
フグ目	不 ウシノシタ科				12.5						
	不 フグ科			100.0			20.0				

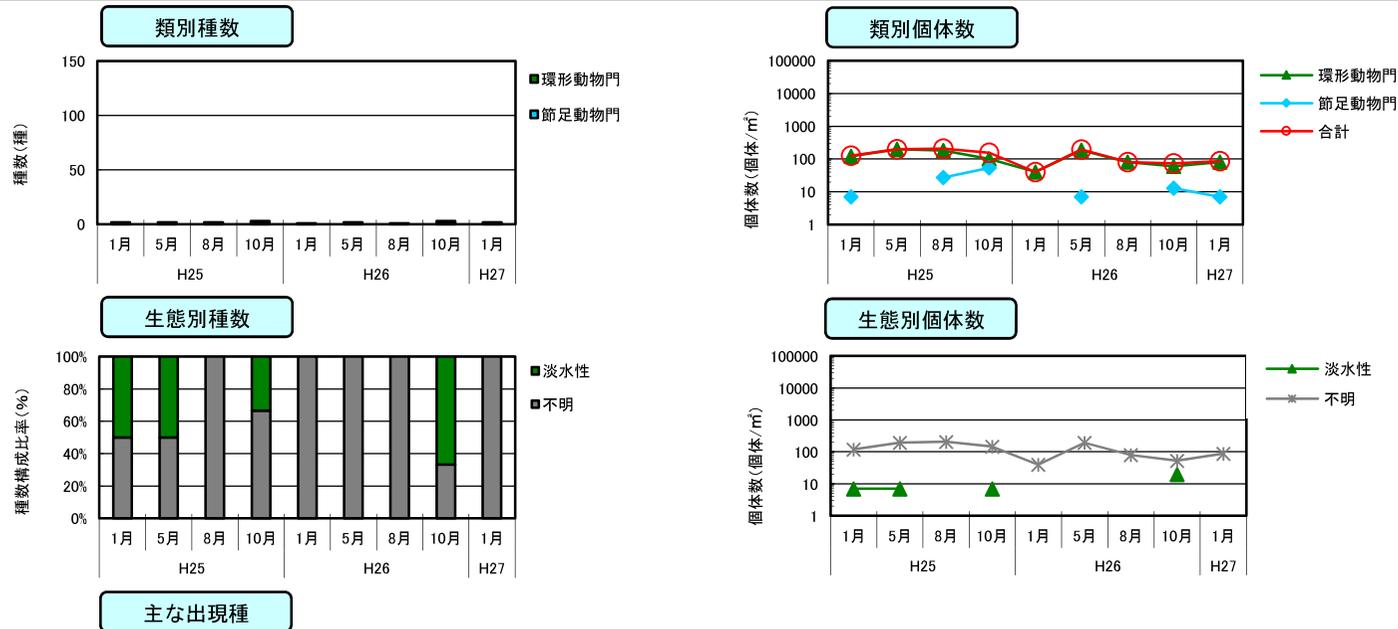
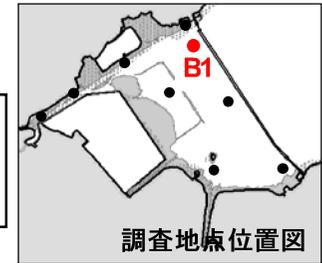


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において生息する水域に生息する可能性のある種を「〇〇性及び〇〇性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種(同定不能種)、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月の上位5種となった種の個体数構成比率(%)を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、回:回遊性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

①調整池(B1)

- 種数は1～3種で環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は40～207個体/m<sup>2</sup>で環形動物門が多く、生態別には主に不明で構成されていた。
- 主な種はイトミミズ科などであった。



項目	調査年月									
	平成25年				平成26年				平成27年	
	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	5月
主な出現種 (%)	環形動物門	淡	3.5	87.0	64.9	100.0	96.4	100.0	72.6	92.0
		不	94.5	96.5	87.0	64.9	100.0	96.4	100.0	72.6
	節足動物門	淡	5.5		4.5				17.8	
		不		13.0	30.5		3.6			8.0

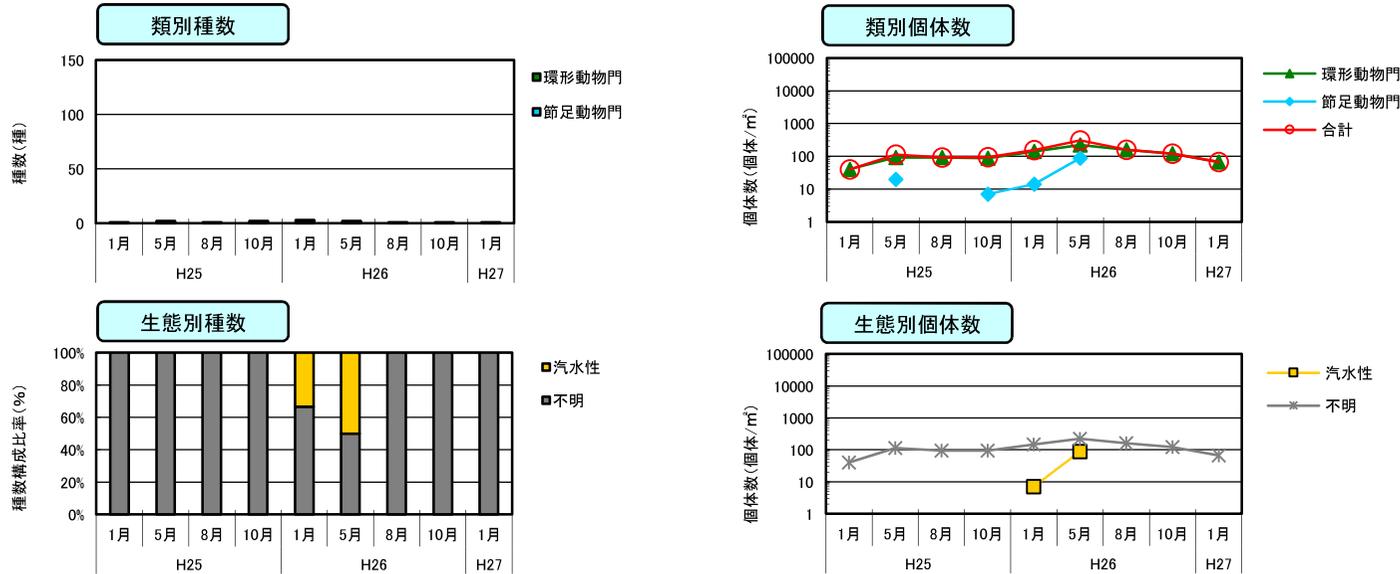
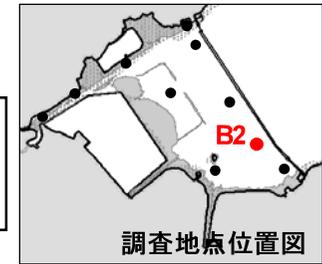


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

②調整池(B2)

- 種数は1～3種で環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に汽水性で構成されていた。
- 個体数は40～307個体/m<sup>2</sup>で環形動物門が多く、生態別には主に不明で構成されていた。
- 主な種はイトミミズ科などであった。



主な出現種

項目	調査年月				平成25年				平成26年				平成27年
	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
主な出現種 (%)	環形動物門	不	イトミミズ科	100.0	82.3	100.0	92.6	90.9	71.7	100.0	100.0	100.0	100.0
	節足動物門	汽	タイリクドロクダムシ					4.5	28.3				
		不	ユスリカ亜科		17.7		7.4	4.5					

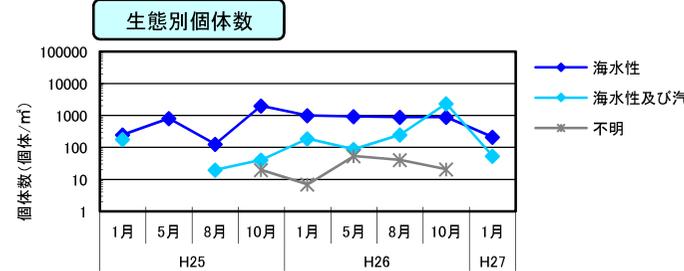
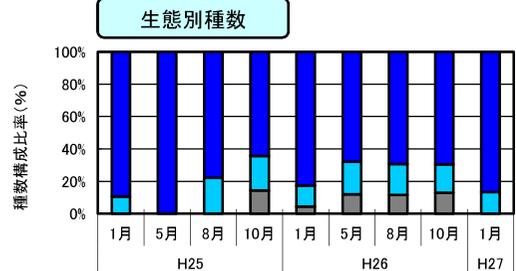
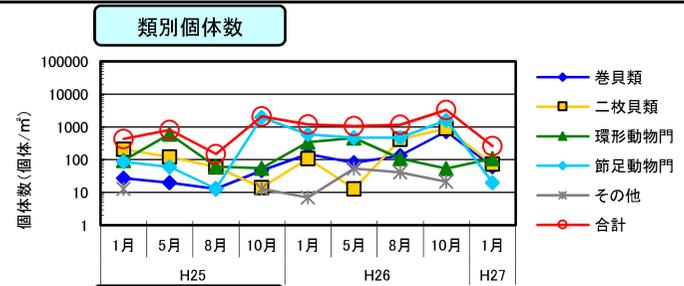
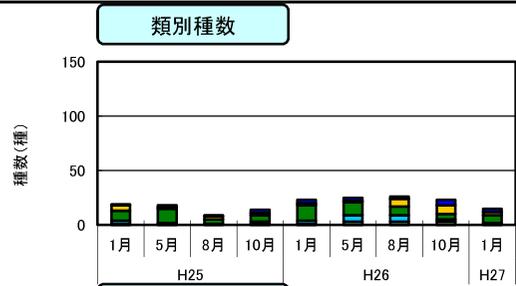
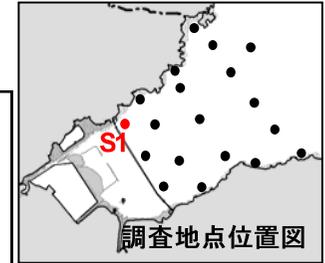


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

③諫早湾(S1)

- 種数は9～26種で環形動物門、二枚貝類が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は147～3,310個体/m<sup>2</sup>で節足動物門、環形動物門、二枚貝類が多く、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。
- 主な種はシズクガイ、クシカギゴカイ、アリアケドロクダムシ、サルボウガイ、ホトギスガイ、サラサフジツボ、ドロフジツボなどであった。



主な出現種

項目	調査年月												
	平成25年				平成26年				平成27年				
	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
刺胞動物門	不				0.6								
	海・汽				1.2				4.4				
	海・汽	6.3		8.8					10.9		19.3		17.8
二枚貝類	海			0.6									
	海・汽	35.8							6.2		3.2		
	海	4.7									7.6		
環形動物門	海			8.8					19.9		13.3		
	海			14.9	27.2			8.3					22.7
	海												10.2
	海		9.9			7.3	6.3						10.2
	海	4.7	26.4	27.2	1.0		17.5						10.2
	海		25.7										
節足動物門	海							9.4					
	海								6.3				
	海												
	海・汽				93.4			17.7					
	海												47.9
	海	11.0				41.7	39.3						
主な出現種 (%)	海								18.2				
	海			8.8									
	海	7.7	4.1										
	海・汽					7.3							



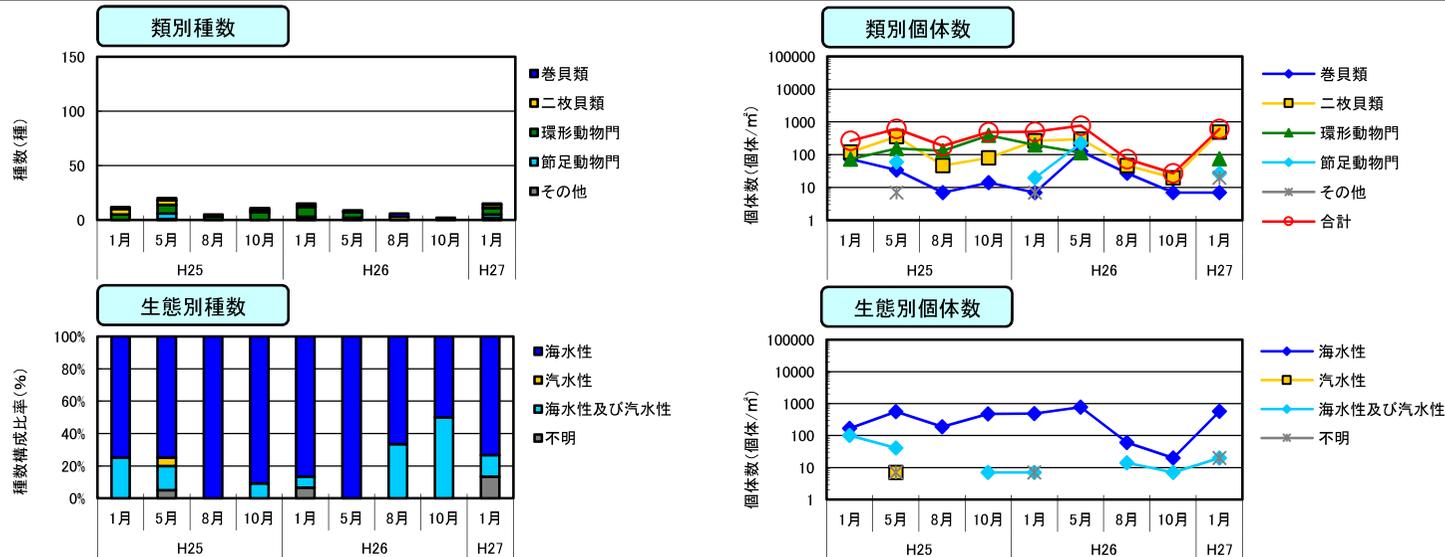
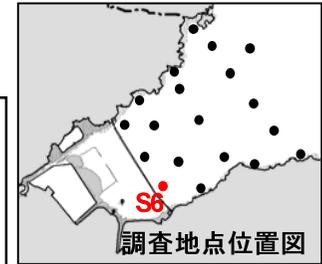
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

(7)水生生物 4)底生生物

④諫早湾(S6)

- 種数は2～20種で環形動物門、二枚貝類、巻貝類が多く、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。
- 個体数は27～769個体/m<sup>2</sup>で二枚貝類、環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はシズクガイ、ヒメカノコアサリ、トライミズゴマツボ、フクロハネエラスピオ、*Pseudopolydora* spp.などであった。



主な出現種

項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
環形動物門	不									2.1
	海・汽			4.4						
	海・汽	22.4							9.5	25.9
	海			3.7						
	海								17.6	
	海								9.5	
	海								16.6	
	海・汽	10.1							9.5	
	海			3.7						
	海	10.1	43.8	25.1	8.2	27.9	39.0	27.0		67.2
二枚貝類	海									3.1
	海	17.5	4.4		8.2				27.0	74.1
	海									9.8
	海	10.1	6.6		4.1	6.6				
	海			8.7					6.1	
	海									3.3
	海				7.0					
	海				4.1				6.1	
	海				60.4					
	海									6.6
環形動物門	海									8.0
	海									8.0
	海									5.5
	海									10.6
	海				3.7					
	海									4.4
	海・汽									28.6
	海・汽									9.1

主な種



シズクガイ  
(二枚貝類・海水性)

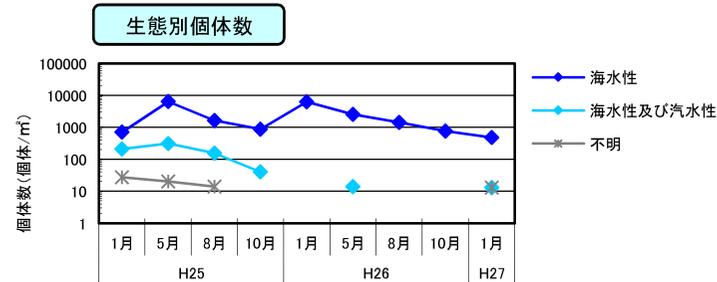
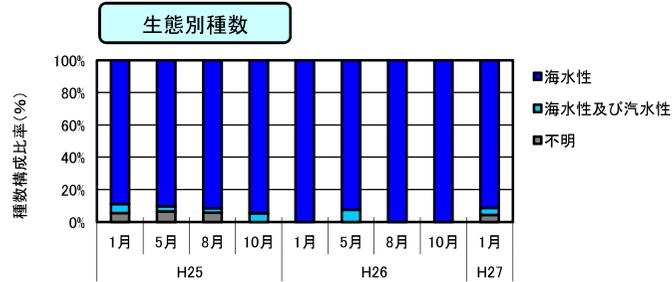
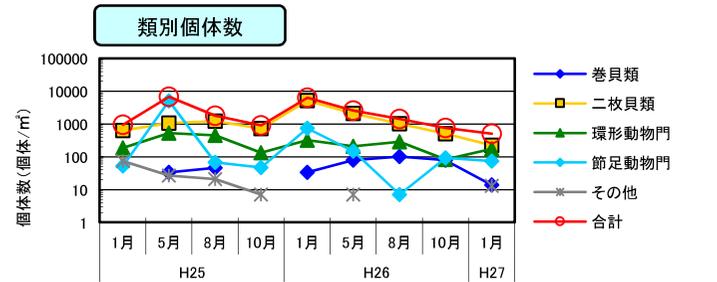
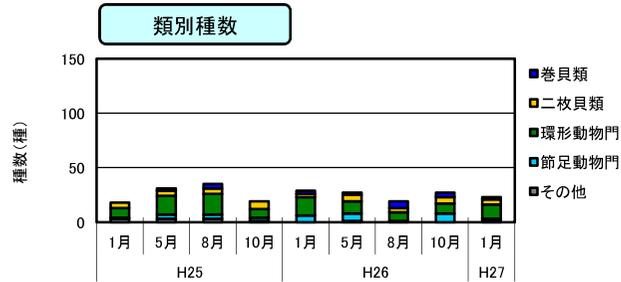
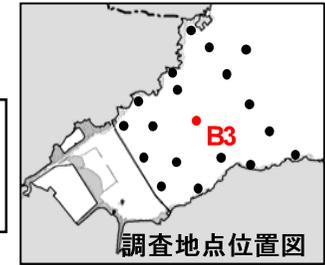
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性及び汽水性、淡・汽:淡水性及び汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (7)水生生物 4)底生生物

### ⑤諫早湾(B3)

- 種数は18～35種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は502～6,756個体/m<sup>2</sup>で二枚貝類、節足動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はヒメカノコアサリ、シズクガイ、アリアケドロクダムシなどであった。



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
主な出現種 (%)	巻貝類	海 ノミエナ属				○		○	5.2	
		海 ヨコヤマキセウタガイ					2.1	4.2	○	
	二枚貝類	海・汽 サルボウガイ	21.8	4.6	8.5	4.3				
		海 ホトギスガイ	14.0	3.7	12.9					4.3
		海 チリハギガイ科				○				
		海 チヨノハナガイ					8.6	○		
		海 シズクガイ		3.7	45.1	25.3		34.0	○	26.0
		海 イヨスダレガイ				○			26.2	○
		海 ヒメカノコアサリ	25.3	3.7	○	43.4	49.7	47.2	44.1	32.9
		海 チロリ	○		○	2.9	○			○
		海 Gheude spp.	5.6	○	○			2.3	○	
		海 オウギゴカイ		○			○		○	6.6
	環形動物門	海 カタマガリギボシイソメ	○	○	7.8	2.9	○	○	○	○
		海 フクロハネエラスピオ		○	○	3.6	○	○	6.5	○
		海 Tharyx spp.			3.3					
		海 ダルマゴカイ	○	○	○	○	○	○	3.7	○
		海 ホソナギサクマ					○	○		9.4
		海 クビナギサクマ	5.6		○	○	3.7	2.6		5.1
		海 アリアケドロクダムシ		75.0			7.0	○		
		海 セジロムラサキエビ								4.3

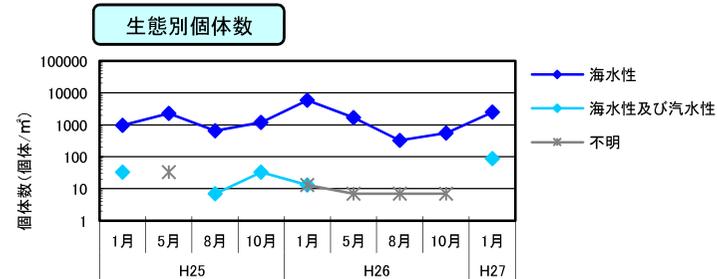
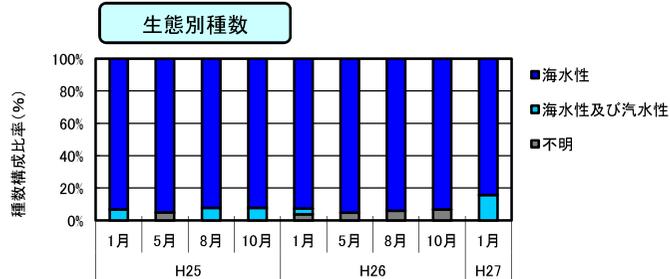
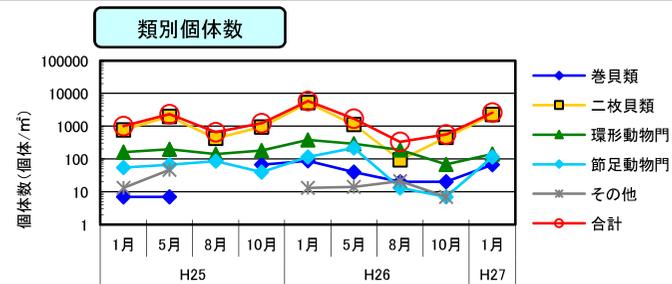
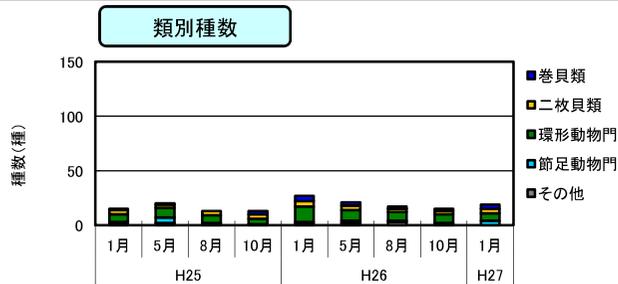
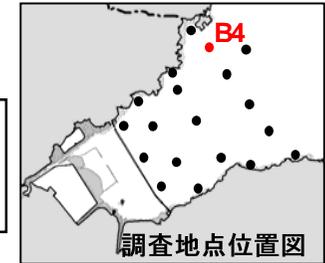


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑥諫早湾(B4)

- 種数は13~27種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は335~5,882個体/m<sup>2</sup>で二枚貝類、環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はヒメカノコアサリ、シズクガイ、ダルマゴカイなどであった。



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
主な出現種 (%)	環形動物門									
	巻貝類									
	海									
	海									
	海									
	海									
	海									
	二枚貝類									
	海・汽									
	海									
	海									
	海									
	環形動物門									
	海									
	海									
	海									
	海									
	海									
	海									
	海									
	海									
	海									
	節足動物門									
	海									
	海・汽									
	海									



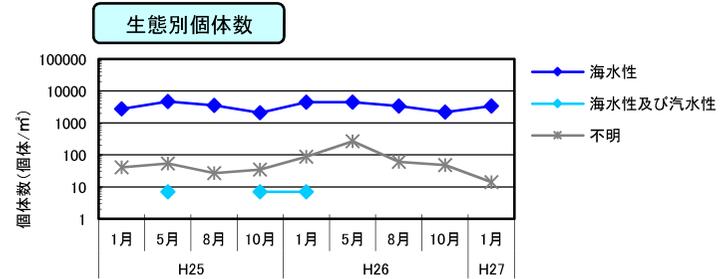
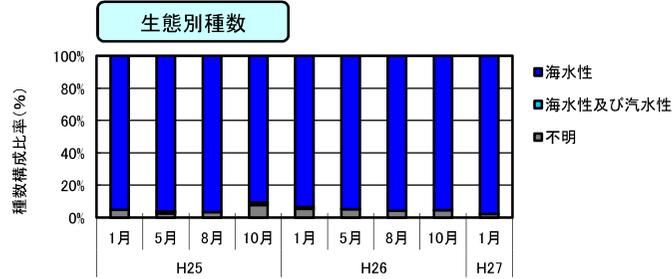
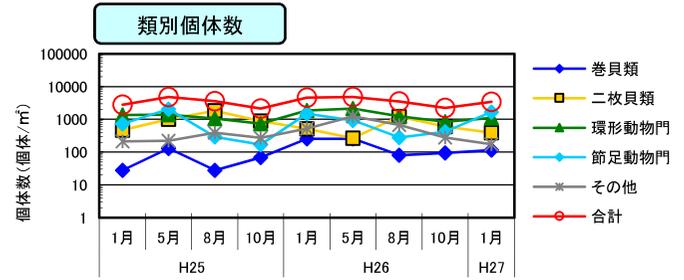
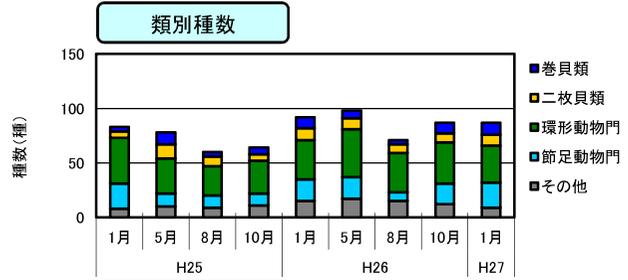
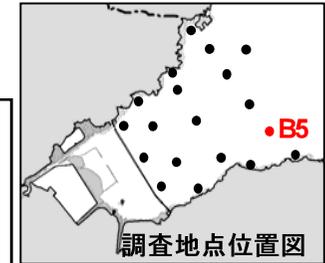
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (7)水生生物 4)底生生物

### ⑦諫早湾(B5)

- 種数は60～98種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は2,125～4,794個体/㎡で環形動物門、二枚貝類、節足動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はヤマホトギスガイ、クダオソコエビ、カザリゴカイ亜科などであった。



#### 主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年
	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月		
環形動物門	海	リネウス科	○	○	○	○	○	○	○	○	
	不	針紐虫目	○	○	○	○	○	○	○	○	
二枚貝類	海	ビロウドマクラガイ	6.9	3.5	○	○	○	○	○	○	
	海	ヤマホトギスガイ	8.2	12.9	46.2	38.0	○	○	31.3	20.4	6.8
環形動物門	海	ナガタンザクゴカイ	○	○	○	○	○	○	○	3.6	○
	海	モロテゴカイ	○	3.2	○	6.3	4.5	3.5	○	4.2	8.4
	海	<i>Brada</i> spp.	○	○	○	○	○	○	○	5.2	○
	海	<i>Asychis pigmentata</i>	○	○	2.4	2.5	○	○	○	○	○
	海	<i>Sabellaria tsukavai</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	4.1
	海	カザリゴカイ	10.8	○	○	○	○	○	○	○	○
	海	<i>Sosane</i> spp.	8.9	○	○	○	○	○	○	○	○
	海	カザリゴカイ亜科	○	11.3	15.1	6.9	18.1	16.9	○	○	○
節足動物門	海	コブスガメ	○	○	3.6	○	○	○	3.8	5.4	11.6
	海	エンボンソコエビ属	○	○	○	○	6.9	○	○	○	○
	海	ニホンクダオソコエビ	○	○	○	○	○	6.5	○	○	○
棘皮動物門	海	クダオソコエビ	14.8	36.7	○	○	15.3	○	3.6	24.6	○
	海	カキモセトデ	○	○	7.1	6.0	○	12.3	8.3	○	○
脊索動物門	海	<i>Amphura</i> spp.	○	○	○	○	○	○	4.8	3.9	○
	海	カンテンボヤ	○	○	○	○	4.2	○	○	○	○

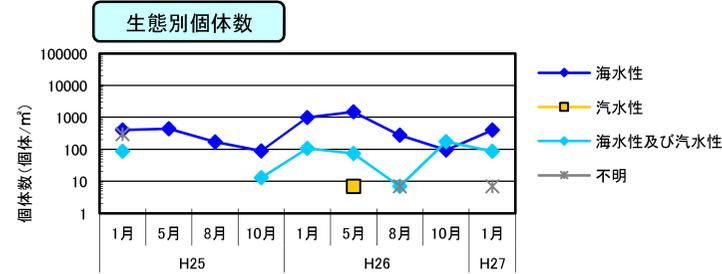
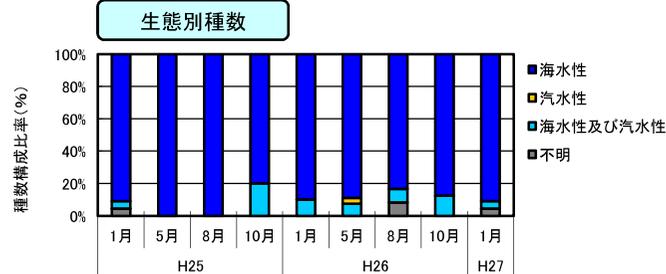
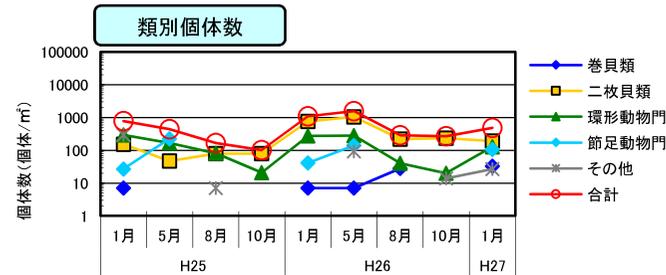
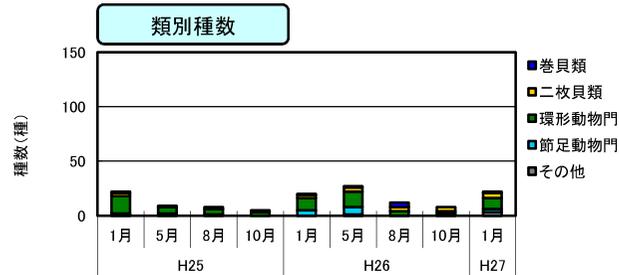


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑧有明海(Stn4)

○種数は5~27種で環形動物門、二枚貝類、巻貝類が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。  
 ○個体数は101~1,561個体/m<sup>2</sup>で二枚貝類、環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。  
 ○主な種はヒメカノコアサリ、サルボウガイ、多岐腸目、アシビキツバサゴカイ、ホソナギサクーマなどであった。



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年	
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	
主な出現種 (%)	環形動物門	不	多岐腸目	91.7							
	環形動物門	海	リネウス科		4.2						
	巻貝類	海	シマメノワケガイ								6.7
		海	ツメガイ							2.1	
		海	アミメガイ							2.1	
		不	トウワケガイ							2.1	
		海	ヨコヤマセウガイ	○						2.1	
	二枚貝類	海・汽	サルボウガイ	11.2		12.9	8.5	3.8	2.4	64.8	17.8
		海	ニカガラスガイ							4.9	○
		海	チロコガイ	○						23.8	
		海	シラウガイ	3.7	10.7		23.8			3.7	18.8
		海	スダレガイ属							2.4	18.4
	海	オニアサリ								2.4	
	海	ヒメカノコアサリ								15.0	
	環形動物門	海	Glyme spp.			66.3	38.1	43.6	33.1		8.2
環形動物門	海	Hamobae spp.								2.0	
	海	チロコ							5.1		
	海	チロコ							○	4.9	
	海	Glyme spp.	11.2	13.6		6.9			○	○	
	海	カシノコガイ	4.6	6.1					○	○	
	海	Nanobae spp.	○						○	2.1	
	海	ウチワガイ	○		4.2					2.4	
	海	コノハシガサガイ	○	6.1					○		
	海	フクロハネガイ	○	○	4.2				11.7	○	
	海	イトモガイ	○	6.1						4.0	
	海	ホシガイ	○							6.9	
	海	アシビキツバガイ				31.3		7.3		○	
	海	ダレコガイ	○			4.2	6.9			○	
	海	ホソナギサクーマ								○	
	節足動物門	海	オシロイガイ			46.9					6.4
棘皮動物門	海	ホソコエビ								○	
	海	カササキヒトデ							6.6	13.7	
海	カササキヒトデ								2.6	○	

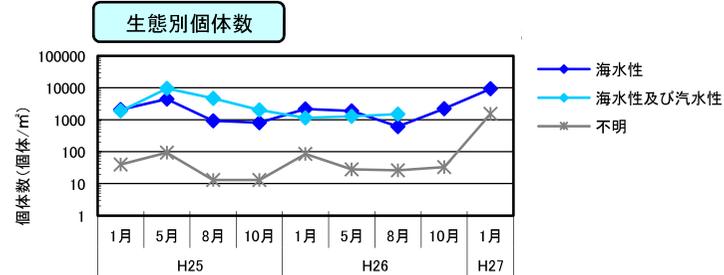
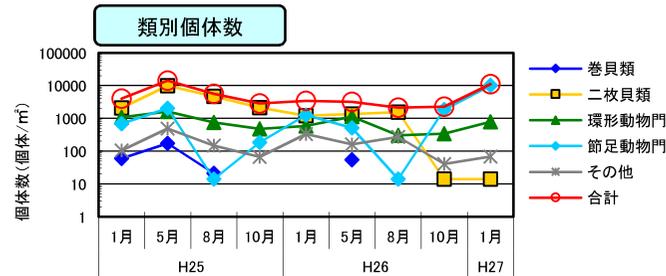
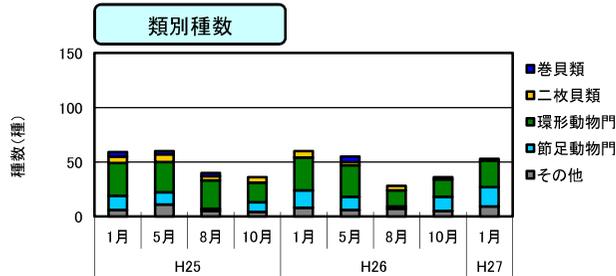
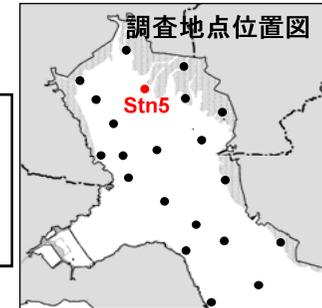


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑨有明海(Stn5)

- 種数は28～60種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は2,143～14,196個体/m<sup>2</sup>で二枚貝類、節足動物門が多く、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。
- 主な種はサルボウガイ、コブスガメなどであった。



項目	調査年月	平成25年			平成26年			平成27年		
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
二枚貝類	海・汽	サルボウガイ	46.7	67.4	82.9	71.0	33.3	39.9	70.6	
	海	コケガサスガイ				2.1	○	○		
	海	ヒバリガイ	3.5	○	○	○	○	○	○	
	環形動物門	海	<i>Harmohoe</i> spp.		○	○	○	8.7	○	○
		海	<i>Glycera</i> spp.			0.8	○	○	○	○
		海	ケンサキスシオ	○	○	○	○	○	○	5.6
		海	ブクロハネユスシオ	○	○	○	○	○	○	1.8
		海	イトユスシオ	○	○	0.8	○	○	○	○
		海	ミズヒキゴカイ	○	○	0.8	○	○	4.6	4.1
		海	ダルマゴカイ	○	○	0.8	○	○	○	○
		海	<i>Heteromastus</i> spp.	○	○	2.9	2.5	○	○	○
		海	<i>Melobananus</i> spp.	12.3	1.5	1.4	○	4.1	○	○
		海	チンチロフサゴカイ	○	○	○	3.0	○	○	1.8
	節足動物門	海	<i>Asabellides</i> spp.		1.5	○	○	○	○	○
		海	コブスガメ	○	○	○	1.8	2.9	○	75.3
海		ユンボソコエビ類	4.0	○	○	○	4.1	○	15.6	
海		アリアケドロクダムシ	○	○	○	○	7.3	○	○	
不		ドロクダムシ類	○	○	○	○	○	○	13.8	
海		ホソヨロコエビ	○	○	○	○	21.8	○	14.4	
海		クダオソコエビ	○	11.0	○	○	○	○	15.2	
海		クダオソコエビ類	4.0	1.8	○	○	○	○	○	
海		アサシシエ	○	○	○	○	○	○	2.0	
海		クサヤコホシヒトメ	○	○	○	○	7.1	○	5.6	
脊索動物門	海	マンハッタンゴキ	○	○	1.3	○	○	2.9	○	
	海	フクロゴキ	○	○	○	○	○	2.9	○	



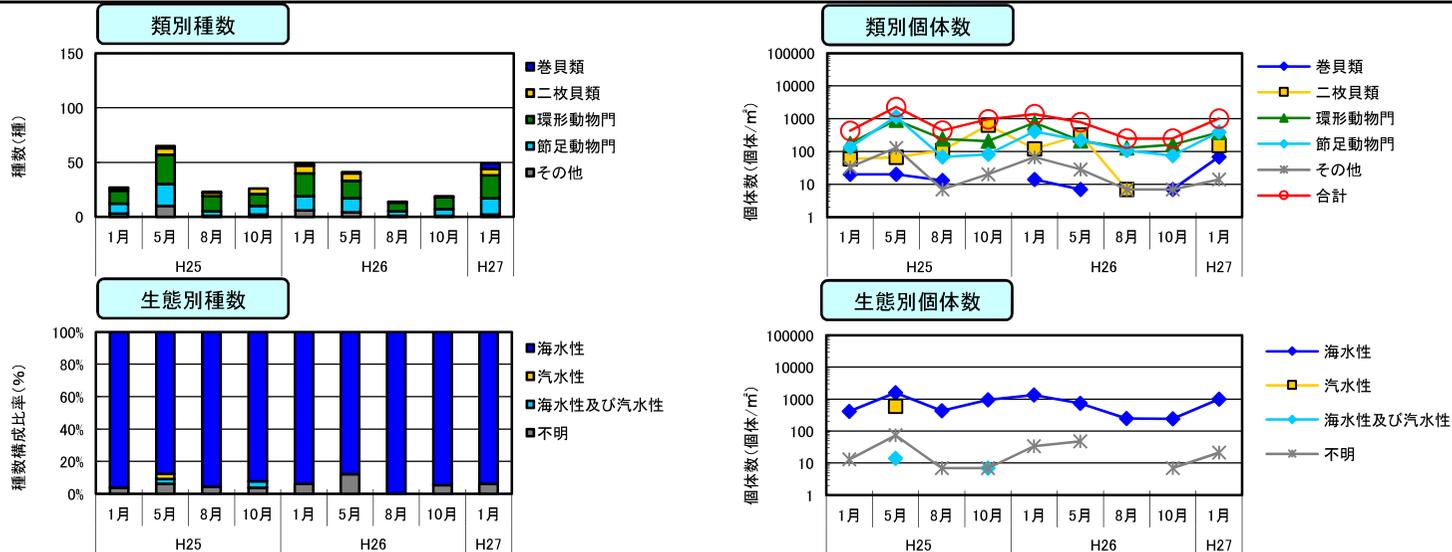
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑩有明海(Stn20)



○種数は14～65種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。  
 ○個体数は248～2,257個体/m<sup>2</sup>で環形動物門、二枚貝類、節足動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。  
 ○主な種はモロテゴカイ、ヒメカノコアサリ、チヨノハナガイ、シズクガイ、Amphicteis spp.、タイリクドロクダムシ、クダオソコエビ属などであった。



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
二枚貝類	海 ウメノハナガイ				3.5					4.7
	海 チヨノハナガイ			18.4						
	海 シズクガイ	12.6								4.7
	海 ヒメカノコアサリ				61.7		29.1			
	海 Amphicteis spp.				4.9					4.7
	海 Glycide spp.				15.1					
	海 クラカサコエビ								5.2	
	海 コノハシロガサゴカイ	6.4								
	海 フクロハネエラスピオ	7.8				11.7	6.0	8.1	8.0	
	海 モロテゴカイ		3.2	7.6	7.0		4.2	19.0	29.2	17.2
海 ダルマゴカイ		8.9								
海 Mediomastus spp.			7.6							
海 ヒヨウモンクセフシゴカイ		3.2								
海 Terebellites spp.		3.2								
海 Amphicteis spp.		6.4			15.2					
節足動物門	海 コブスガメ			6.2			3.5	13.3		
	海 クビナガスガメ		9.5		2.8					
	海 ユンボソコエビ属			4.7			6.8			
	汽 タイリクドロクダムシ			26.0						
	海 ホソコエビ					7.3				
	海 ホソコエビ属			4.1			3.5			
	海 クダオソコエビ属							19.0		10.0
海 ドロコエビ				6.2		7.8	6.0	8.1	13.2	14.6
海 カドソコエビ									5.2	

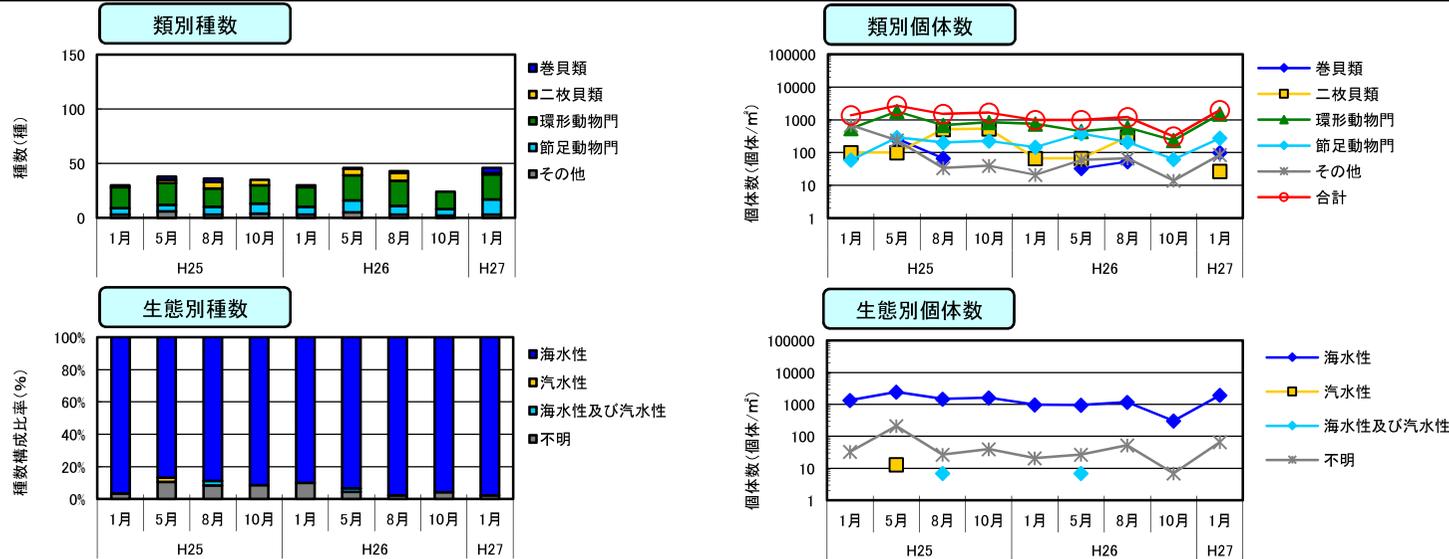


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

①有明海(Stn22)

- 種数は24~46種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は313~2,715個体/m<sup>2</sup>で環形動物門、その他が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はヒメカノコアサリ、イトエラスピオ、チヨノハナガイ、カタマガリギボシイソメ、フクロハネエラスピオ、ドロココエビ、トゲイカリナマコなどであった。



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年	
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	
巻貝類	海	ヨコヤマキセウタガイ	7.4	○	○	○	○	○	○	○	
	海	チヨノハナガイ	○	○	27.1	○	○	○	○	○	
二枚貝類	海	シズタガイ	5.7	○	○	○	○	○	○	○	
	海	ヒメカノコアサリ	○	○	29.9	○	○	15.8	○	○	
環形動物門	海	チロリ	○	○	○	○	○	○	8.6	○	
	海	<i>Glycyde</i> spp.	○	○	20.4	8.1	4.7	7.4	4.9	○	
	海	クシカサゴカイ	○	○	○	○	4.7	○	○	○	
	海	アンボシギボシイソメ	○	○	○	○	○	○	6.4	○	
	海	カタマガリギボシイソメ	○	○	○	○	○	6.1	○	5.3	
	海	フクロハネエラスピオ	○	○	○	○	○	6.1	○	15.0	
	海	イトエラスピオ	6.2	○	○	20.2	32.2	8.1	10.4	6.4	7.6
	海	<i>Prionospio</i> spp.	○	34.4	○	○	○	○	7.6	○	22.5
	海	ドロココエビ	○	○	○	○	○	○	○	○	8.0
	海	モロコシガイ	7.7	6.4	4.9	6.9	11.4	○	○	8.6	○
	海	<i>Magelma</i> spp.	○	○	○	○	○	○	○	○	4.0
	海	アシビネツバサゴカイ	○	○	○	○	4.7	○	○	○	○
節足動物門	海	<i>Heteromastus</i> spp.	○	○	○	○	○	○	○	○	4.0
	海	<i>Mediomastus</i> spp.	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	海	クビナガスガメ	6.2	4.4	○	○	○	○	○	○	○
	海	クダオソコエビ	○	○	4.5	5.3	○	○	○	○	○
棘皮動物門	海	クダオソコエビ属	○	○	○	○	○	6.1	○	○	○
	海	ドロココエビ	○	○	4.0	○	10.8	23.6	6.5	8.6	4.0
	海	サンバツソコエビ属	○	4.7	○	○	○	○	○	○	○
海	トゲイカリナマコ	44.9	○	○	○	○	○	○	○	○	

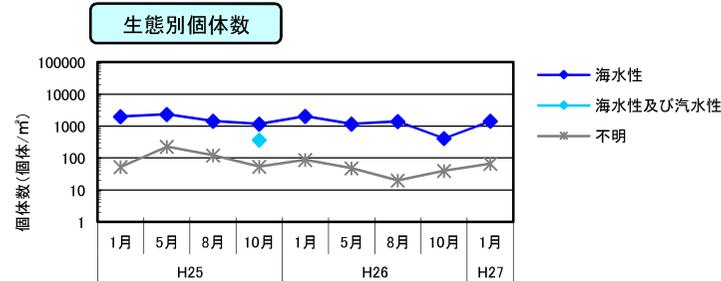
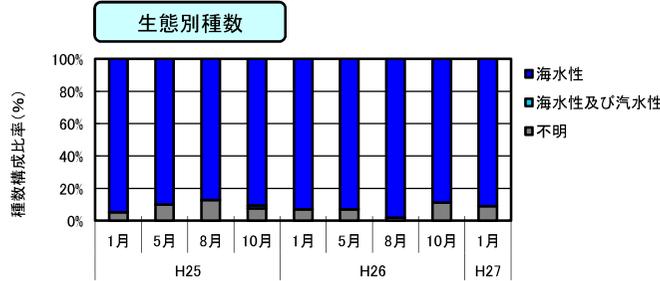
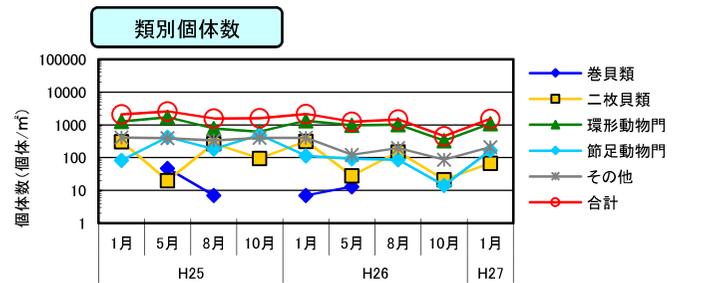
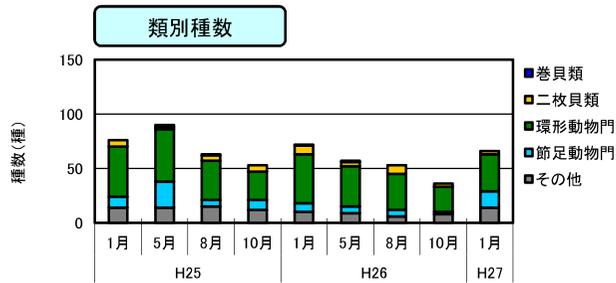


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑫有明海(S29)

- 種数は36～90種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は450～2,577個体/m<sup>2</sup>で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種は*Eunice* spp.、*Asabellides* spp.、ビロウドマクラガイ、ケンサキスピオ、ヨーロッパフジツボなどであった。



項目	調査年月												
	平成25年				平成26年				平成27年				
	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	5月	10月		
主な出現種 (%)	二枚貝類	海	ビロウドマクラガイ	12.9		5.5	○	10.2			4.6		○
		海	ユキミノ属			8.5						○	
	環形動物門	海	<i>Harmaloe</i> spp.	○	○	○	○	○	○	○	○	4.4	○
		海	ケンガシリス	○	4.2	○	○	○	○	○	○	○	○
		海	<i>Eunice</i> spp.	7.4	7.3	○	11.6	11.1	26.6	26.7	11.8	14.1	4.1
		海	コンボウヒメエラゴカイ										4.4
		海	フタエダヒメエラゴカイ	4.2	4.2	○	3.7	○	○	3.7	○	○	○
		海	ケンサキスピオ	○	○	○	○	○	8.1	○	7.3	16.2	
		海	<i>Prionospio</i> spp.	○	○			4.3	4.3			○	
		海	<i>Polygordius</i> spp.	7.4	○			6.5					
		海	<i>Eupolymnia</i> spp.	○	○				○	○			7.9
		海	<i>Amphitritinae</i>									4.4	
	海	<i>Asabellides</i> spp.		12.4	12.7			4.9					
	海	<i>Lysippe</i> spp.	○		○			○	13.3	8.9	○		
節足動物門	海・汽	ヨーロッパフジツボ				22.8							
	海	ヒトツメスガメ	○	○	8.1	○	○	○	○	○	○	○	
棘皮動物門	海	<i>Amphitrua</i> spp.	10.6	4.7	9.1	13.3	10.2	4.9	6.9	4.4	3.9		
	海	クサイロチビクモヒトデ	○	○		3.7	○	○	○	○	○	○	

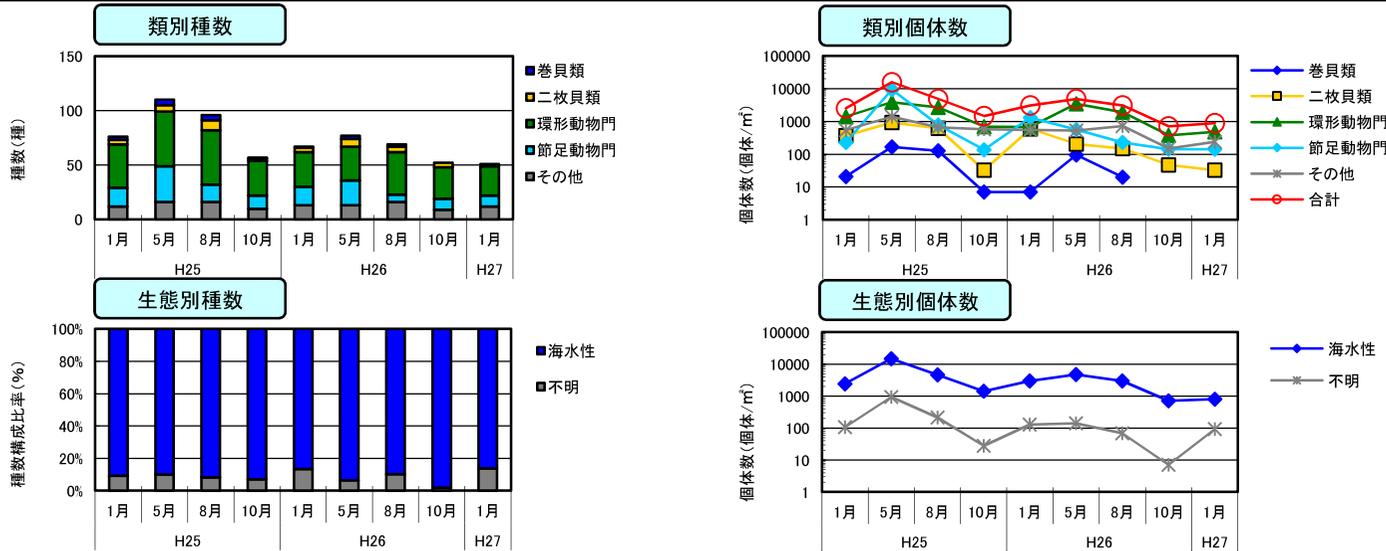


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑬有明海(Stn39)

- 種数は51~110種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は711~15,641個体/m<sup>2</sup>で環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はカザリゴカイ、クサイロチビクモヒトデ、*Cirrophorus branchiatus*、ヒトツメスガメ、ユンボソコエビ属、クダオソコエビ属、チビクモヒトデ科などであった。



項目	調査年月											
	平成25年				平成26年				平成27年			
	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月			
二枚貝類	海	ピロウドマクラガイ	9.5	3.5	○	16.3	○	○	○	○	○	
	海	ユキミノ属	○	○	4.4	○	○	○	○	○	○	
	海	サンハチウロコムシ	○	○	○	○	3.0	○	○	○	○	
	海	ケナガシラス	○	○	○	3.7	○	○	○	○	○	
	海	<i>Typusilla</i> spp.	5.8	○	4.4	○	○	○	○	○	○	
	海	アソビシギボシイソメ	○	○	○	6.4	○	5.1	4.4	○	8.1	
	海	<i>Cirrophorus branchiatus</i>	13.1	○	○	○	○	○	○	○	○	
	海	ミスヒキゴカイ	○	○	○	5.1	○	○	○	○	○	
	海	<i>Eulymenae</i>	○	○	○	○	○	○	4.2	○	○	
	海	カザリゴカイ	○	○	○	10.3	○	44.8	20.5	○	○	
	海	<i>Asabellides</i> spp.	○	○	○	8.4	○	○	○	○	7.5	
	海	<i>Chone</i> spp.	○	○	○	○	○	○	○	○	4.5	
	節足動物門	海	ヒトツメスガメ	○	○	7.7	○	3.0	3.3	○	5.6	○
		海	ユンボソコエビ属	○	○	○	○	28.9	○	○	○	○
		海	ソコエビ属	○	3.6	○	○	○	○	○	○	○
海		クダオソコエビ	○	4.3	○	○	○	○	○	○	○	
海		クダオソコエビ属	○	35.1	○	○	○	○	○	○	○	
海		テナガワレカラ	○	○	○	○	2.8	○	○	○	○	
海		トダワレカラ	○	3.7	○	○	○	○	○	○	○	
海		ニホンソツブムシ	○	○	4.4	○	○	○	○	○	○	
海		ソコシラエビ	○	○	○	○	○	○	○	4.6	○	
海		ヒメケブカガニ	○	○	○	○	○	○	○	○	4.5	
棘皮動物門	海	<i>Amphura</i> spp.	5.8	○	6.0	13.0	○	○	7.2	4.6	4.5	
	海	クサイロチビクモヒトデ	7.6	○	○	21.7	10.1	5.9	9.8	○	8.9	
	海	チビクモヒトデ科	○	○	○	○	○	○	○	○	5.6	
	海	トダクモヒトデ属	○	○	○	○	○	○	○	○	4.6	

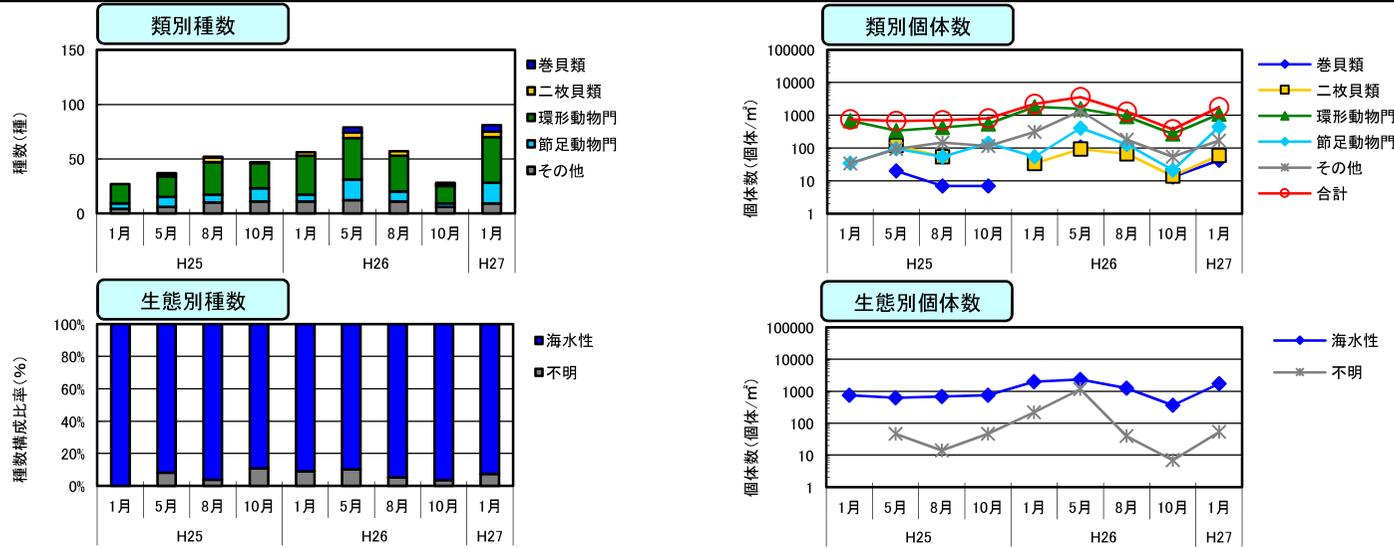


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑭有明海(Stn13)

- 種数は27~81種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は370~3,540個体/m<sup>2</sup>で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はケンサキシピオ、チヨノハナガイ、*Eunice* spp.、*Lysippe* spp.、イカリナマコ科などであった。



**主な出現種** (Main Occurring Species)

項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
環形動物門	海	○	4.9		○					
	不					7.2				
二枚貝類	海		4.0							
	海			3.9						
環形動物門	海		2.2	13.9						
	海				○					
	海				○					
	海				○					
	海				○					
	海				○					
	海				○					
	海				○					
	海				○					
	海				○					
	海				○					
	海				○					
主な出現種 (%)	海								5.4	4.5
	海								7.7	10.8
	海									7.3
	海									7.7
	海								4.2	○
	海								9.1	13.0
	海								18.3	24.1
	海								9.4	10.8
	海								3.2	6.2
	海									4.0
	海									13.0
	海									4.0
海									4.0	
海									4.0	
海									2.7	
海									4.0	
海									4.1	
海									3.9	
海									4.0	
海									4.0	
海									4.1	
海									3.9	
海									3.9	
海									4.0	

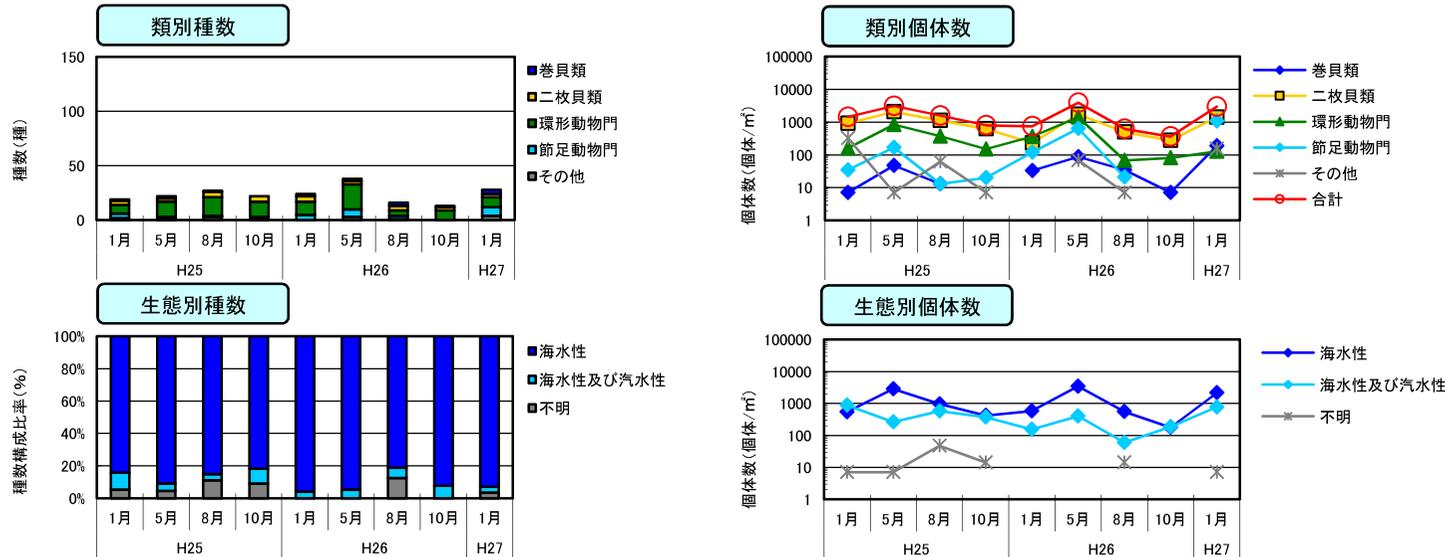


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑮有明海(Stn53)

○種数は13~38種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。  
 ○個体数は362~3,864個体/m<sup>2</sup>で二枚貝類、環形動物門が多く、生態別には主に海水性、海水性及び汽水性で構成されていた。  
 ○主な種はサルボウガイ、シズクガイ、ヒメカノコアサリなどであった。



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月
主な出現種 (%)	巻貝類									
	二枚貝類	60.9	8.4	36.8	45.2	20.8	10.0	9.6	51.7	25.9
	環形動物門									
	節足動物門									
	その他									
	合計									
	海水性									
	海水性及び汽水性									
	不明									
	シズクガイ		57.3	29.6			30.2	31.0		
	サルボウガイ							36.4	5.5	10.9
	ヒメカノコアサリ								3.6	
	クシカゴカイ	2.3	5.4			6.4				
	コノハシロガネゴカイ							3.2		
	フクロハネエラスピオ			5.9						3.6
	ソデナガスピオ									3.6
	イトエラスピオ	2.8				17.3	17.9			
	アシビキツバサゴカイ				3.4	9.1				
	Diplocypris spp.			11.6						
	グルマゴカイ			4.6				4.3		
Melolontha spp.	3.3									
サラサツツボ					7.2					
ホリアガキクマ		3.0								
アリガキクマ						5.5				
クダオソコエビ						6.0				
ドロヨコエビ									20.4	
ラスバンマメガニ									13.9	
マンハッタンボヤ	22.0									

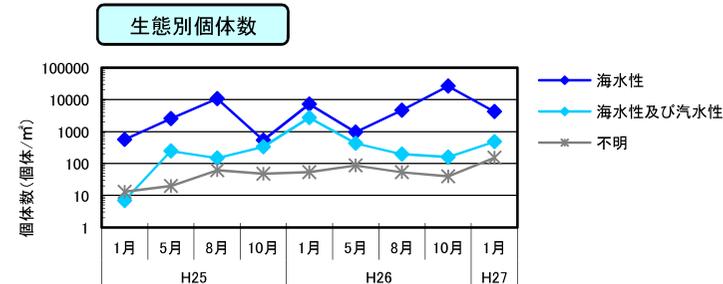
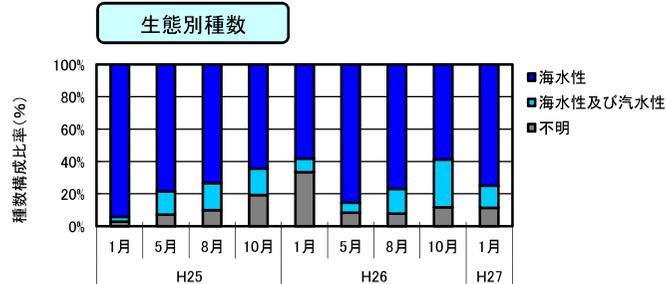
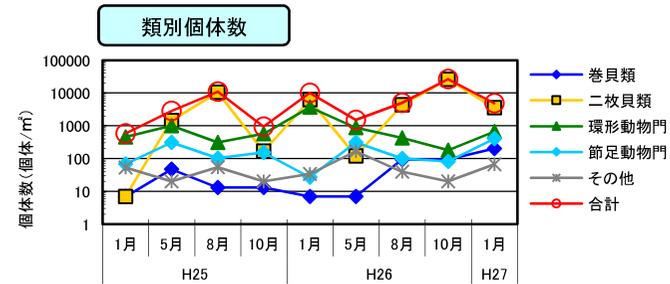
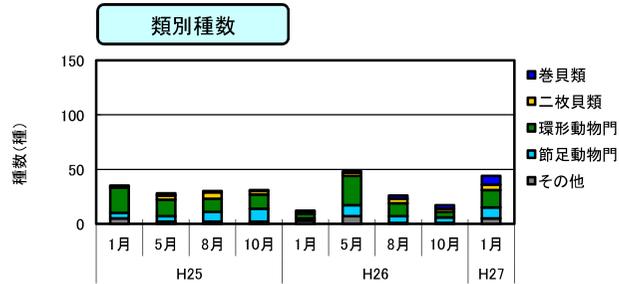
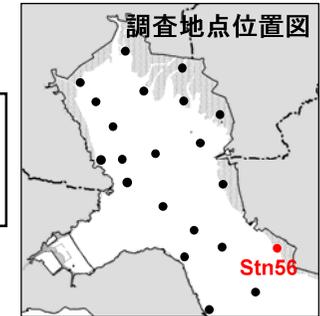


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑩有明海(Stn56)

- 種数は12~48種で環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は591~26,609個体/m<sup>2</sup>で二枚貝類、環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はホトギスガイ、コケゴカイ、アサリ、*Mediomastus* spp.などであった。



主な出現種

項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年	
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	
主な出現種 (%)	巻貝類	海 マルテンスマツムシガイ							0.3	○	
		海 アラムシロガイ						1.5	○	2.6	
	二枚貝類	海 ホトギスガイ	30.1	89.1			60.0		25.4	93.2	62.6
		海 シオフキガイ			1.6	12.2					
		海 チヨノハナガイ						7.2			○
		海 マテガイ			2.0	○					
		海 アサリ	18.8	2.4	○		2.5	○	59.8	5.3	9.1
	環形動物門	海 <i>Glycera</i> spp.				4.3					○
		海 ヒナサキチロリ			○				10.7		○
		海 クシカゴカイ	4.6	7.8							
		海・汽 コケゴカイ		6.1	1.1	31.5	27.5	19.6	3.4	0.5	6.5
		海 ウチワゴカイ								0.1	
		海 カタマガリギボシイソメ	8.0								
		海 ケンサキスピオ	12.4	○	○	○			1.7		
		海 ミズヒキゴカイ		○	○	9.4	8.9	5.3	○		○
		海 <i>Heteromastus</i> spp.	9.0	○		3.6					○
		海 <i>Mediomastus</i> spp.	13.5	○				○			
	節足動物門	海 イトゴカイ科					0.3				
		海 ホソヨコエビ	4.6								
		海・汽 イソコツブシ属		○	○	○		8.9			2.6
海 ユビナガホンヤドカリ			6.1	○					○	○	
海 カニダマン科				3.6							

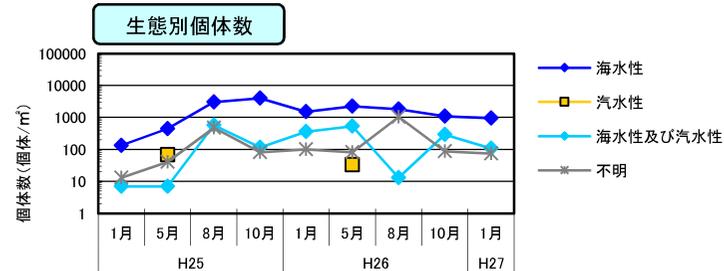
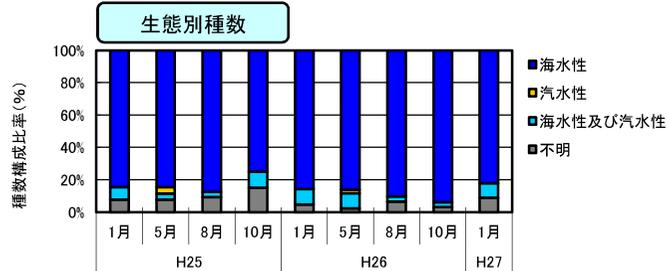
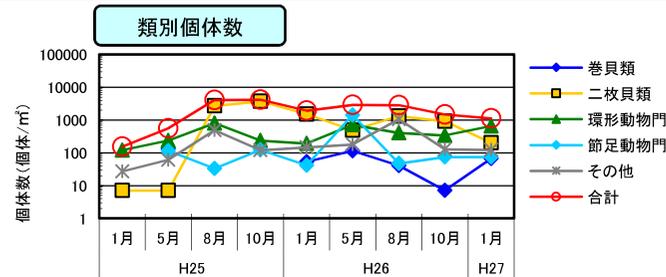
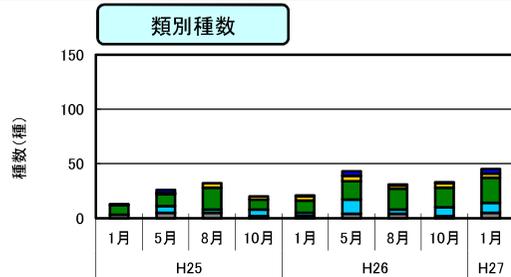


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

①有明海(有区24号)

- 種数は13~45種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は153~4,149個体/m<sup>2</sup>で二枚貝類、環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はホトギスガイ、ヨコヤマキセワタガイ、コケガラスガイ、*Glycinde* spp.、クシカギゴカイ、ソデナガスピオ、アリアケドロクダムシなどであった。



主な出現種 (Main species)

項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年	
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	
刺胞動物門	不	イソギンチャク目									
	不	古裡虫目	8.5	6.0	○						
環形動物門	海	マルゲタスマツムシガイ				2.7	○			○	
	海	キセワタガイ		4.9				○		○	
	海	ヨコヤマキセワタガイ		18.1							
二枚貝類	海・汽	サルボウガイ	○		13.8	2.6	17.2	9.7		19.6	7.2
	海	コケガラスガイ					○		5.9	42.2	7.8
	海	ヤマホトギスガイ						6.5			
	海	ホトギスガイ			50.0	85.5	68.4		39.8	○	
環形動物門	海	<i>Glycinde</i> spp.					2.7			7.7	5.4
	海	<i>Glycinde</i> spp.		4.9	○	○			3.5	2.7	16.8
	海	クシカギゴカイ	8.5	18.1							
	海	クシカギゴカイ			4.9	○	○				
	海	スゴカイツメ	8.5	○	4.9	○	○	○	○	○	○
	海	ソデナガスピオ	21.6	○	4.9	○	○	○	○	○	○
	海	アシビキツバサコカイ	8.5	○		2.2					
	海	<i>Heteromastus</i> spp.	8.5	○	○						
	海	<i>Mediomastus</i> spp.		○			2.7	12.2	2.1	○	11.9
	海	<i>Pectinaria</i> spp.	8.5	○	○						
節足動物門	海・汽	ニホンドロソコエビ						7.9	○		○
	海	アリアケドロクダムシ						28.0			
	汽	タイリクドロクダムシ		12.2							
棘皮動物門	海	キョウウノメユビ				1.8					○
	海	トゲカリナマコ				○	○	○		2.7	○

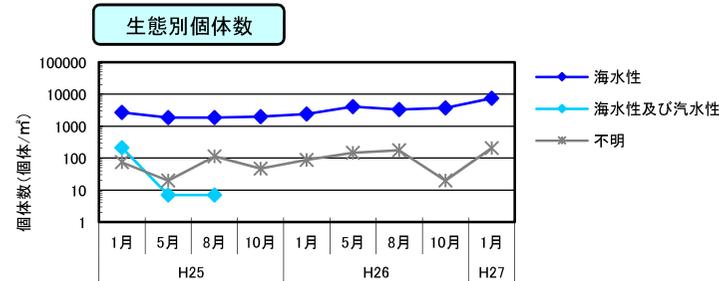
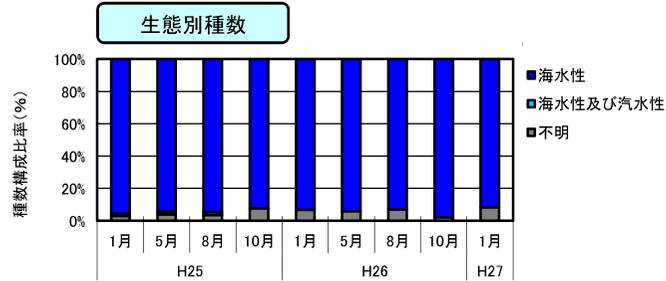
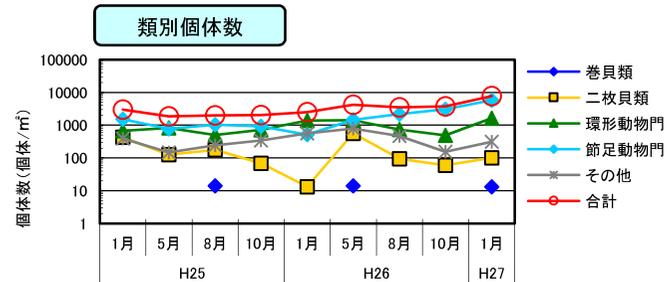
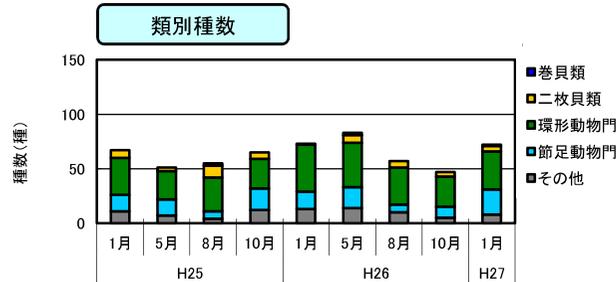
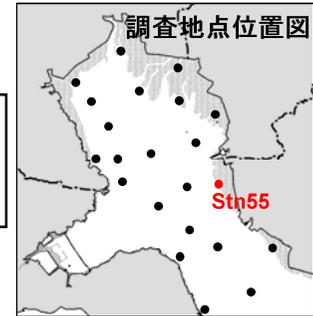


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(7)水生生物 4)底生生物

⑱有明海(Stn55)

- 種数は47~83種で環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は1,868~7,752個体/m<sup>2</sup>で節足動物門、環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 主な種はコブスガメ、クサイロチビクモヒトデなどであった。



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年	
		1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	
主な出現種 (%)	環形動物門	不	イソギンチャク目	○	○	5.4	○	○	○	○	○
		二枚貝類	海・汽	サルボウガイ	7.1	○	○	○	○	3.6	○
			海	ユキミノ属	○	○	3.4	○	○	○	○
			海	チヨノハナガイ	○	○	○	○	6.2	○	○
			海	シロバトガイ	2.9	5.7	○	○	○	○	○
	海	シズクガイ	○	○	○	○	5.8	○	○		
	節足動物門	海	<i>Glycera</i> spp.	○	○	○	4.5	4.6	○	1.7	○
		海	カタマカリギボシソメ	○	○	○	○	5.7	○	○	
		海	ケンサキスピオ	○	○	○	5.8	○	○	○	
		海	モロテゴカイ	○	○	○	○	9.4	○	○	
		海	ナガオタケフシヨカイ	○	○	○	○	○	3.2	3.4	
		海	チンチロフサゴカイ	○	○	○	4.9	○	○	○	
		海	カザリゴカイ	○	○	○	○	5.4	○	1.4	
		海	<i>Amphicteis</i> spp.	○	○	9.6	○	○	○	○	
		海	コブスガメ	39.2	15.7	46.6	33.1	8.6	17.7	59.4	77.6
海		ニッポンスガメ	○	○	3.0	○	○	○	1.7	○	
半索動物門	海	ユンボソコエビ属	○	○	○	○	○	○	○		
	海	ホソヨコエビ	○	6.4	○	○	○	○	○		
	海	クダオソコエビ	○	8.9	○	○	○	○	○		
	海	クダオソコエビ属	2.7	○	○	○	○	○	○		
	海	メナシピンノ	○	○	○	○	○	○	1.2		
	海	ギボシムシ属	○	○	○	○	○	○	1.7		
棘皮動物門	海	カキクモヒトデ	○	○	4.1	○	○	9.6	5.2		
	海	クサイロチビクモヒトデ	4.9	○	○	9.4	15.9	○	○		



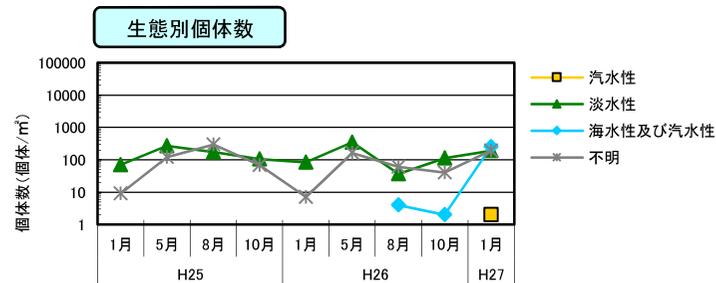
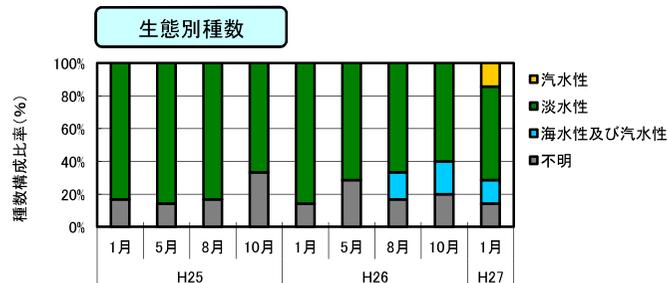
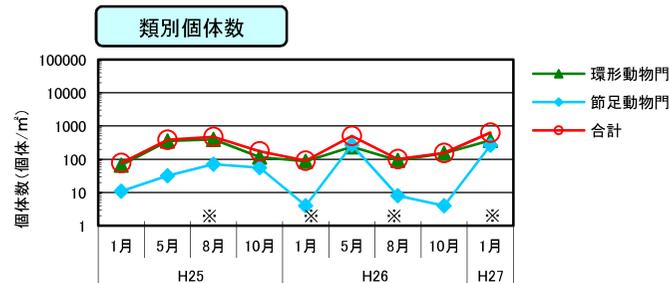
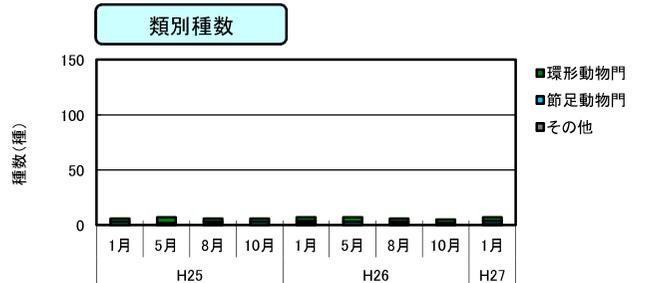
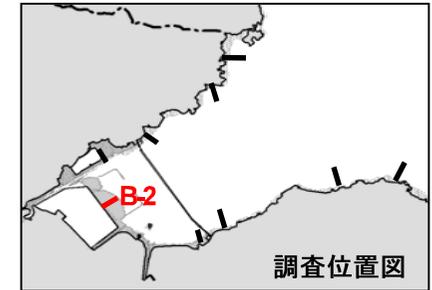
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (8)干潟の生態系 1)干潟生物

### ①調整池(B-2)

- 種数は5～7種で環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は78～629個体/m<sup>2</sup>で環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に淡水性、海水性及び汽水性で構成されていた。
- 主な種はユリミズ、イトミズ亜科、ドロソコエビ属、*Microchironomus* spp.などであった。



#### 主な出現種

項目	調査年月												
	平成25年				平成26年				平成27年				
	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月		
主な出現種 (%)	環形動物門	淡	ヒメイトミミズ属	9.3						3.2			
		淡	ユラミミズ	25.6	2.3	8.1	6.4	31.9	○	19.8	7.1	4.6	
		淡	ユリミミズ	48.7	48.4	13.9	23.3	56.0	19.3	12.9	64.5	23.7	
		不	イトミミズ亜科	11.5	31.1	62.9	38.4	7.7	22.3	59.4	25.8	30.0	
	節足動物門	海・汽	ドロソコエビ属								4.0	1.3	39.6
		淡	ユスリカ属	2.6	○	1.5				○	4.0		
		淡	ナガコブナシユスリカ属										1.7
		淡	セボリユスリカ属	2.6			1.2	2.2					
		淡	<i>Microchironomus</i> spp.		7.0	13.6	29.7	2.2	42.4			1.3	
		淡	<i>Parachironomus</i> spp.	9.0									
		不	ユスリカ亜科				1.2				9.7		

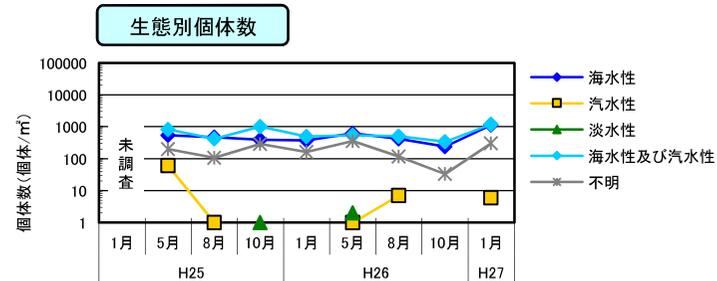
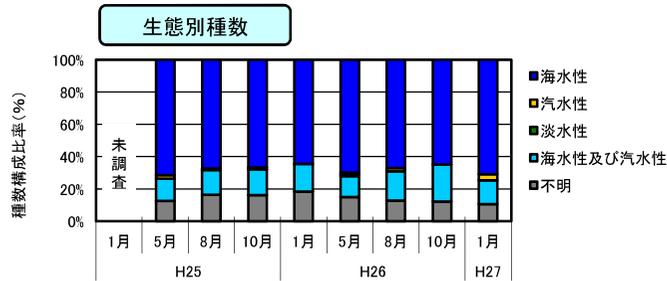
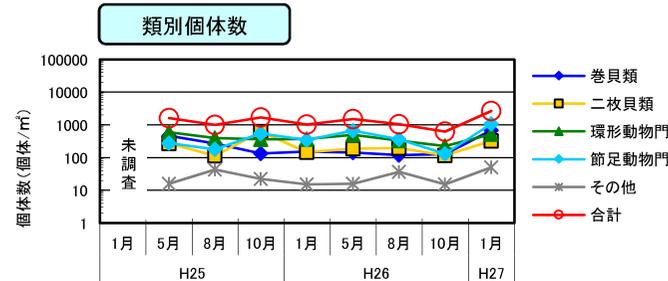
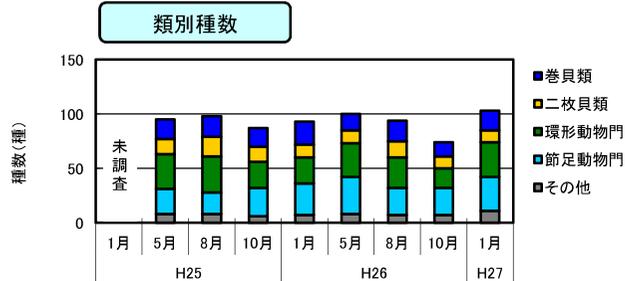
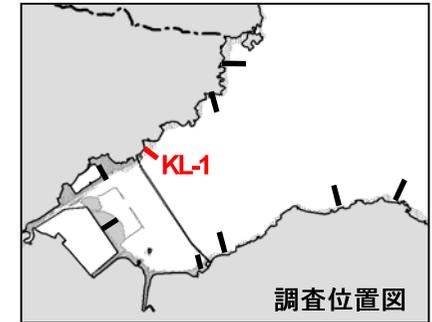


注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 類別個体数の※はその他で示される分類群が群体でのみ出現したことを示す。  
 注4) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注5) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注6) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (8)干潟の生態系 1)干潟生物 ②諫早湾(KL-1)

- 種数は74～103種で環形動物門、節足動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は615～2,626個体/m<sup>2</sup>で環形動物門、節足動物門、二枚貝類が多く、生態別には主に海水性及び汽水性、海水性で構成されていた。
- 主な種はウミナ、シロスジフジツボ、マガキ、コケゴカイ、*Monocorophium* spp.などであった。



### 主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年			
			1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月			
主な出現種 (%)	巻貝類	海・汽	ウミナ											
		二枚貝類	海・汽	クログチガイ										
	環形動物門	海・汽	マガキ	未	6.7	○	7.5	○	○	6.2	15.3	6.3		
		不	マガキ属		6.9	○	8.1	6.7	6.6	○	○	○		
		海・汽	コケゴカイ	調	12.2	9.5	8.3	13.8	12.1	8.5	9.9	6.7		
		海	スナイソゴカイ		6.0	○	○	7.6	6.8	6.6	8.6	○		
		海	ミズヒキゴカイ	査	○	6.1	○	○	○	○	○	○		
		海	<i>Loimia</i> spp.		○	3.3	○	○	○	○	○	○		
	節足動物門	海・汽	シロスジフジツボ		○	○	24.0	12.4	7.9	19.3	8.8	○		
		不	<i>Monocorophium</i> spp.		○	○	○	○	13.2	○	○	○		
		海	メリタヨコエビ属		○	3.3	○	○	○	○	○	○		
		海	メリタヨコエビ科		○	4.2	○	○	○	○	○	6.5		
		海	ハバヒロコツブムシ		○	○	○	○	○	6.3	○	4.4		



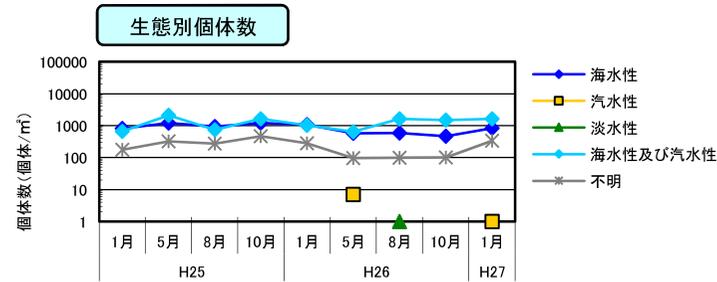
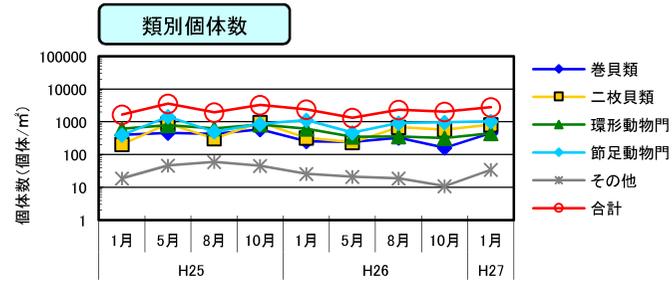
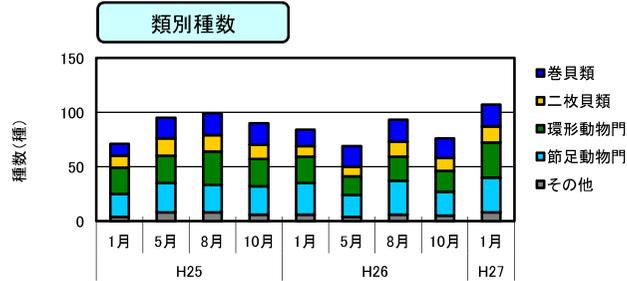
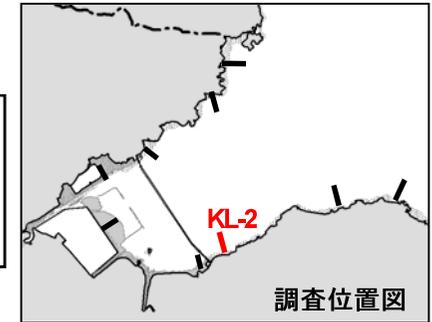
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (8)干潟の生態系 1)干潟生物

### ③諫早湾(KL-2)

- 種数は69～107種で節足動物門、環形動物門が多く、生態別には主に海水性で構成されていた。
- 個体数は1,316～3,627個体/㎡で節足動物門、環形動物門、二枚貝類が多く、生態別には主に海水性及び汽水性、海水性で構成されていた。
- 主な種はシロスジフジツボ、ミズヒキゴカイなどであった。



#### 主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年	
			1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	
主な出現種 (%)	巻貝類	海・汽	ホソウミナ	○	○	○	○	○	○	○	○	6.7
		海・汽	ウミミナ	○	○	7.5	○	○	○	5.9	○	○
		海	タマキビガイ	7.4	7.7	8.0	11.6	○	○	○	○	○
	二枚貝類	海・汽	クログチガイ	○	18.2	○	○	5.8	○	19.0	18.7	13.9
		海・汽	マガキ	○	○	○	9.2	○	○	5.2	7.2	6.3
		不	マガキ属	○	○	6.4	9.7	○	○	○	○	5.2
	環形動物門	海	アサリ	○	○	○	○	○	7.0	○	○	○
		海・汽	コケゴカイ	6.7	○	○	○	○	7.4	○	3.6	○
		海	スナイソゴカイ	7.2	6.3	○	10.4	5.5	7.0	5.4	3.8	○
	節足動物門	海	ミズヒキゴカイ	17.4	6.7	13.7	○	10.0	6.0	○	○	○
		海・汽	シロスジフジツボ	10.8	32.0	13.7	20.3	23.4	26.4	32.6	39.8	19.7
		海	ハバヒロコツブムシ	○	○	○	○	5.2	○	○	○	○



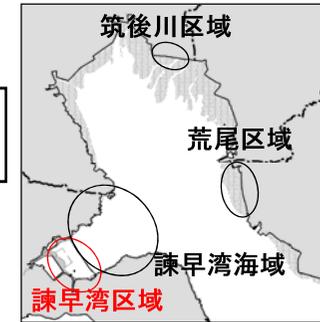
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業《Ⅱ 調査結果の概要》

## (8) 干潟の生態系 2) 鳥類(ポイントセンサス)

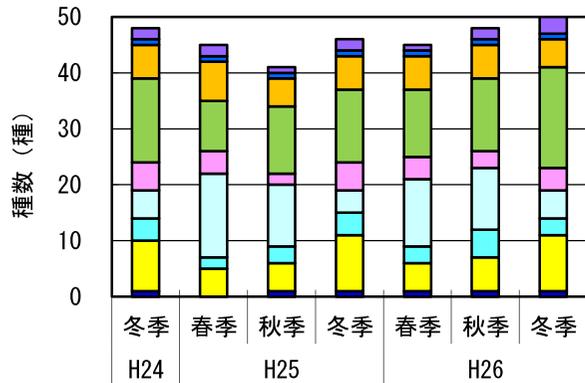
### ① 諫早湾区域(調整池)

○ 諫早湾区域では、種数は41～50種、個体数は839～189,763個体で、種数はカモ目、チドリ亜目、個体数はコウノトリ目、カモ目が多く、主な種はスズガモ、カワウ、カルガモ、ホシハジロ、ヒドリガモなどであった。

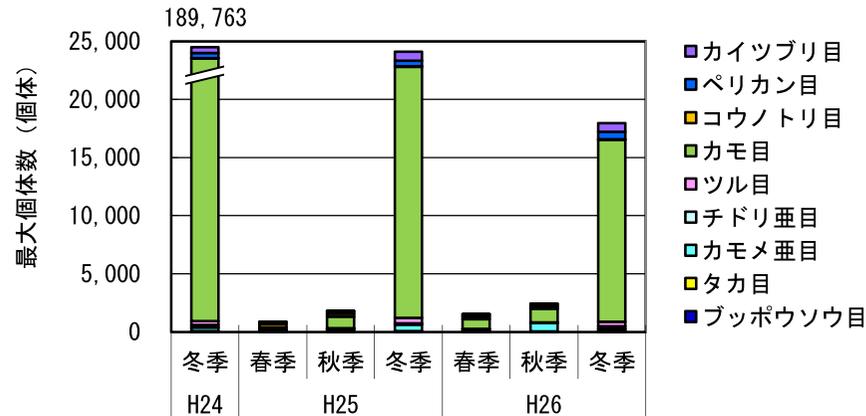


調査区域位置図

目別種数



目別個体数



主な出現種

項目	調査季		調査季							
			24年度		25年度		26年度			
			冬季	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季	
主な出現種 (%)	ペリカン目	カワウ	○	21.9	12.5	○	14.3	9.0	○	
		コウノトリ目	ダイサギ	○	11.0	○	○	○	○	
		アオサギ	○	19.3	○	○	7.5	4.2	○	
	カモ目	マガモ	○	9.9	7.9	11.0	○	4.2	18.0	
		カルガモ	1.5	11.3	24.7	6.9	14.8	30.9	14.6	
		コガモ	○	○	11.4	○	7.3	8.0	○	
		ヒドリガモ	○	○	○	○	17.0	○	○	
		オナガガモ	○	○	○	10.0	○	○	○	
		ホシハジロ	10.8	○	○	30.4	○	○	26.4	
		キンクロハジロ	3.9	○	○	○	○	○	6.0	
		スズガモ	69.1	○	○	19.1	○	○	8.9	
	海ガモ類	10.5								
	カモメ亜目	ウミネコ	○		9.2			26.4		

主な出現種



スズガモ (カモ目)

注1) 図中の数値は、種数または個体数の合計を示す。  
 注2) 主な出現種表中の数値は各季で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注3) 調査時期 平成24年度冬季: 1月31日、2月1～2日、平成25年度春季: 5月13～15日、秋季: 9月26～28日、冬季: 1月23～25日、平成26年度春季: 4月27～29日、秋季: 9月25～27日、冬季: 1月5～7日  
 注4) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業《Ⅱ 調査結果の概要》

## (8)干潟の生態系 2)鳥類(ポイントセンサス)

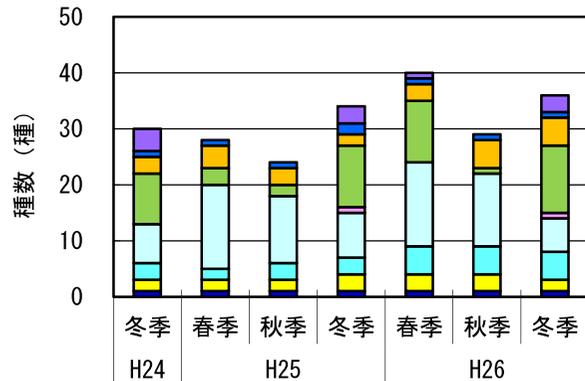
### ②諫早湾海域

○諫早湾海域では、種数は24～40種、個体数は1,025～206,193個体で、種数はカモ目、チドリ亜目、個体数はカモ目、チドリ亜目、カモメ亜目が多く、主な種はスズガモ、チュウシャクシギ、ウミネコなどであった。

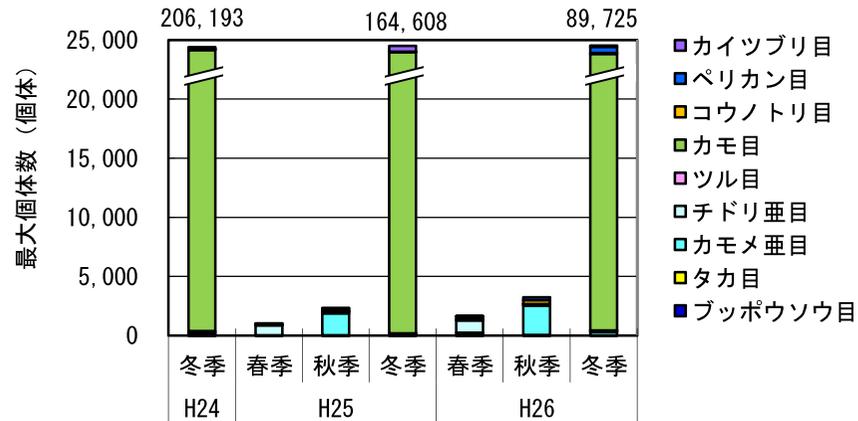


調査区域位置図

目別種数



目別個体数



主な出現種

項目	調査季		24年度				25年度			26年度		
	冬季	春季	冬季	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季
ペリカン目	カワウ	○	○	○	3.2	○	○	7.3	○	○	○	○
	コウノトリ目	ダイサギ	○	5.8	3.8	○	6.0	5.3	○	○	○	○
		アオサギ	○	6.5	3.4	○	4.8	3.7	○	○	○	○
カモ目	マガモ	0.4	○	○	0.7	○	○	1.3	○	○	○	○
	オナガガモ	0.7	○	○	0.8	○	○	1.5	○	○	○	○
	ホシハジロ	4.3	○	○	2.6	○	4.3	5.7	○	○	○	○
	キンクロハジロ	0.5	○	○	0.7	○	○	1.2	○	○	○	○
	スズガモ	93.3	○	○	94.0	○	○	88.0	○	○	○	○
	チドリ亜目	キョウジョシギ	○	5.0	○	○	○	○	○	○	○	○
キアシシギ		○	18.3	○	○	3.9	○	○	○	○	○	○
チュウシャクシギ		○	51.5	○	○	46.4	○	○	○	○	○	○
カモメ亜目	ユリカモメ	○	○	23.9	○	8.5	12.9	○	○	○	○	○
	ウミネコ	○	○	55.2	○	○	61.8	○	○	○	○	○

主な出現種



スズガモ  
(カモ目)

注1) 図中の数値は、種数または個体数の合計を示す。  
 注2) 主な出現種表中の数値は各季で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注3) 調査時期 平成24年度冬季: 1月31日、2月1～2日、平成25年度春季: 5月13～15日、秋季: 9月26～28日、冬季: 1月23～25日、平成26年度春季: 4月27～29日、秋季: 9月25～27日、冬季: 1月5～7日  
 注4) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(8)干潟の生態系 2)鳥類(ポイントセンサス)

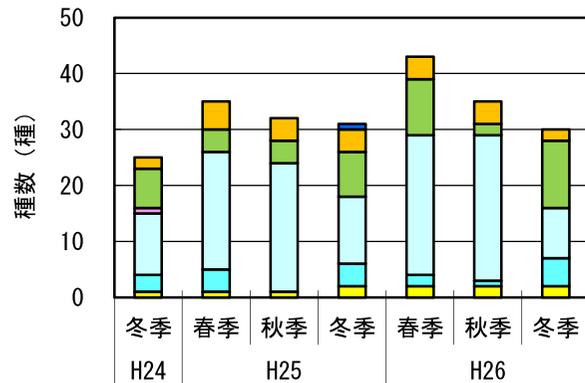
③筑後川区域

○筑後川区域では、種数は25～43種、個体数は4,480～16,227個体で、種数はチドリ亜目、カモ目、個体数はチドリ亜目が多く、主な種はハマシギなどであった。

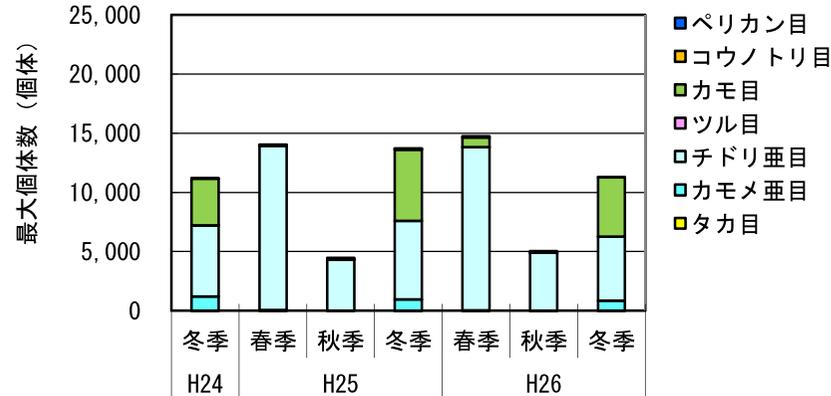


調査区域位置図

目別種数



目別個体数



主な出現種

項目	調査季	24年度		25年度		26年度			
		冬季	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季	
主な出現種 (%)	カモ目	ツクシガモ	7.6	○	○	18.9	3.1	16.2	
		マガモ	11.3	○	○	14.5	○	13.7	
		ヨシガモ	○	○	○	5.0	○	○	
	チドリ亜目	メダイチドリ	○	○	5.6	○	○	8.6	○
		ダイゼン	7.0	10.1	26.8	9.7	9.1	23.6	6.4
		トウネン	○	9.4	○	○	4.2	○	○
		ハマシギ	40.0	68.1	38.9	30.2	70.7	35.0	34.1
		オバシギ	○	○	10.3	○	○	7.2	○
		アオアシシギ	○	○	8.9	○	○	10.5	○
		オオソリハシシギ	○	3.8	○	○	5.2	○	○
		チュウシャクシギ	○	3.5	○	○	○	○	○
	カモメ亜目	ズグロカモメ	7.8	○	○	○	○	○	6.1

主な出現種



ハマシギ  
(チドリ亜目)

注1) 図中の数値は、種数または個体数の合計を示す。  
 注2) 主な出現種表中の数値は各季で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注3) 調査時期 平成24年度冬季: 1月28～30日、平成25年度春季: 5月10～12日、秋季: 9月23～25日、冬季: 1月20～22日、平成26年度春季: 4月30日～5月2日、秋季: 9月28～30日、冬季: 1月8～10日  
 注4) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

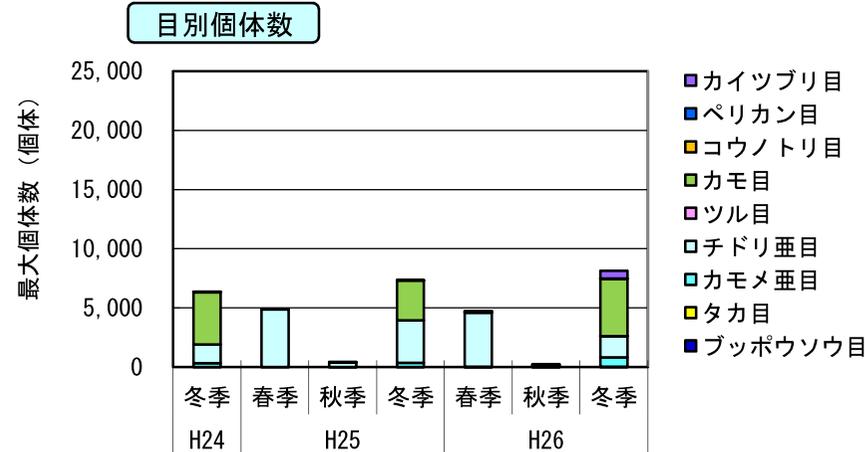
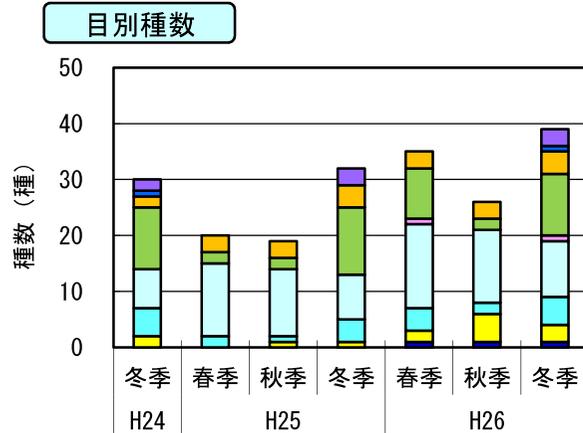
(8)干潟の生態系 2)鳥類(ポイントセンサス)

④荒尾区域

○荒尾区域では、種数は19～39種、個体数は244～8,137個体で、種数、個体数はカモ目、チドリ亜目が多く、主な種はオナガガモ、ハマシギ、シロチドリ、ダイサギ、マガモなどであった。



調査区域位置図



主な出現種

項目	調査季		24年度				25年度				26年度			
			冬季	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季		
主な出現種 (%)	カイツブリ目	カンムリカイツブリ	○									8.0		
		コウノトリ目	ダイサギ	○	○	○	○	○	○	○	22.1	○	○	
		コサギ	○	○	○	○	○	○	○	7.4	○	○		
		アオサギ	○	○	○	○	○	○	○	7.4	○	○		
	カモ目	マガモ		20.0	○	○	14.4	○	○	○	○	37.9		
		カルガモ		○	○		6.8	○	○	○	11.2			
		ヒドリガモ		5.7		○	4.3	○			○			
		オナガガモ		36.1			14.3				○			
		ANATIDAE		3.3										
	チドリ亜目	シロチドリ		○	○	31.6	○	○	7.4	○	○			
		メダイチドリ		○	○	10.2	○	○	○	○	○			
		ダイゼン		○	8.7	12.2	○	8.1	12.7	○	○			
		キョウジョシギ			○	○		5.2	○	○	○			
		ハマシギ		19.5	42.9	○	41.5	42.5	○	16.4	○			
		ミユビシギ		○	○	7.6	○	○	○	○	○			
		キアシシギ			15.9	○		18.8	○	○	○			
		ソリハシシギ			○	22.4		○	10.7					
		オオソリハシシギ			8.8				○					
		チュウシャクシギ			7.2	○		7.6						
	カモメ亜目	ユリカモメ		○			○	○			5.1			
ウミネコ			○		○			11.1						

主な出現種



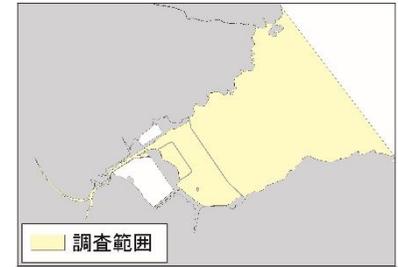
オナガガモ (カモ目)

注1) 図中の数値は、種数または個体数の合計を示す。  
 注2) 主な出現種表中の数値は各季で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注3) 調査時期 平成24年度冬季: 1月28～30日、平成25年度春季: 5月10～12日、秋季: 9月23～25日、冬季: 1月20～22日、平成26年度春季: 4月30日～5月2日、秋季: 9月28～30日、冬季: 1月8～10日  
 注4) カモ目カモ科について、種まで同定できなかったものをカモ科の学名である「ANATIDAE」として示した。  
 注5) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (9)重要種調査（水生植物、水生動物）

- 水生植物では諫早湾でアサクサノリが確認された。
- 水生動物では調整池及び諫早湾を対象とした調査で、調査対象種124種のうち調整池で17種、諫早湾で99種が確認された。



### 重要種調査結果 (水生植物)

No.	種名	調整池	諫早湾
1	アサクサノリ		◎

### 重要種調査結果(水生動物)

No.	種名	調整池	諫早湾	No.	種名	調整池	諫早湾	No.	種名	調整池	諫早湾	No.	種名	調整池	諫早湾
1	ムラサキハナギンチャク		●	31	ウスコミミガイ		◎	61	ヤリウ科			91	ミツシヤミセンガイ		
2	イシマキガイ	◎	◎	32	クリイロコミミガイ		◎	62	イイダコ		◎	92	オオシヤミセンガイ		
3	ヒロクチカノコガイ		◎	33	キヌカツギハマシイバミガイ		◎	63	ツバサゴカイ		◎	93	スミツキザメ		◎
4	ウミニナ		◎	34	ウミマイマイ			64	ミナミヌマエビ	◎	◎	94	アカエビ		◎
5	クロヘナタリガイ		◎	35	モノアラガイ		◎	65	テナガエビ	◎	◎	95	ウナギ	○	◎
6	シマヘナタリガイ		◎	36	ヒラマキミズマイマイ		●	66	シラタエビ		◎	96	ビラ		◎
7	フトヘナタリガイ		◎	37	ヒラマキガイモドキ			67	スジエビ	◎	○	97	エツ		◎
8	ハナタリガイ		◎	38	ナガオカモノアラガイ		◎	68	セジロムラサキエビ		○	98	ヤリタナゴ		◎
9	カラアイガイ		◎	39	ササグミミガイ		◎	69	ハサミシヤコエビ		◎	99	イトモロコ		◎
10	サザナミツボ			40	ハイガイ		◎	70	ヘイケガニ		◎	100	アリアケシラウオ		
11	カワグチツボ		◎	41	コケガラスガイ		◎	71	カネコブシガニ		○	101	メダカ		◎
12	ワカウラツボ		◎	42	タイラギガイ			72	アリアケヤワラガニ		◎	102	タルメサヨリ		◎
13	クリイロカワギンショウガイ		◎	43	ハボウキガイ		○	73	ガザミ属		◎	103	ヤマノカミ		◎
14	ヒラドカリギンショウガイ		◎	44	スミノエガキ		○	74	オオシロビシ		◎	104	スズキ		◎
15	カハタレカワギンショウガイ			45	ニッポンマメアゲマキ		◎	75	オヨギビシ		◎	105	ニベ科		◎
16	アズキカワギンショウガイ		◎	46	アリアケケボリガイ		◎	76	ムツハリアケガニ		○	106	マナゴツオ		
17	エドガワミズゴマツボ		◎	47	ツルマルケボリガイ		◎	77	アリアケガニ		◎	107	ネズツボ科		◎
18	ミズゴマツボ		◎	48	クチハガイ		◎	78	アリアケモドキ		◎	108	カワアナゴ		●
19	シラギクガイ		◎	49	イチヨウシラトリガイ		○	79	ハラグクレチゴガニ		○	109	タビラクチ		◎
20	オリイシラタマガイ		◎	50	アゲマキ			80	チゴガニ		◎	110	ムツゴロウ		◎
21	サキグロタマツメタガイ		◎	51	チゴマテガイ		◎	81	コメツキガニ		◎	111	トビハゼ		◎
22	アカニシ		◎	52	ウネナシトマヤガイ		◎	82	ヤマトオサガニ		◎	112	ウラスボ		◎
23	ウネムシロガイ			53	ヤマトシジミ			83	シオマネキ		◎	113	イドミズハゼ		◎
24	ヒロオビヨアバイ		○	54	マンジミ			84	ハクセンオマネキ		◎	114	エドハゼ		
25	マルテンズマツムシガイ		◎	55	ドブシジミ			85	ハマガニ		◎	115	ハセクチ		◎
26	バイ		◎	56	ハマグリ			86	クシテガニ		◎	116	マサゴハゼ		◎
27	テングニシ		◎	57	ハナグモリガイ		◎	87	モクズガニ		●	117	シモフリシマハゼ		◎
28	センベイアワモチ		◎	58	オキナガイ		◎	88	アシハラガニ		◎	118	シロチチブ		◎
29	レイノミミガイ		◎	59	コオキナガイ			89	ヒメケサイインガニ		◎	119	シウキハゼ		◎
30	オカミミガイ		◎	60	コウイカ		○	90	シヤコ		◎	120	メイトガレイ属		

No.	種名	調整池	諫早湾
121	コウライアカシタビラメ		◎
122	シタビラメ類		◎
123	トラフグ		
124	スナメ		●
合計		17種	99種



アサクサノリ



モクズガニ

注1) 表に示した種名は「諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価書」における予測対象種を示す。  
 注2) ガザミ属にはヒメガザミ、ガザミ等、ニベ科にはコイチ、シログチ等、ネズツボ科にはハタタテヌメリ、ネズミゴチ等、シタビラメ類にはアカシタビラメ、デンベエシタビラメ、イヌノシタ等が含まれる。  
 注3) 調査結果は重要種調査、水生生物調査、干潟の生態系調査及び干陸地周辺の生物調査の結果を集約したものである。  
 注4) ●: 平成24年12月～平成25年12月の期間にのみ確認された種、○: 平成26年1月～平成27年3月の期間にのみ確認された種、◎: 平成24年12月～平成25年12月及び平成26年1月～平成27年3月の両期間確認された種を示す。  
 注5) 種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (9)重要種調査（陸生植物及び陸生動物(鳥類以外)）

- 干陸地及び調整池と背後地を対象とした陸生植物の調査では、干陸地及び調整池で調査対象種の10種全てが確認された。
- 陸生動物(鳥類以外)の調査では、調査対象種24種のうち干陸地及び調整池で13種、背後地で7種が確認された。



### 重要種調査結果(陸生植物)

No.	種名	干陸地及び調整池	背後地
1	タンスイベニマダラ	◎	
2	イヌドクサ	◎	
3	コギンギン	◎	
4	ゴキツル	◎	
5	ヨロイグサ	◎	
6	ミゾコウジュ	◎	
7	カワヂシャ	◎	
8	ウラギク	◎	
9	リュウノヒゲモ	◎	
10	ヒメコウガイゼキショウ	◎	
合計		10種	0種



ウラギク



リュウノヒゲモ

### 重要種調査結果(陸生動物 鳥類以外)

No.	種名	干陸地及び調整池	背後地
1	カヤネズミ	◎	●
2	スッポン	◎	◎
3	シロマダラ		
4	ニホンアカガエル	○	
5	トノサマガエル	◎	
6	ムズジイトトンボ		
7	アジアイトトンボ	◎	
8	ネアカヨシヤンマ	◎	●
9	クロスジギンヤンマ	◎	
10	チョウトンボ	◎	
11	キトンボ		
12	アキアカネ		
13	マイコアカネ		
14	イトアメンボ		
15	コオイムシ	◎	○
16	タイコウチ		
17	スナハラゴミムシ		
18	コガムシ		
19	ツマグロマルハナノミ	◎	◎
20	チビカクマグソコガネ		
21	ヤマトヒメメダカカッコウムシ	◎	◎
22	ヤマトヒメテントウ	○	
23	アケボノベッコウ		
24	ハナナガモモトハナアブ	◎	◎
合計		13種	7種



カヤネズミ



トノサマガエル



コオイムシ

注1) 表に示した種名は「諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開閉調査に係る環境影響評価書」における予測対象種を示す。  
 注2) 調査結果は重要種調査、水生生物調査及び干陸地周辺の生物調査の結果を集約したものである。  
 注3) ●:平成24年12月～平成25年12月の期間にのみ確認された種、○:平成26年1月～平成27年3月の期間にのみ確認された種、◎:平成24年12月～平成25年12月及び平成26年1月～平成27年3月の両期間確認された種を示す。  
 注4) 種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (9)重要種調査 (陸生動物(鳥類))

○開門事前調査では、調査対象種63種のうち諫早湾区域で51種、諫早湾海域で30種、筑後川区域で36種、荒尾区域で26種が確認された。



調査区域位置図

### 重要種調査結果(陸生動物 鳥類)

No.	種名	諫早湾区域	諫早湾海域	筑後川区域	荒尾区域
1	オオハム				
2	シロエリオオハム				
3	カンムリカイツブリ	◎	◎		◎
4	サンカノゴイ	◎			
5	ヨシゴイ	●			
6	ササゴイ				
7	チュウサギ	◎	○		
8	ヘラサギ	◎	○	○	
9	クロツラヘラサギ	◎	○	◎	○
10	マガン	◎			
11	ヒシクイ	●			
12	サカツラガン				
13	ツクシガモ	◎	○	◎	
14	ヨシガモ	◎	○	◎	◎
15	オカヨシガモ	◎	○	○	◎
16	ハシビロガモ	◎		◎	●
17	ミヨアイサ	◎			
18	ウミアイサ	◎	◎		◎
19	ミサゴ	◎	◎	◎	◎
20	オオタカ	◎			
21	ハイタカ	◎			
22	ハイイロチュウヒ	◎			
23	チュウヒ	◎			
24	ハヤブサ	◎	○	○	◎
25	ウズラ	◎			
26	ナベヅル	◎		●	
27	マナヅル	◎			
28	クイナ	◎			
29	ヒクイナ	◎			○
30	ハジロコチドリ				

No.	種名	諫早湾区域	諫早湾海域	筑後川区域	荒尾区域
31	コチドリ	◎	◎	●	○
32	イカルチドリ				
33	シロチドリ	●	◎	◎	◎
34	メダイチドリ	●	◎	◎	◎
35	ムナグロ	◎	◎	◎	
36	ダイゼン		○	◎	◎
37	キョウジョシギ	◎	◎	○	◎
38	トウネン	◎	◎	◎	◎
39	ウズラシギ	◎		◎	
40	ハマシギ	◎	◎	◎	◎
41	コオバシギ			◎	
42	オバシギ		○	◎	◎
43	ツルシギ	◎		◎	○
44	アカアシシギ		●	◎	
45	コアアシシギ	●		◎	
46	アオアシシギ	◎	◎	◎	◎
47	タカアシシギ	◎		○	
48	キアシシギ	◎	◎	◎	◎
49	ソリハシシギ	◎	◎	◎	◎
50	オグロシギ	○		◎	
51	オオソリハシシギ		◎	◎	◎
52	ダイシャクシギ	○		◎	
53	ホウロクシギ	◎	◎	◎	
54	チュウシャクシギ	◎	◎	◎	◎
55	ヤマシギ				
56	セイタカシギ	◎		●	
57	ツバメチドリ	◎			
58	ユリカモメ	◎	◎	◎	◎
59	ズグロカモメ	◎	○	◎	◎
60	コアジサシ	◎	●	◎	◎

No.	種名	諫早湾区域	諫早湾海域	筑後川区域	荒尾区域
61	コシアカツバメ	●			
62	コヨシキリ	○			
63	オオヨシキリ	◎	◎		
合計		51種	30種	36種	26種



ハマシギ



チュウシャクシギ

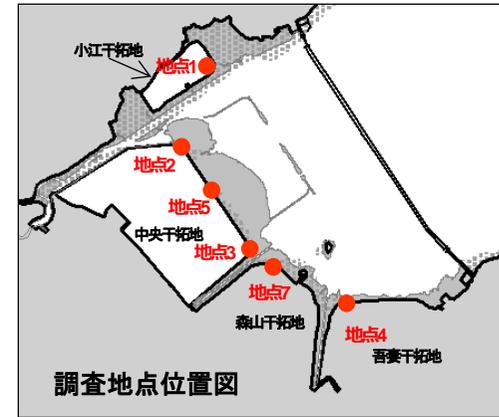


コアジサシ

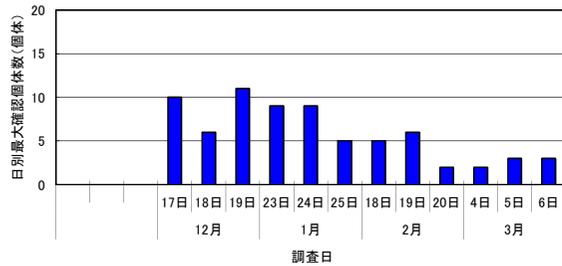
- 注1) 表に示した種名は「諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価書」における予測対象種を示す。
- 注2) 調査結果は干潟の生態系調査、生態系注目種調査及び干陸地周辺の生物調査の結果を集約したものである。
- 注3) ●:平成24年12月～平成25年12月の期間にのみ確認された種、○:平成26年1月～平成27年3月の期間にのみ確認された種、◎:平成24年12月～平成25年12月及び平成26年1月～平成27年3月の両期間確認された種を示す。
- 注4) 種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで確認された個体である。

(10)生態系注目種調査 1)ミサゴ

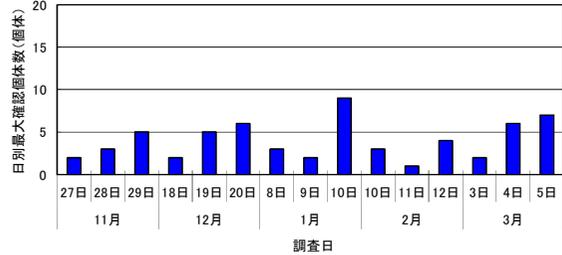
- 越冬期における日別の最大確認個体数は平成24年度には2～11個体、平成25年度には1～9個体、平成26年度には1～11個体であった。
- 繁殖期における日別の最大確認個体数は平成25年度には1～11個体、平成26年度には3～20個体であり、繁殖初期の5月から繁殖が終わった7月に個体数が多かった。



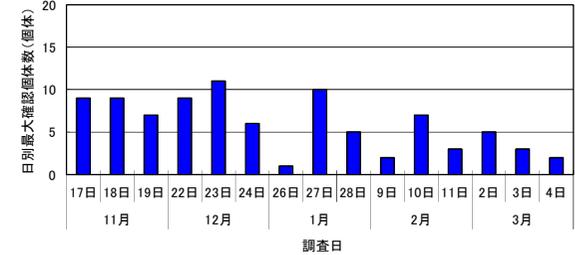
平成24年度 越冬期



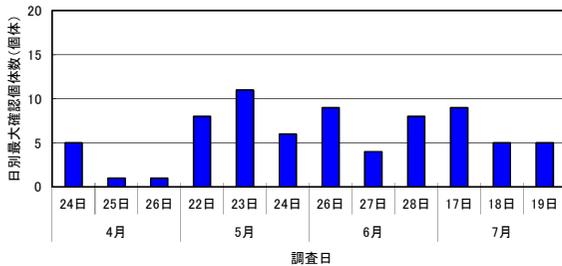
平成25年度 越冬期



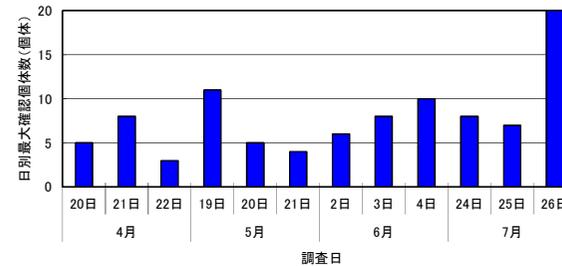
平成26年度 越冬期



平成25年度 繁殖期



平成26年度 繁殖期



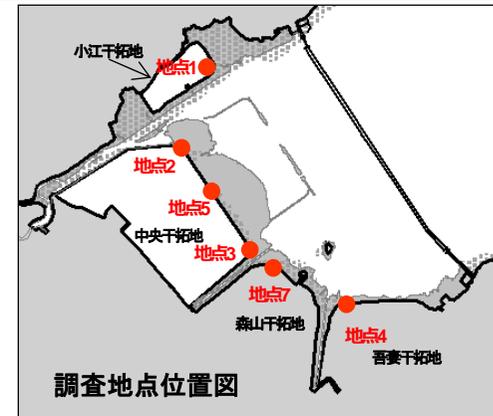
ミサゴ

注1) 日別最大個体数は、各調査日における最大同時確認個体数を示す。  
 注2) 種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで確認された個体である。

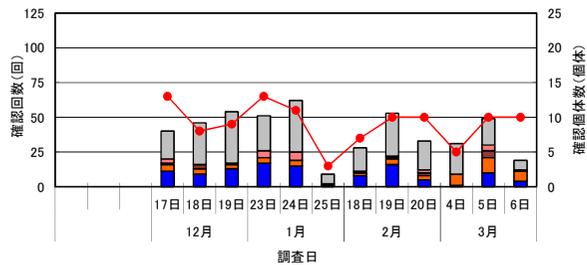
# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (10)生態系注目種調査 2)チュウヒ

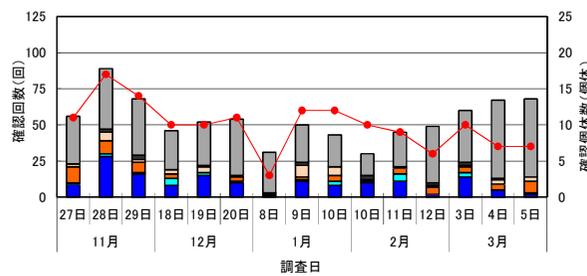
- 平成24年度から平成26年度の調査期間を通じて、日別の確認個体数は、越冬期に3～17個体、繁殖期に1～7個体であった。
- 性別・齢が確認できた限りでは、越冬期、繁殖期ともに様々な性別、齢の個体利用が確認された。



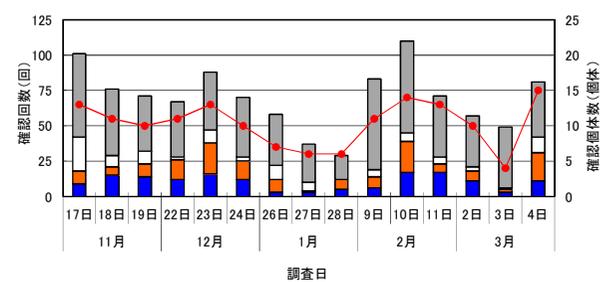
平成24年度 越冬期



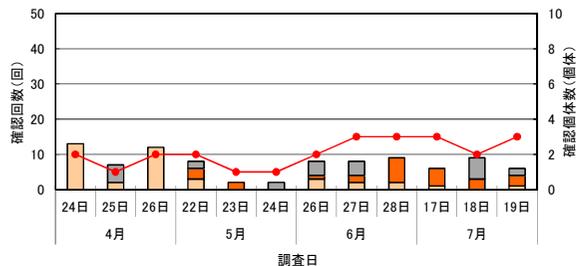
平成25年度 越冬期



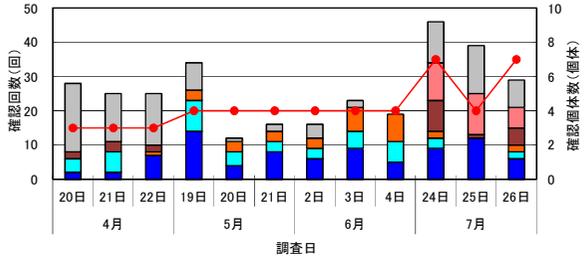
平成26年度 越冬期



平成25年度 繁殖期



平成26年度 繁殖期



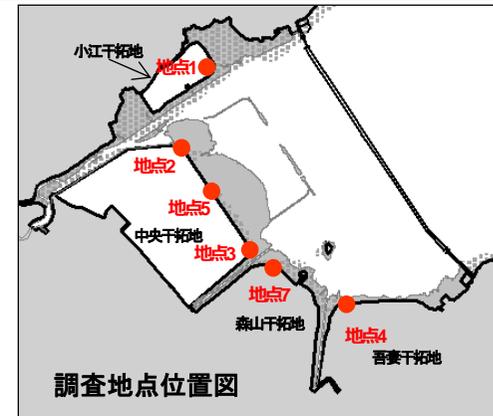
チュウヒ

注1) 種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで確認された個体である。

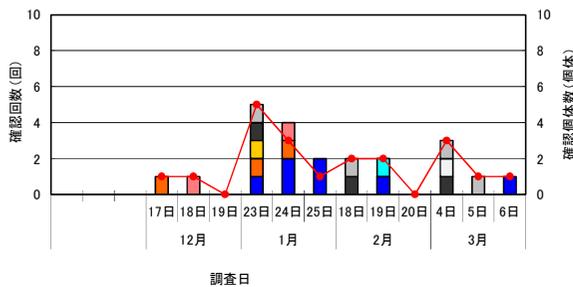
# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (10)生態系注目種調査 3)ハヤブサ

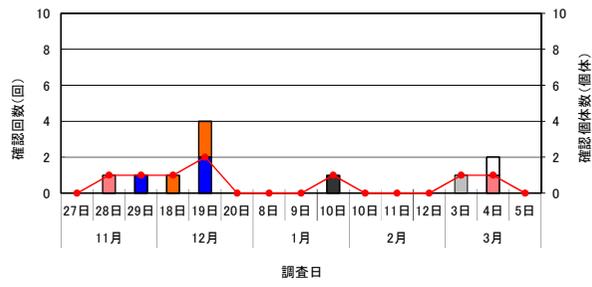
- 平成24年度から平成26年度の調査期間を通じて、日別の確認個体数は、越冬期に0～5個体、繁殖期に0～5個体が確認された。
- 性別・齢が確認できた限りでは、越冬期、繁殖期ともに様々な性別、齢の個体利用が確認された。



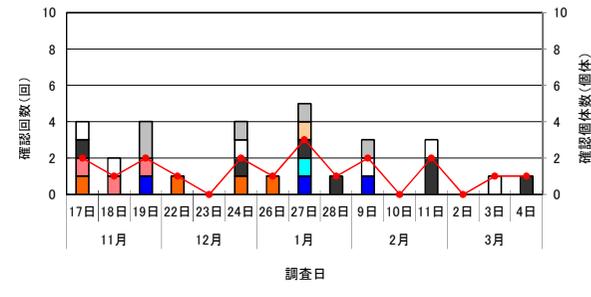
平成24年度 越冬期



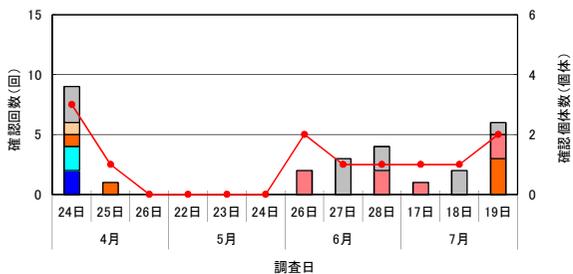
平成25年度 越冬期



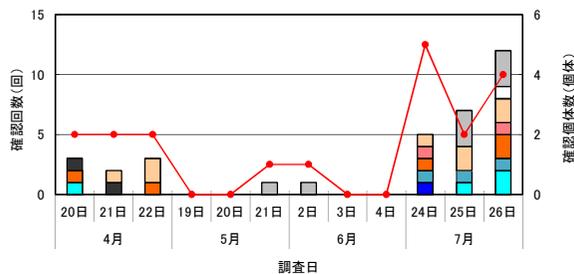
平成26年度 越冬期



平成25年度 繁殖期



平成26年度 繁殖期

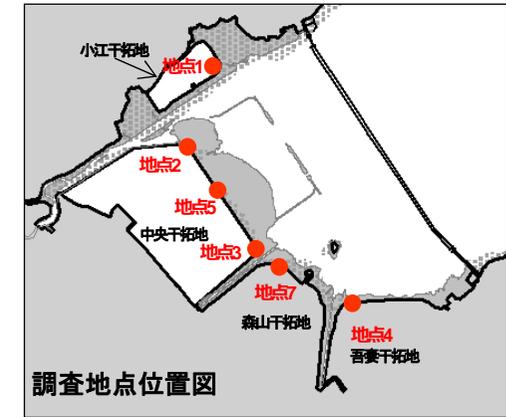


ハヤブサ

注1) 種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで確認された個体である。

(10)生態系注目種調査 4)ツル類

- 調整池周辺におけるツル類(マナヅル、ナベヅル)の越冬個体数は、マナヅルが平成24年度～平成26年度ともに12月～2月に多く、ナベヅルは平成24年度が1月～2月、平成25年度が12月～1月、平成26年度が1月～3月に多かった。
- 平成24年度のマナヅルの餌場としての利用場所は、森山干拓地が多かった。ねぐらは月によって異なり、12月、1月は牛口名前面干陸地、2月は森山干拓地であった。平成25年度、平成26年度については、中央干拓地を中心に餌場として利用していた。ねぐらは平成25年度が牛口名前面干陸地、平成26年度が牛口名前面干陸地、仁反田川河口左岸、森山干拓地等であった。
- 平成24年度のマナヅルの餌場としての利用場所は、中央干拓地、森山干拓地のほか赤崎新地であった。ねぐらは仁反田川河口左岸であった。平成25年度、平成26年度については、中央干拓地、森山干拓地、吾妻干拓地を中心に餌場として利用していた。ねぐらは平成25年度が仁反田川河口左岸、平成26年度が仁反田川河口左岸、森山干拓地前面の浅瀬であった。

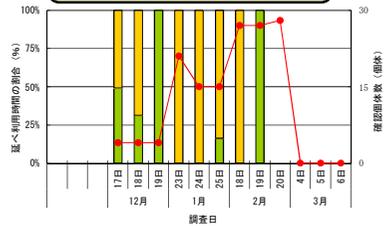


調査地点位置図

ねぐらの位置

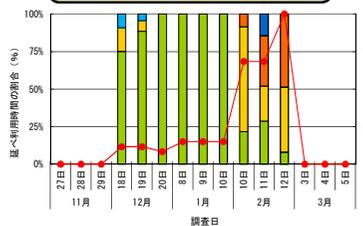
マナヅルの餌場の利用場所

平成24年度



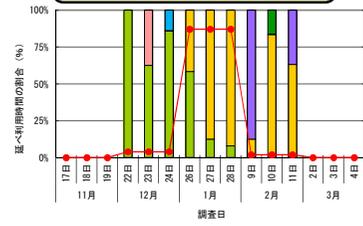
月	12月	1月	2月	3月
餌場数	4	4	21	15
個体数	4	4	21	28

平成25年度



月	11月	12月	1月	2月	3月
餌場数	0	7	5	9	41
個体数	0	7	5	9	60

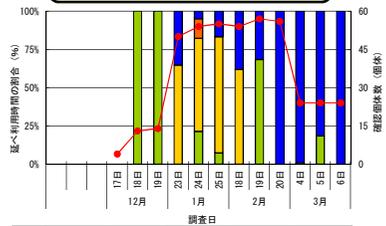
平成26年度



月	12月	1月	2月	3月
餌場数	4	4	87	2
個体数	4	4	87	2

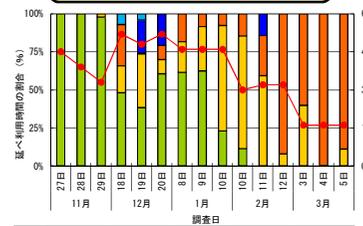
ナベヅルの餌場の利用場所

平成24年度



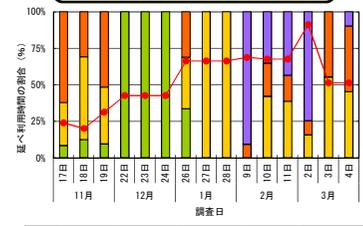
月	11月	12月	1月	2月	3月
餌場数	19	25	34	34	53
個体数	19	25	34	34	73

平成25年度



月	11月	12月	1月	2月	3月
餌場数	39	33	52	46	32
個体数	39	33	52	46	32

平成26年度



月	11月	12月	1月	2月	3月
餌場数	19	16	25	34	53
個体数	19	16	25	34	53



マナヅル(左)、ナベヅル(右)

注1) 種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (11) 干陸地周辺の生物 1) 植生(平成25年10月)

○干陸地ではヨシ群落が増加し、干陸化が進んでいる小江干拓地の東側、本明川河口左岸、中央干拓地東側の干陸地の中央部では、セイトカアワダチソウ群落が増加し、吾妻干拓地地先のヨシ進出促進工で囲まれた静穏な場所ではヒシ群落が増加していた。

(平成25年10月)



注1) 25年度の植生図は空中写真(平成25年8月20日撮影、1/10,000)の判読及び現地踏査結果(平成25年9月24~27日、9月30日、10月1~4日)をもとに作成したものである。

注2) 沖ノ島、中ノ島は調査対象範囲外である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (11) 干陸地周辺の生物 1) 植生(平成26年10月)

○干陸地ではヨシ群落が増加し、干陸化が進んでいる小江干拓地の東側、本明川河口左岸、中央干拓地東側の干陸地の中央部では、セイタカアワダチソウ群落が増加し、吾妻干拓地地先のヨシ進出促進工で囲まれた静穏な場所ではヒシ群落が増加していた。平成25年度からの変化として、小江干拓地の東側、本明川、仁反田川周辺、中央干拓地でケイヌビエ群落が増加した。

(平成26年10月)



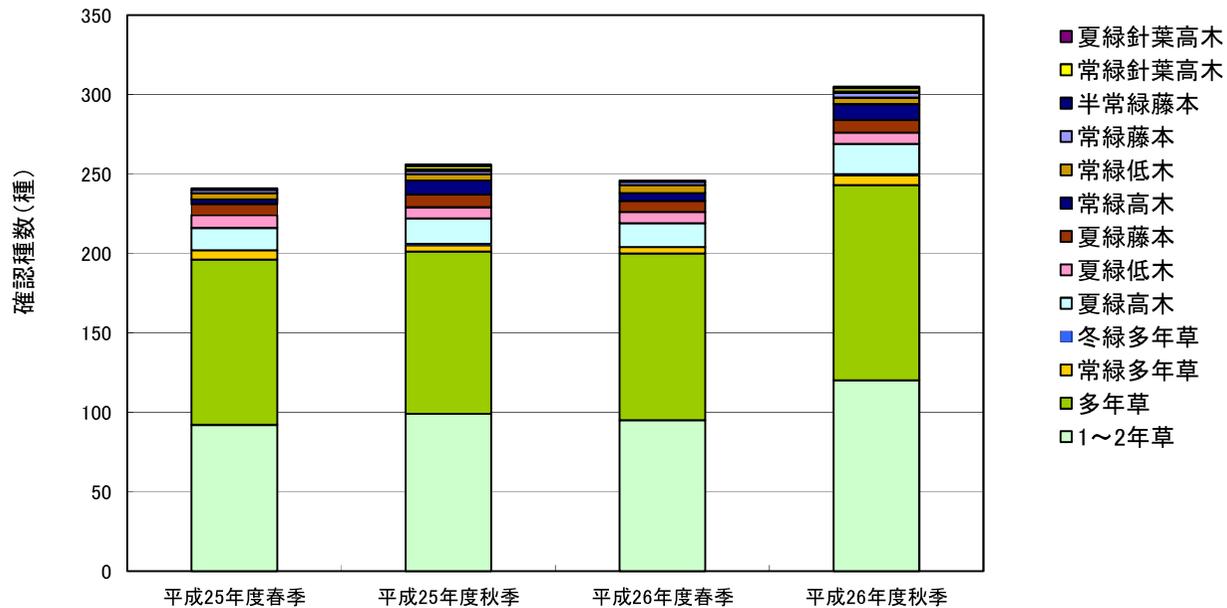
注1) 26年度の植生図は空中写真(平成26年9月9日撮影、1/10,000)の判読及び現地踏査結果(平成26年9月22~26日、9月29~30日、10月1~3日)をもとに作成したものである。  
 注2) 沖ノ島、中ノ島は調査対象範囲外である。

(11) 干陸地周辺の生物 2) 植物相

○調査範囲である干陸地及び干拓地では、平成25年度春季に35目65科241種、平成25年度秋季に39目76科256種、平成26年度春季に37目70科246種、平成26年度秋季に40目84科305種の植物が確認された。  
 ○生活形別にみると、春季、秋季ともに、1～2年草及び多年草が多かった。



植物相調査結果



注1) 調査時期 平成25年度春季:平成25年5月20～25日、秋季:9月18～20日、23～27日、30日、10月1～4日  
 平成26年度春季:平成26年5月19～23日、秋季:9月17～19日、22～26日、29～30日、10月1～3日







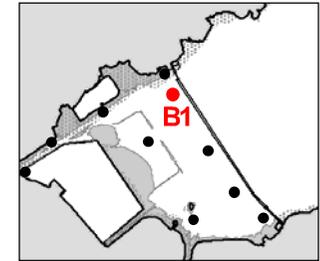


# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

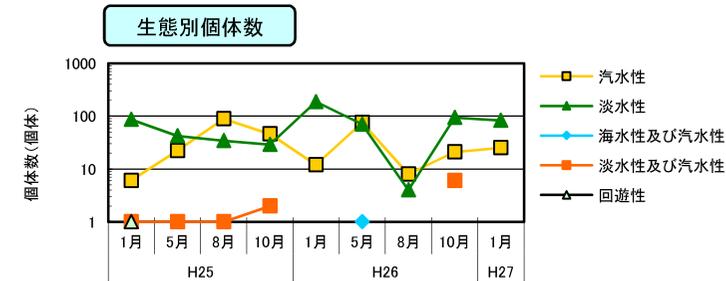
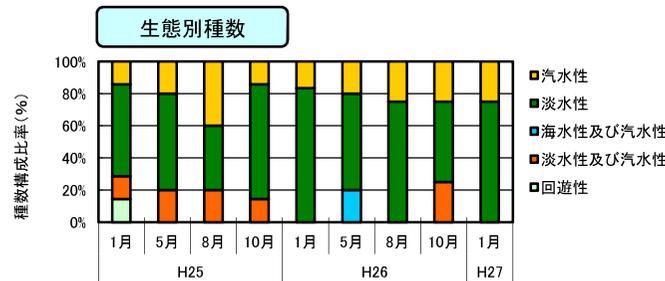
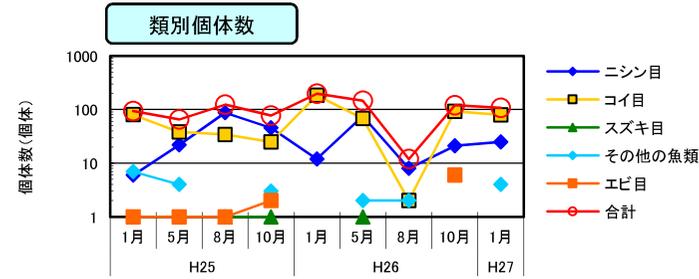
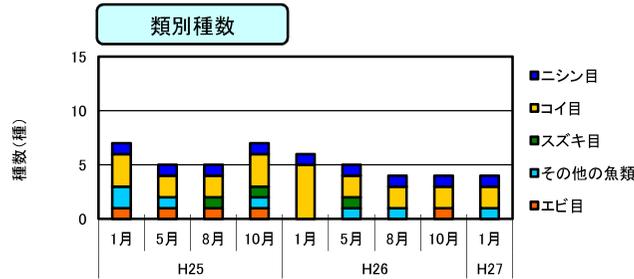
## (11) 干陸地周辺の生物 3) 調整池の魚介類

### ① 調整池(B1)

- 種数は4～7種でコイ目が多く、生態別には主に淡水性、汽水性で構成されていた。
- 個体数は12～197個体でコイ目、ニシン目が多く、生態別には主に淡水性、汽水性で構成されていた。
- 主な種はギンブナ、エツなどであった。



調査地点位置図



### 主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年	
			1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月	
主な出現種 (%)	ニシン目	汽	エツ	6.4	33.8	70.7	59.7	6.1	51.4	66.7	17.5	23.1
		淡	コイ	1.1	1.5	2.4	2.6	0.5	2.1			
	コイ目	淡	ギンブナ	79.8	56.9	25.2	26.0	86.8	44.5	8.3	73.3	65.7
		淡	ヤリタナゴ					0.5				
		淡	バラタナゴ属					0.5				
		淡	モツゴ	4.3			3.9	5.6		8.3	4.2	7.4
	ナマズ目	淡	ナマズ	6.4	6.2		3.9		1.4	16.7		3.7
	ボラ目	回	ボラ	1.1								
	スズキ目	海・汽	ワラスボ						0.7			
		汽	ウロハゼ			0.8						
	エビ目	淡・汽	テナガエビ		1.5	0.8	2.6				5.0	
		淡・汽	モクズガニ	1.1								

### 主な種



ギンブナ  
(コイ目・淡水性)

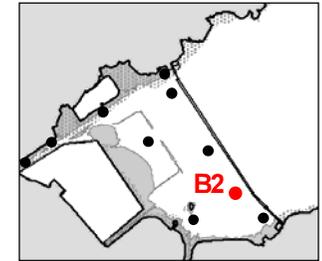
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「〇〇性及び〇〇性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、回:回遊性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

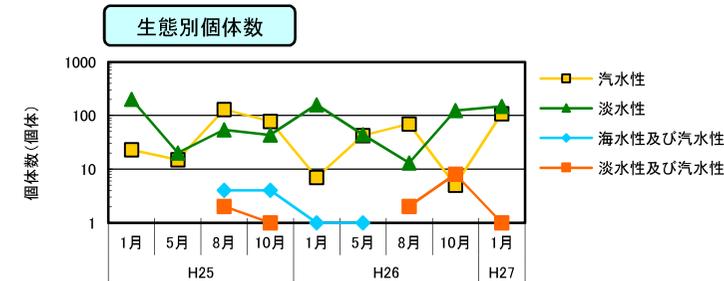
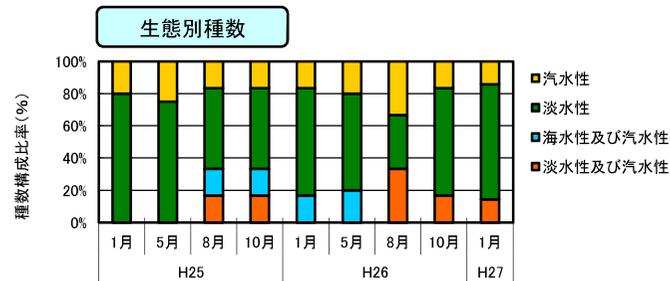
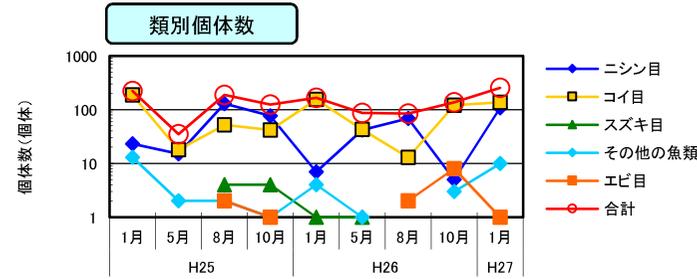
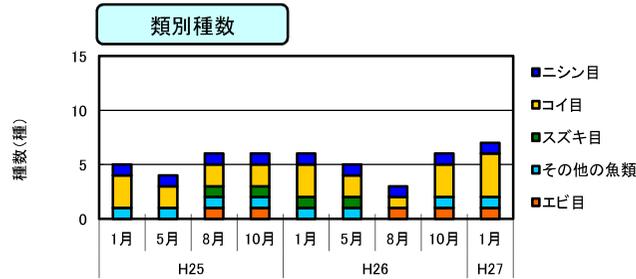
## (11) 干陸地周辺の生物 3) 調整池の魚介類

### ② 調整池(B2)

- 種数は3～7種でコイ目、ニシン目、エビ目が多く、生態別には主に淡水性、汽水性、淡水性及び汽水性で構成されていた。
- 個体数は35～256個体でコイ目、ニシン目が多く、生態別には主に淡水性、汽水性で構成されていた。
- 主な種はギンプナ、エツなどであった。



調査地点位置図



### 主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年	
	1月	5月	8月	10月	1月	5月	8月	10月	1月			
主な出現種 (%)	ニシン目	汽	エツ	10.3	42.9	68.3	61.6	4.2	48.3	82.1	3.6	42.2
	コイ目	淡	コイ	0.4	2.9			1.2	1.1		2.9	1.2
		淡	ゲンゴロウブナ									0.8
		淡	ギンプナ	82.5	48.6	27.0	28.0	65.1	48.3	15.5	83.2	51.2
		淡	モツゴ	0.9		○	5.6	26.5			2.2	○
	ナマズ目	淡	ナマズ	5.8	5.7	1.1	0.8	2.4	1.1		2.2	3.9
	スズキ目	海・汽	ワラスボ			2.1	3.2	○	1.1			
	エビ目	淡・汽	テナガエビ			1.1	0.8			2.4	5.8	○

### 主な種



ギンプナ  
(コイ目・淡水性)

注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、回: 回遊性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

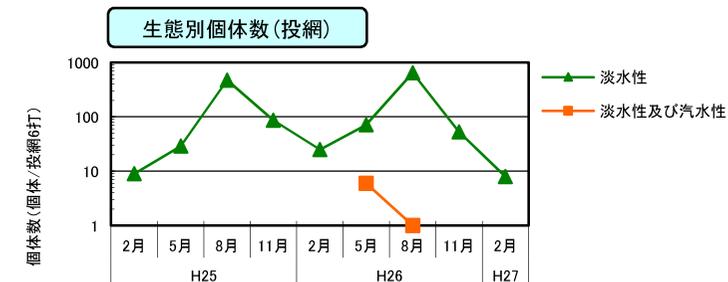
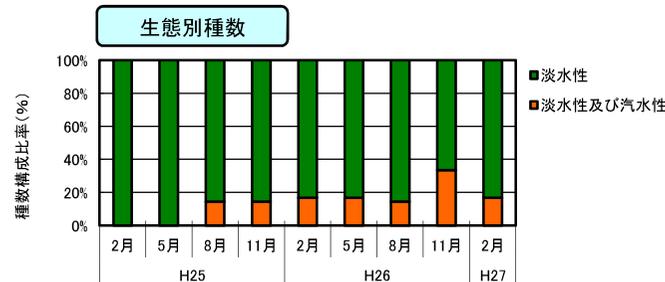
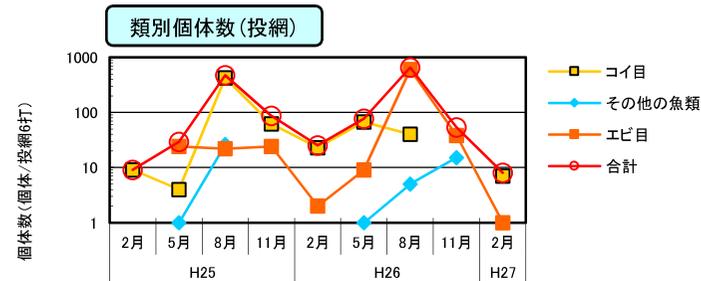
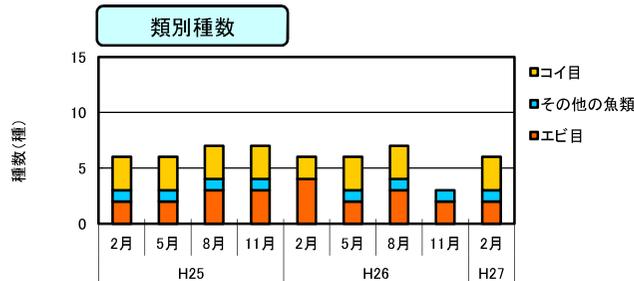
## (11) 干陸地周辺の生物 4) 排水路・潮遊池の魚介類

### ① 排水路・潮遊池(中央干拓地)

- 種数は3～7種でコイ目、エビ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は8～649個体/投網6打でコイ目、エビ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 主な種はギンプナ、モツゴ、スジエビなどであった。



調査地点位置図



### 主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年
			2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月
主な出現種 (%)	コイ目	淡	○	3.4	22.0	2.3	○	7.8	0.5	○	○
		淡	○	6.9	67.2	41.9	24.0	72.7	5.2	○	12.5
		淡	100.0	3.4	0.6	27.9	68.0	6.5	0.5	○	75.0
	カダヤシ目	淡	○	3.4	5.5	○	○	○	0.8	28.3	○
		淡	○	○	○	○	8.0	○	○	○	○
	エビ目	淡	○	○	○	○	○	7.8	○	○	○
		淡・汽	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		淡	○	82.8	4.7	27.9	○	3.9	92.9	71.7	12.5



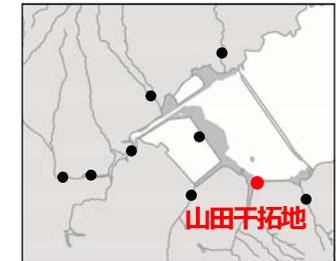
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で投網による採取個体数が上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の投網及び投網以外の漁法による出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、回: 回遊性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

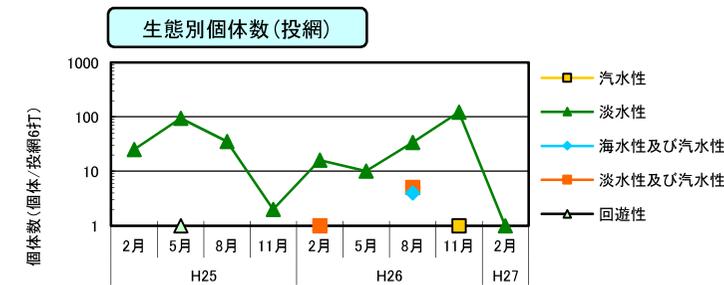
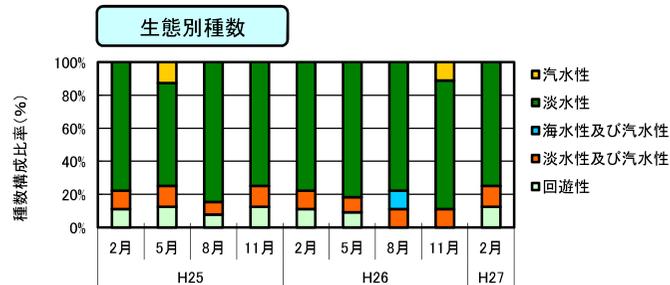
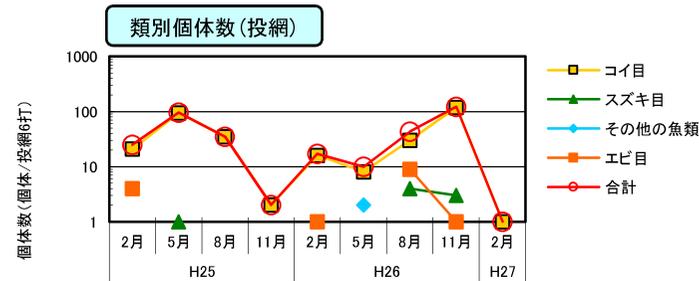
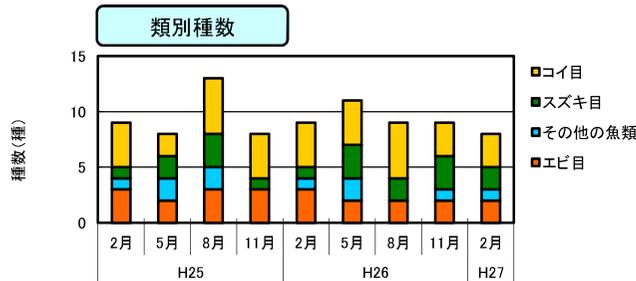
## (11) 干陸地周辺の生物 4) 排水路・潮遊池の魚介類

### ② 排水路・潮遊池(山田干拓地)

- 種数は8～13種でコイ目、スズキ目、その他の魚類、エビ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は1～122個体/投網6打でコイ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 主な種はオイカワ、カワムツなどであった。



調査地点位置図



### 主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年		
			2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月		
主な出現種 (%)	コイ目	淡	ギンブナ	○		11.4		11.8					
		淡	バラタナゴ属	○	2.1	31.4	○	○	○	16.3	○		
		淡	オイカワ	84.0	96.8	34.3	100.0	64.7	80.0	37.2	95.9	○	
		淡	カワムツ				○			○		100.0	
		淡	モツゴ				○	17.6	○	16.3	0.8	○	
	ダツ目	淡	メダカ		○	○			20.0				
		スズキ目	汽	ウロハゼ		○						0.8	
			回	トヨウシノボリ	○	1.1	○		○	○			○
	海・汽	シモフリシマハゼ							9.3				
		淡	スマチチブ			○		○	○	1.6	○		
	エビ目	淡	ミナミヌマエビ	4.0	○	○	○	○	○				
		淡・汽	テナガエビ	○	○	○	○	5.9	○	11.6	○	○	
		淡	スジエビ	12.0		○	○	○	○	9.3	0.8	○	



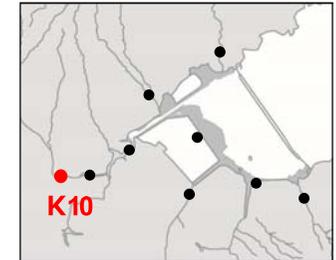
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で投網による採取個体数が上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の投網及び投網以外の漁法による出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、回:回避性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

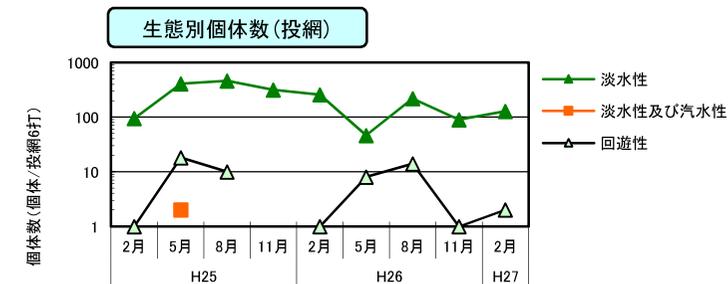
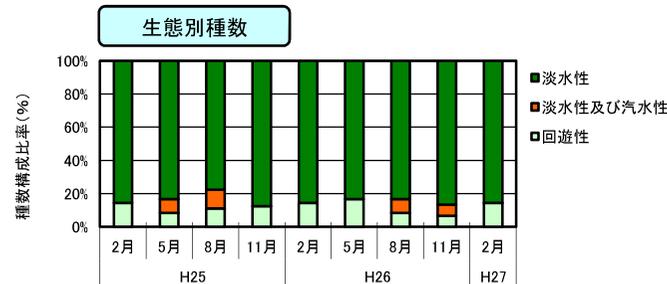
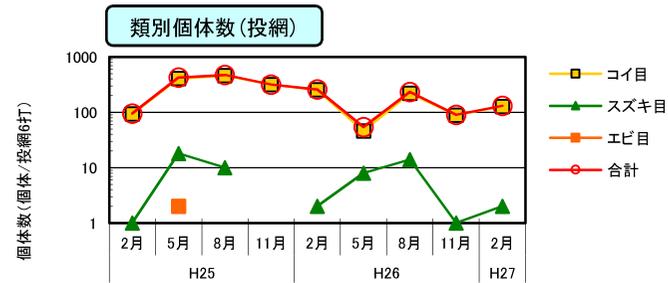
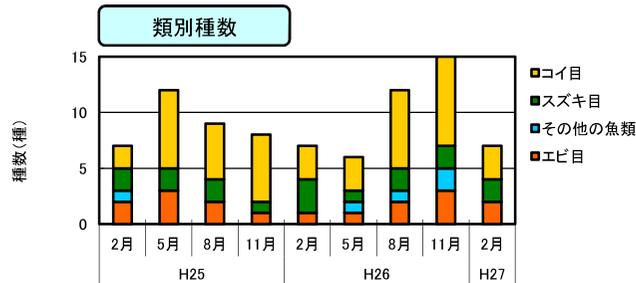
## (11) 干陸地周辺の生物 5) 河川の魚介類

### ① 河川(K10)

- 種数は6～15種でコイ目、スズキ目、エビ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は54～470個体/投網6打でコイ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 主な種はオイカワなどであった。



調査地点位置図



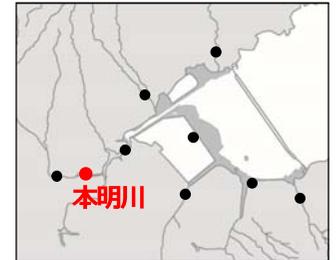
### 主な出現種

項目	調査月	平成25年				平成26年				平成27年		
		2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月		
主な出現種 (%)	コイ目	淡	ギンブナ		0.7	○	6.7		○	1.1		
		淡	ヤリタナゴ		○	4.5	28.9		○	1.1		
		淡	オイカワ	98.9	81.3	79.4	57.1	98.8	53.7	70.5	88.9	98.5
		淡	カワムツ	○	10.8	8.5	6.7		25.9	7.3	2.2	○
		淡	ムギツク		1.9	4.9			5.6	9.0	5.6	
	スズキ目	淡	イトモロコ		○		0.6	0.4		5.6	○	○
		回	トウヨシノボリ	1.1	4.2	2.1	○	0.4	14.8	6.0	1.1	1.5
		淡	ヌマチチブ					0.4				



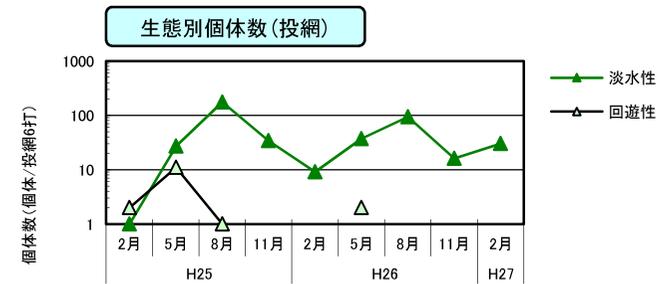
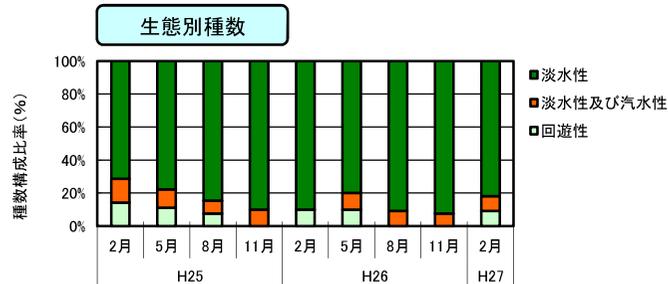
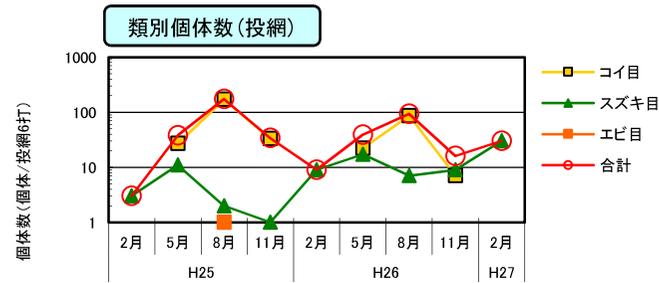
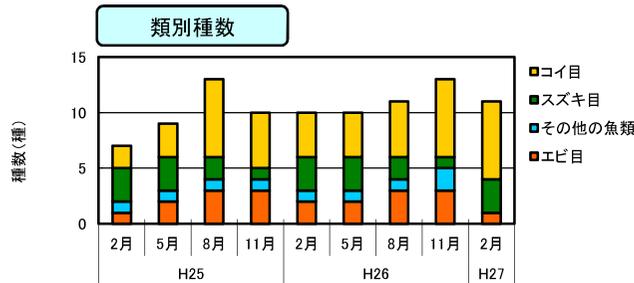
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で投網による採取個体数が上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の投網及び投網以外の漁法による出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、回: 回遊性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(11) 干陸地周辺の生物 5) 河川の魚介類  
② 河川(本明川)



調査地点位置図

- 種数は7～13種でコイ目、スズキ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は3～174個体/投網6打でコイ目、スズキ目が多く、生態別には主に淡水性、回遊性で構成されていた。
- 主な種はオイカワ、ヌマチチブ、トウヨシノボリなどであった。



主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年		
			2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月		
主な出現種 (%)	コイ目	淡	ギンプナ			17.8			○	○		○	○
		淡	ヤリタナゴ			17.2	2.9			5.1	○	○	○
		淡	オイカワ		55.3	45.4	91.2	○	51.3	91.4	31.3	○	○
		淡	カワムツ	○	15.8	6.3	○				6.3	○	○
		淡	モツゴ			9.8	2.9					6.3	○
	スズキ目	淡	ムギツク			○					1.1		
		淡	ドンコ	○	○				11.1		○		3.3
		回	トウヨシノボリ	66.7	28.9	○			5.1				○
		淡	ヌマチチブ	33.3	○	○	2.9	88.9	38.5	7.5	56.3	96.7	



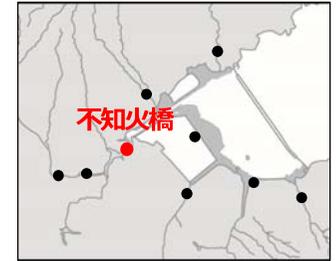
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で投網による採取個体数が上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の投網及び投網以外の漁法による出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、回:回遊性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

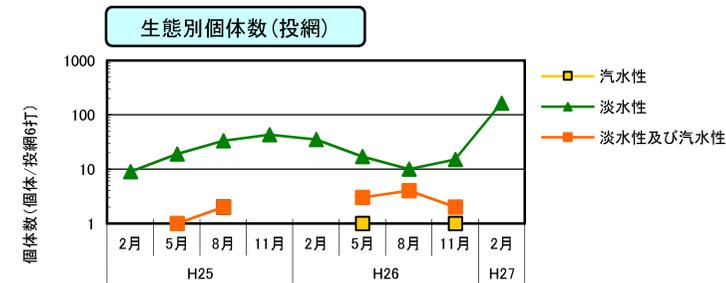
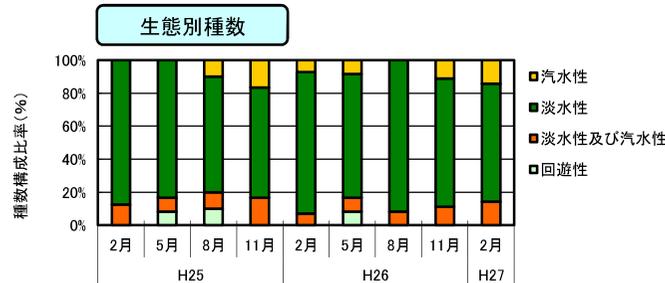
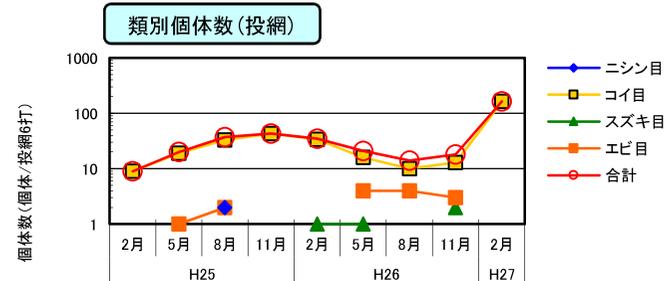
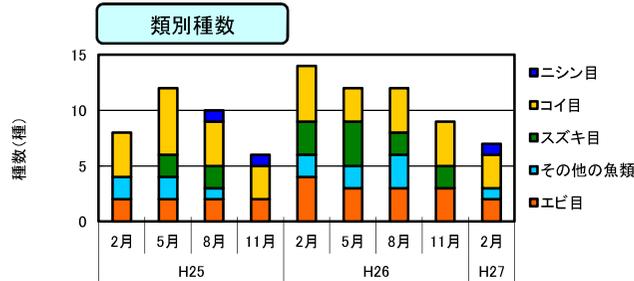
(11) 干陸地周辺の生物 5) 河川の魚介類

③ 河川(不知火橋)

- 種数は6～14種でコイ目、スズキ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は9～164個体/投網6打でコイ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 主な種はオイカワ、ギンブナなどであった。



調査地点位置図



主な出現種

項目	調査年月		平成25年				平成26年				平成27年	
			2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月	
主な出現種 (%)	ニシン目	汽			5.4							
		淡				○						○
	コイ目	淡		10.0			2.9					
		淡	22.2	55.0	37.8			28.6	35.7			○
		淡								5.6		
		淡	11.1	5.0	24.3				7.1			○
		淡	44.4	20.0	18.9	97.7	94.3	28.6	28.6	55.6	100.0	
	スズキ目	淡	22.2	5.0	8.1	2.3		19.0			11.1	
		汽						4.8			5.6	
	エビ目	淡					2.9				5.6	
淡・汽			5.0	5.4			14.3	28.6	11.1		○	
淡							4.8			5.6		



注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で投網による採取個体数が上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の投網及び投網以外の漁法による出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、回: 回遊性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

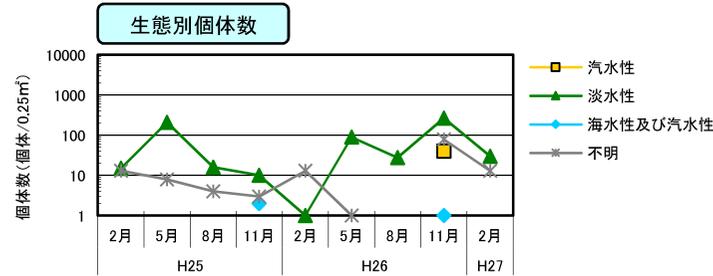
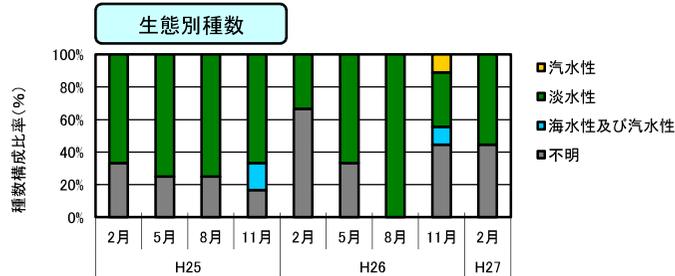
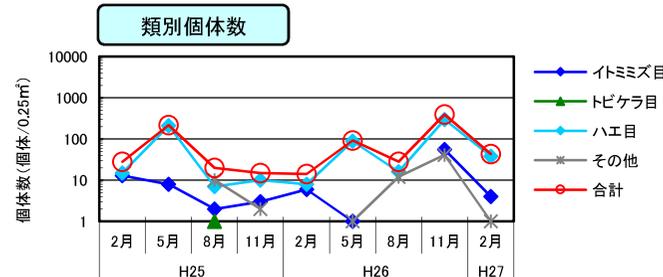
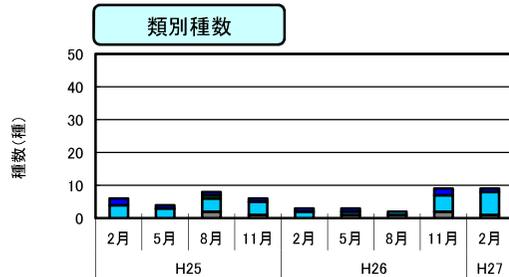
(11) 干陸地周辺の生物 6) 排水路・潮遊池の水生昆虫等

① 排水路・潮遊池(中央干拓地)

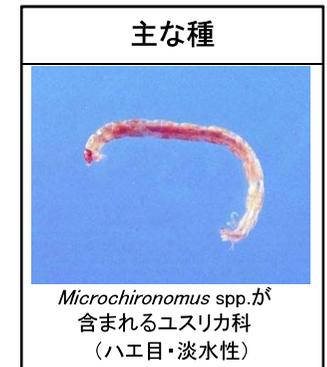
- 種数は2～9種でハエ目、その他、イトミミズ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は14～390個体/0.25㎡でハエ目、その他が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 主な種は *Microchironomus* spp.、ミズミズムシ科、チビミズムシ属、ユスリカ亜科などであった。



調査地点位置図



項目			平成25年				平成26年				平成27年	
			2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月	
主な出現種 (%)	イトミミズ目	不	ミズミズムシ亜科	28.6						6.2		
		不	イトミミズ亜科	17.9	3.7	10.0	20.0	42.9	1.1		7.9	9.3
	無吻蛭目	淡	イシビル科						1.1			
	ワラジムシ目	海・汽	イソコツブムシ属				13.3				○	
	アミ目	汽	クロイサザアミ							10.3		
	エビ目	淡	スジエビ							42.9		
	カマムシ目	淡	チビミズムシ属			45.0					○	
	ハエ目	淡	ウスバヒメガガンボ属		0.5							
		淡	ユスリカ属	○		○	13.3	7.1				○
		淡	ツヤユスリカ属	14.3	5.5							○
		淡	セボリユスリカ属				20.0					
		淡	<i>Microchironomus</i> spp.	28.6	90.3	10.0	26.7		97.8	57.1	56.4	34.9
		淡	ハモンユスリカ属	7.1							8.5	25.6
		淡	<i>Tanytus</i> spp.			10.0						
不		ヒゲユスリカ族								6.2		
不	ユスリカ亜科			10.0		50.0			○	11.6		
不	エリユスリカ亜科									7.0		



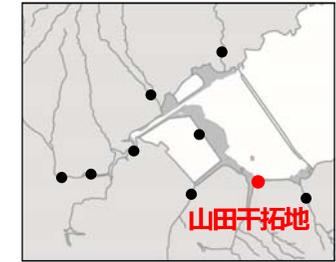
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、回: 回遊性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

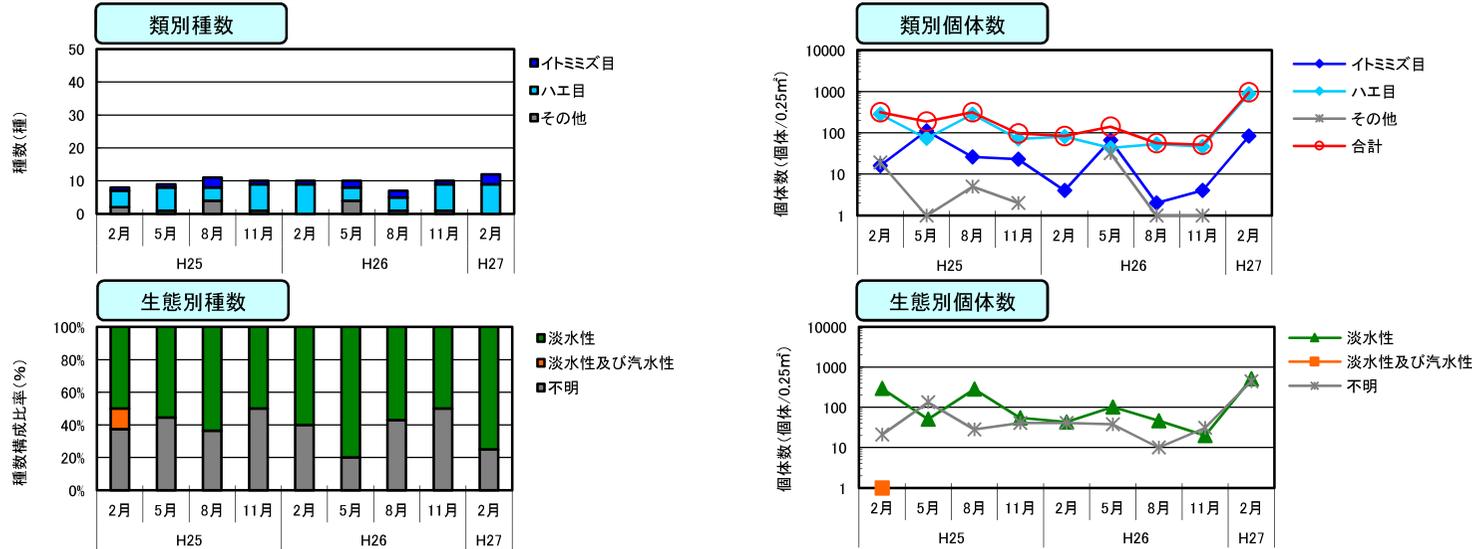
## (11) 干陸地周辺の生物 6) 排水路・潮遊池の水生昆虫等

### ② 排水路・潮遊池(山田干拓地)

- 種数は7～12種でハエ目、その他が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は51～959個体/0.25㎡でハエ目、イトミズ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 主な種はハモンユスリカ属、ヒゲユスリカ族、クロオビミズミズ、イトミズ亜科、クロユスリカ属、カワリユスリカ属、ヒゲユスリカ属などであった。



調査地点位置図



項目	調査年月											
	平成25年			平成26年			平成27年					
	2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月	2月		
主な出現種 (%)	マルスグレガイ目	不	シジミ属			0.6						
	オヨギミズ目	不	オヨギミズ科				19.1					
	イトミズ目	淡	エラミズ			○		1.8			○	
		淡	クロオビミズミズ					39.0				
	不	ミズミズ亜科			7.6							
	不	イトミズ亜科	5.0	69.7	○	24.0	○	7.8	1.8	7.8	8.4	
	物蛭目	淡	ヌマビル	5.7		○						
	エビ目	淡・汽	テナガエビ	0.3								
	ハエ目	淡	ユスリカ属	0.3		12.4	○	○			○	○
		淡	ツヤユスリカ属		○			5.0				○
		淡	<i>Dicrotendipes</i> spp.		11.8			○				
		淡	クロユスリカ属		34.9	34.4	8.3		16.1			
		淡	<i>Hydrobaenus</i> spp.				○					3.5
		淡	カワリユスリカ属	86.8	13.4		○	13.1		8.9	5.9	2.2
		淡	ハモンユスリカ属			42.5		11.9	22.7	55.4		○
淡		ナガレユスリカ属				12.5				○	○	
淡		ヒゲユスリカ属	0.3	○			14.3			23.5	46.0	
不	ヒゲユスリカ族				7.3	35.7			43.1	37.1		
不	ユスリカ亜科				9.4					○		
不	エリユスリカ亜科	1.3	5.4		○	○				○		
不	ユスリカ科	0.3	7.0		○			14.3	5.9			



主な種  
(ハエ目・淡水性)

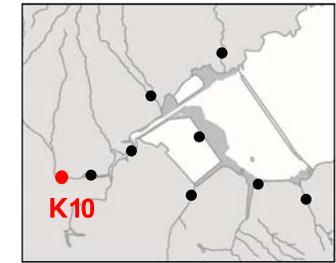
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、回: 回遊性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

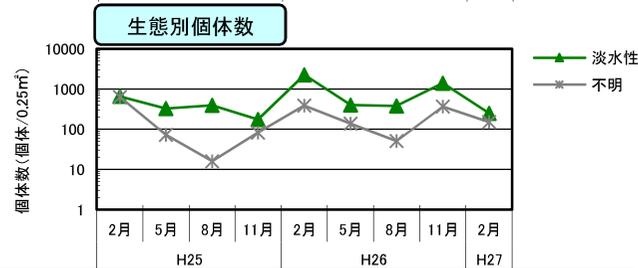
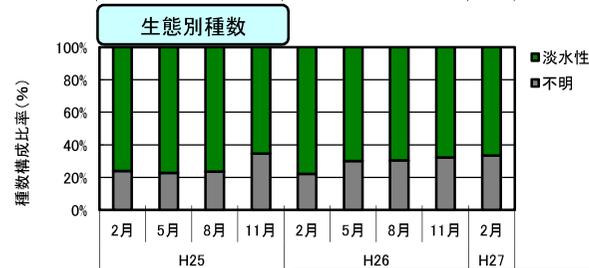
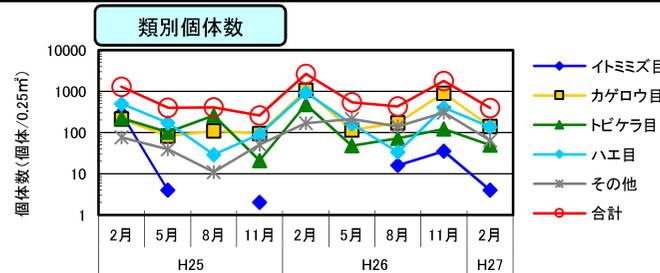
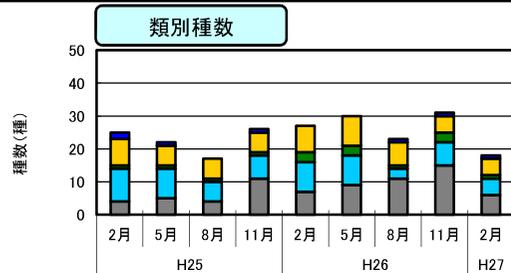
(11) 干陸地周辺の生物 7) 河川の水生昆虫等

① 河川(K10)

○種数は17~31種でハエ目、その他、カゲロウ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。  
 ○個体数は257~2,622個体/0.25㎡でカゲロウ目、ハエ目、トビケラ目、その他が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。  
 ○主な種はアカマダラカゲロウ、フタモンコカゲロウ、コガタシマトビケラ属、ミズミズ亜科、ミズムシ、ウデマ加里コカゲロウなどであった。



調査地点位置図



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年			
		2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月			
主な出現種 (%)	順列目	淡	ナミウズムシ	○	○	○	○	○	○	7.0	5.7	7.6	
	イトミミズ目	不	ミズミズ亜科	22.3	○	○	○	○	○	○	○	○	
	ワラジムシ目	淡	ミズムシ	○	○	○	8.9	○	30.7	7.0	○	○	
	カゲロウ目	淡	アカマダラカゲロウ	7.8	10.4	7.9	○	10.4	○	23.2	○	29.7	
		淡	フタバコカゲロウ	○	○	○	○	8.2	○	○	○	○	
		淡	フタモンコカゲロウ	○	○	○	21.8	○	○	○	○	31.7	
		淡	ウデマ加里コカゲロウ	○	○	6.2	8.2	20.1	12.3	○	○	○	
		淡	シロタニガワカゲロウ	○	○	○	○	○	○	○	○	18.5	
		淡	ヒメトビイロカゲロウ	○	○	5.2	○	○	○	○	○	○	
		淡	ヒメカゲロウ属	○	○	6.9	○	○	○	○	○	○	
		トビケラ目	淡	コガタシマトビケラ属	17.2	25.6	63.5	8.2	18.0	8.6	16.7	6.2	12.4
		ハエ目	淡	ツヤユスリカ属	○	○	○	○	○	○	○	○	7.3
			淡	<i>Micropsectra</i> spp.	○	11.1	○	○	○	○	○	○	○
	淡		ハモンユスリカ属	○	11.1	○	○	○	○	○	○	○	
	不		ヤマトヒメユスリカ族	○	○	○	○	○	○	○	○	14.0	
	不		ヒゲユスリカ族	5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	
	不		エリユスリカ亜科	16.0	○	○	○	○	12.1	○	○	17.3	
	不		ユスリカ科	○	9.1	○	16.3	○	6.0	○	5.7	○	
	淡	<i>Simulium</i> spp.	○	○	○	○	16.8	○	○	○	○		
	コウチュウ目	淡	クシヒゲマルヒラタドコムシ	○	○	○	○	○	○	6.5	○	○	

注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海: 海水性、汽: 汽水性、淡: 淡水性、海・汽: 海水性・汽水性、淡・汽: 淡水性・汽水性、回: 回遊性、不: 不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

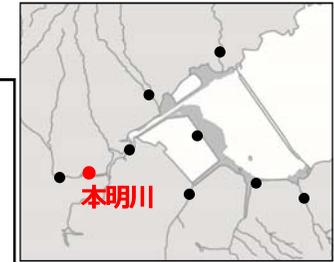


諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

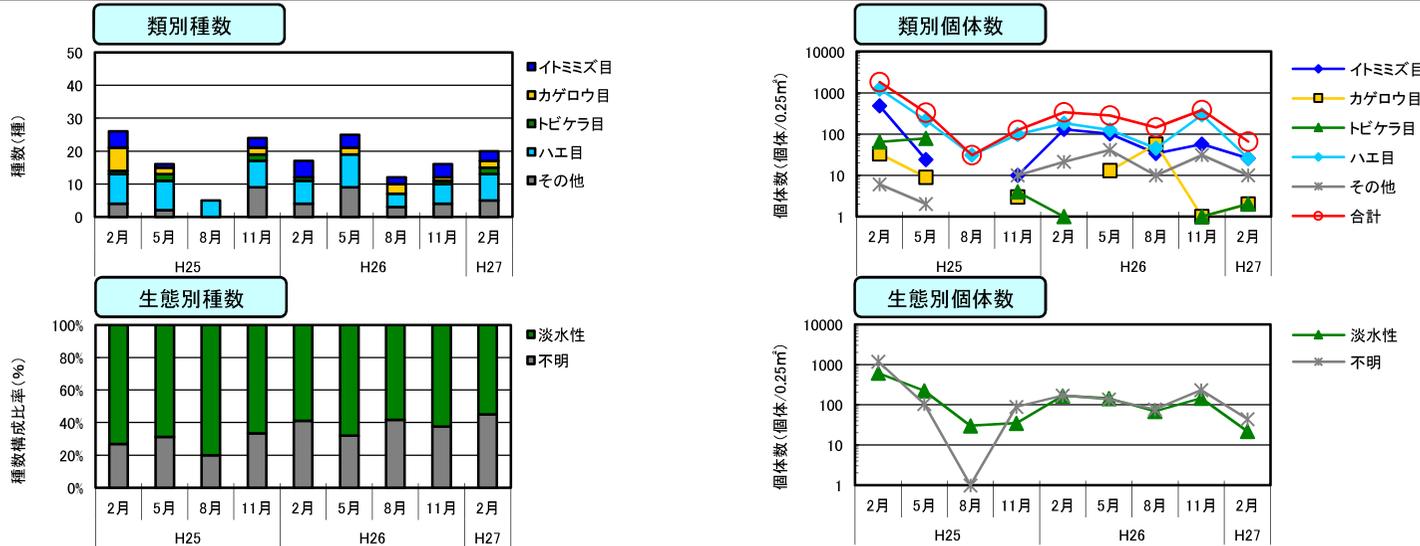
(11) 干陸地周辺の生物 7) 河川の水生昆虫等

② 河川(本明川)

- 種数は5~26種でハエ目、その他が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は31~1,828個体/0.25㎡でハエ目、イトミミズ目、カゲロウ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 主な種はイトミミズ亜科、ヒゲユスリカ族、*Slavina* spp.、ヒメカゲロウ属、*Microchironomus* spp.、ハモンユスリカ属、エリユスリカ亜科などであった。

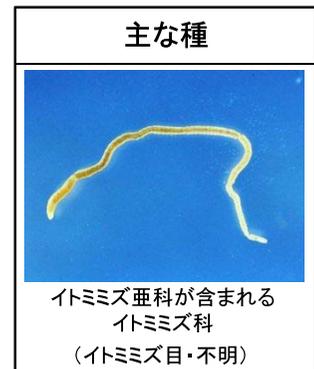


調査地点位置図



項目	調査年月	平成25年				平成26年				平成27年
		2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月
マルスダレガイ目	不	シジミ属	○							
	淡	エラムミズ			5.6	○				
イトミミズ目	淡	<i>Slavina</i> spp.	○			19.0	8.5		○	○
	不	ミズミミズ亜科	19.3	7.3	○			21.9	6.3	
カゲロウ目	不	イトミミズ亜科	○			13.1	16.0			22.7
	淡	ヌマビル								7.1
トビケラ目	淡	シロタニガワカゲロウ	○							8.2
	淡	ヒメカゲロウ属								30.1
ハエ目	淡	<i>Enomus</i> spp.			2.4	○				○
	淡	コガタシマトビケラ属			22.7					○
主な出現種 (%)	淡	エダグヒゲユスリカ属	8.8							
	淡	ツヤユスリカ属		○		2.4				○
	淡	<i>Dicrotendipes</i> spp.					6.4			○
	淡	<i>Microchironomus</i> spp.			83.9					
	淡	<i>Microsetra</i> spp.	10.5	○						
	淡	ハモンユスリカ属		24.5	6.5	○				
	淡	カユスリカ属			3.2					
	淡	ヒゲユスリカ属			3.2	5.6	11.9		5.5	21.3
	不	ヤマトヒメユスリカ族	○	12.7			10.7	○	21.9	9.1
	不	ヒゲユスリカ族	○	○		52.8	○	12.1		37.9
	不	ユスリカ亜科								4.5
	不	エリユスリカ亜科	34.2	○			18.5			4.5
	不	ユスリカ科	6.2	8.5	3.2	12.8	○	○		10.5

注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、回:回遊性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

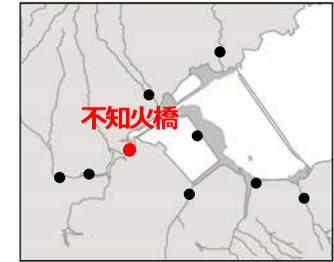


諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

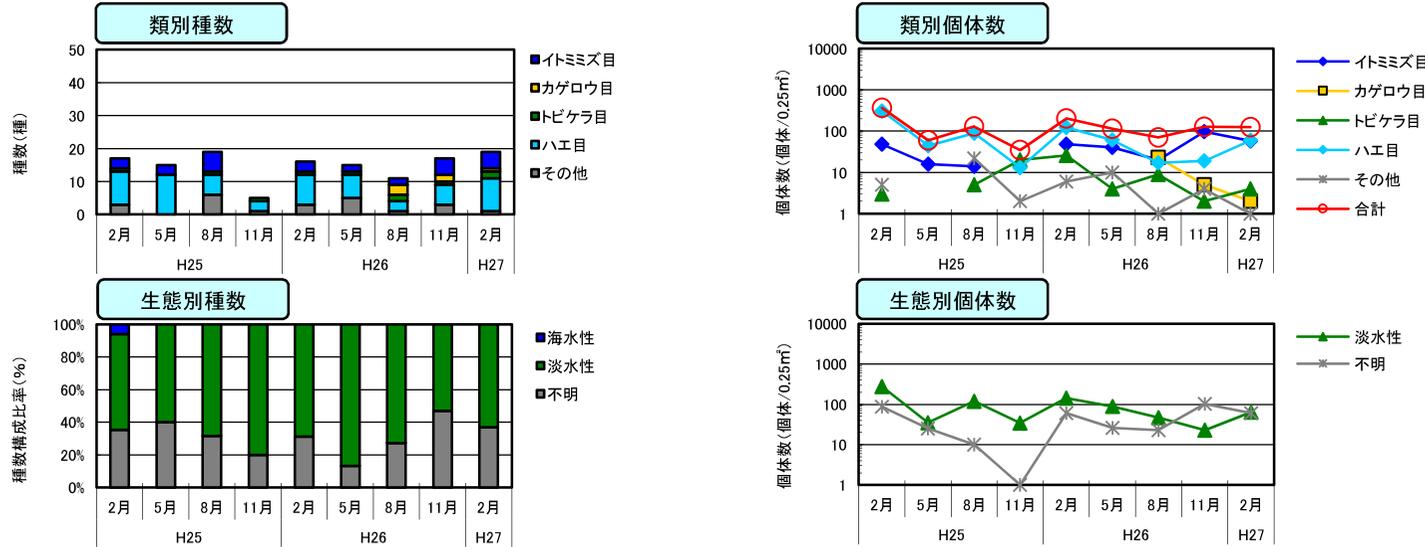
(11) 干陸地周辺の生物 7) 河川の水生昆虫等

③ 河川(不知火橋)

- 種数は5~19種でハエ目、イトミミズ目、カゲロウ目、その他が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 個体数は35~365個体/0.25㎡でハエ目、イトミミズ目、カゲロウ目、トビケラ目が多く、生態別には主に淡水性で構成されていた。
- 主な種はイトミミズ亜科、セボリユスリカ属、ヒメカゲロウ属、*Ecnomus* spp.、*Hydrobaenus* spp.などであった。



調査地点位置図



項目	調査年月	平成25年				平成26年			平成27年			
		2月	5月	8月	11月	2月	5月	8月	11月	2月		
主な出現種 (%)	イトミミズ目	淡 エラミミズ		6.7	○		○	13.0		6.3	○	
		淡 <i>Nais</i> spp.			○						6.4	
		淡 <i>Slavina</i> spp.	9.9		3.1		16.7					9.6
		淡 テングミズミミズ									3.1	
		不 ミズミミズ亜科				○				18.6	○	○
	ヨコエビ目	不 イトミミズ亜科	○	18.3	3.1		○	21.7	10.0	64.6	25.6	
		淡 フロリダマミズヨコエビ	○			5.7		○				
	カゲロウ目	淡 <i>Cloeon</i> spp.								3.1		
		淡 ヒメカゲロウ属							30.0			
	カメムシ目	淡 チビミズムシ属			13.1				○	○		
		淡 <i>Ecnomus</i> spp.	○		3.8	57.1	12.8	○	11.4	○	○	
	トビケラ目	淡 <i>Ecnomus</i> spp.	○									
		淡 ツヤユスリカ属	○	6.7		5.7	○				○	
	ハエ目	淡 <i>Dicrotendipes</i> spp.	○						5.2		○	
		淡 セボリユスリカ属	20.3	25.0	61.5	28.6	22.2	19.1	15.7	○	○	
		淡 <i>Hydrobaenus</i> spp.	37.8				7.4				14.4	
		淡 ハモンユスリカ属	3.3	○	3.1			19.1	○			
		淡 <i>Sitochironomus</i> spp.		10.0	○			○				
不 ヌスリカ亜科			○	○						3.1	○	
不 エリユスリカ亜科		14.8	○	○		21.2				4.7	14.4	
不 ヌスリカ科		○	10.0	○	2.9					3.1	○	

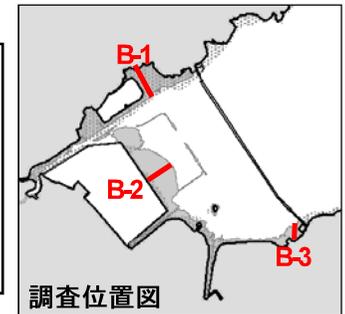
注1) 個体数のグラフは対数表示のため、出現数が0の場合はプロットされない。  
 注2) 生態別集計において複数の水域に生息する可能性のある種を「○○性及び○○性」と表示した。また種レベルの同定が不能な種、あるいは生息水域が未解明な種を「不明」と表示した。  
 注3) 主な出現種表中の数値は各月で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。  
 注4) 主な出現種表中の略記は次のとおり 海:海水性、汽:汽水性、淡:淡水性、海・汽:海水性・汽水性、淡・汽:淡水性・汽水性、回:回遊性、不:不明  
 注5) 主な種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。



諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

(11) 干陸地周辺の生物 8) 陸生動物(ほ乳類、は虫類、両生類、昆虫類)

- ほ乳類の種数は全線で7種、B-1で1~4種、B-2で3~4種、B-3で1~4種であった。主な種は全線でカヤネズミ、タヌキ、イタチ属などであった。
- 両生類の種数は全線で8種、B-1で2~5種、B-2で1~2種、B-3で2~4種であった。主な種は全線でヌマガエルなど、B-1でウシガエルなど、B-3でアマガエル、トノサマガエル、ツチガエルなどであった。
- は虫類の種数は全線で7種、B-1で1~6種、B-2で1種、B-3で1~4種であった。主な種は全線でカナヘビなど、B-1でスッポン、シマヘビなど、B-3でスッポンなどであった。



各調査測線におけるほ乳類の出現種

No.	目	科	種	B-1			B-2			B-3											
				H25		H26	H25		H26	H25		H26									
				春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季						
1	モグラ	モグラ	ヒミズ			●															
2			コウベモグラ		●	●															
3	ウサギ	ウサギ	ノウサギ																		
4	ネズミ	ネズミ	カヤネズミ	●	●	●									●						
5	ネコ	イヌ	タヌキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●						
6			イタチ		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●						
7			ニホンアナグマ				●														
合計	4目	5科	7種	季節別の種数			季節別の種数			季節別の種数			季節別の種数								
				2種	4種	4種	3種	1種	3種	3種	3種	4種	3種	3種	4種	4種	4種	4種	1種	1種	2種
				各測線の種数			各測線の種数			各測線の種数			各測線の種数								
				6種			6種			6種			5種								
				全測線の種数			全測線の種数			全測線の種数			全測線の種数								
				7種			7種			7種			7種								

各調査測線における両生類の出現種

No.	目	科	種	B-1			B-2			B-3											
				H25		H26	H25		H26	H25		H26									
				春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季						
1	アマガエル	イモリ	イモリ			○															
2	カエル	アマガエル	アマガエル								○		○	●	○						
3		アマガエル	ニホンアマガエル			○															
4		アマガエル	トノサマガエル	○			○							○	○						
5		アマガエル	ヌマガエル	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
6		アマガエル	ウシガエル	●	○	○	○	●	○			○	●		●						
7		アマガエル	ツチガエル									○	○	●	○						
8		アマガエル	シレーグアマガエル			○								○	○						
合計	2目	4科	8種	季節別の種数			季節別の種数			季節別の種数			季節別の種数								
				3種	2種	2種	5種	2種	3種	1種	1種	1種	1種	2種	1種	4種	3種	2種	4種	4種	4種
				各測線の種数			各測線の種数			各測線の種数			各測線の種数								
				6種			6種			6種			5種								
				全測線の種数			全測線の種数			全測線の種数			全測線の種数								
				8種			8種			8種			8種								

各調査測線におけるは虫類の出現種

No.	目	科	種	B-1			B-2			B-3											
				H25		H26	H25		H26	H25		H26									
				春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季	春季	夏季	秋季						
1	カメ	イシガメ	クサガメ																		
2			スッポン	○			●							○	●						
3	トカゲ	ヤモリ	ヤモリ		●									○	●						
4		カナヘビ	カナヘビ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
5		ヘビ	シマヘビ	●	●	●	●							○	○						
6			アオダイショウ		●									●							
7			クサリヘビ		●										○						
合計	2目	6科	7種	季節別の種数			季節別の種数			季節別の種数			季節別の種数								
				1種	1種	6種	2種	2種	3種	1種	1種	1種	1種	1種	1種	1種	2種	4種	2種	2種	3種
				各測線の種数			各測線の種数			各測線の種数			各測線の種数								
				7種			7種			7種			7種								
				全測線の種数			全測線の種数			全測線の種数			全測線の種数								
				7種			7種			7種			7種								

主な出現種

カヤネズミ

ヌマガエル

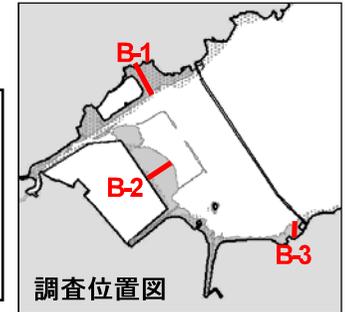
カナヘビ

注1) 表中の凡例は次のとおり。○: 生体の確認、●: フィールドサイン、鳴き声による確認  
 注2) 調査時期 平成25年度春季: 5月20~23日、夏季: 7月22~25日、秋季: 9月23~26日、平成26年度春季: 5月19~22日、夏季: 7月21~24日、秋季: 9月21~24日  
 注3) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

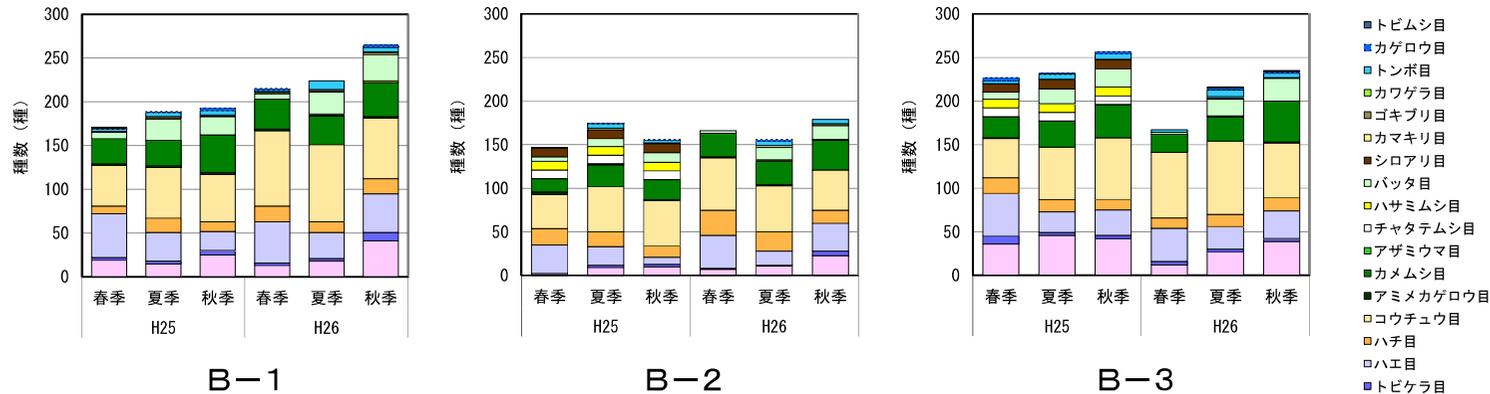
諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

(11) 干陸地周辺の生物 8) 陸生動物(ほ乳類、は虫類、両生類、昆虫類)

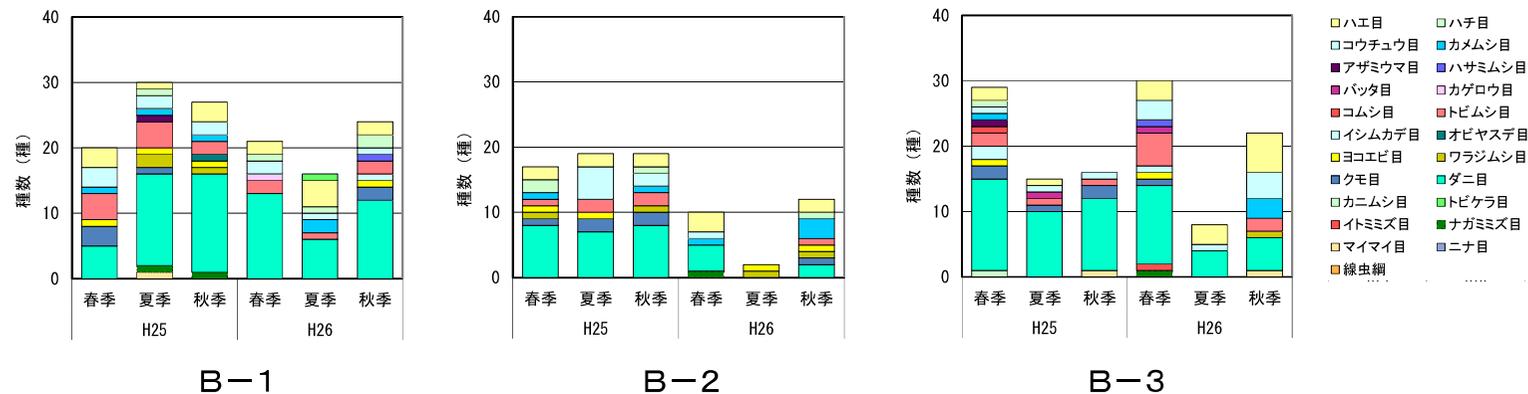
○昆虫類の種数はB-1で171~265種、B-2で147~179種、B-3で167~257種であった。主な目はB-1でコウチュウ目、ハエ目など、B-2でカメムシ目、コウチュウ目など、B-3でカメムシ目、コウチュウ目、ハエ目、チョウ目などであった。  
 ○土壌動物の種数はB-1で16~30種、B-2で2~19種、B-3で8~30種であった。主な目はB-1でハエ目、トビムシ目、ダニ目など、B-2、B-3でハエ目、ダニ目などであった。



各調査測線における昆虫類の出現種数



各調査測線における土壌動物の出現種数



主な出現種

チョウ目  
イチモンジセセリ

カメムシ目  
ハマベアワフキ

ダニ目  
オニダニ科

注1) 図中の数値は、種数の合計を示す。  
 注2) 調査時期 平成25年度春季:5月20~23日、夏季:7月22~25日、秋季:9月23~26日、平成26年度春季:5月19~22日、夏季:7月21~24日、秋季:9月21~24日  
 注3) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

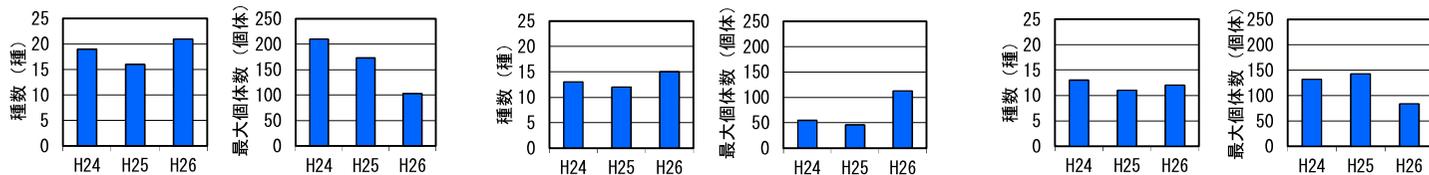
## (11) 干陸地周辺の生物 9) 鳥類(ラインセンサス、越冬期)

### ① ルート1、ルート2、ルート4

- 種数はルート1で16～21種、ルート2で12～15種、ルート4で11～13種であった。
- 個体数はルート1で103～210個体、ルート2で46～113個体、ルート4で84～143個体であった。
- 主な種はルート1でホオジロ、オオジュリンなど、ルート2でヒバリなど、ルート4でツリスガラ、オオジュリンなどであった。



### 各ルートにおける鳥類の出現状況



ルート1

ルート2

ルート4

#### ルート1

項目		年度			
		24年度	25年度	26年度	
主な出現種 (%)	陸鳥	ヒバリ	○	11.6	8.7
		タヒバリ	9.5	○	○
		ツグミ	○	○	10.7
		ツリスガラ	13.8	19.7	8.7
		ホオジロ	24.3	17.3	21.4
		オオジュリン	20.5	21.4	23.3
		カワラヒワ	12.4	12.1	○

#### ルート4

項目		年度			
		24年度	25年度	26年度	
主な出現種 (%)	陸鳥	ヒバリ	○	2.8	4.8
		ツグミ	25.8	○	21.4
		ツリスガラ	28.0	35.0	7.1
		ホオジロ	3.0	○	○
		アオジ	○	3.5	8.3
		オオジュリン	22.7	25.2	44.0
		カワラヒワ	12.1	28.7	○

#### ルート2

項目		年度			
		24年度	25年度	26年度	
主な出現種 (%)	水辺鳥	タゲリ	○	8.7	○
		タシギ	3.6	○	○
	陸鳥	ヒバリ	56.4	41.3	33.6
		ハクセキレイ	3.6	6.5	○
		タヒバリ	10.9	19.6	22.1
		ツグミ	7.3	○	9.7
		ホオジロ	5.5	○	5.3
		オオジュリン	○	○	7.1
		カワラヒワ	○	○	5.3
		スズメ	8.7	○	○

#### 主な出現種



ホオジロ



ヒバリ



ツリスガラ

注1) 主な出現種表中の数値は各年で上位5種となった種の個体数構成比率(%)、○は上位5種以外の出現種を示す。

注2) 主な出現種表中の水鳥、水辺鳥、陸鳥の定義は次のとおり 水鳥:海上・池・河川などに生息する鳥類のうち、主に水上で生活する種、水辺鳥:池・河川・干潟・海岸などに生息する鳥類のうち、主に水辺で生活している種、陸鳥:主に陸域に生息する種

注3) 各ルートの主な植生等は次のとおり、ルート1:ヨシ群落、シバ群落、タチスズメノヒエ群落、ルート2:農耕地、ルート4:ヨシ群落

注4) 調査時期 平成24年度越冬期:1月23～24日、平成25年度越冬期:1月24～25日、平成26年度越冬期:1月26～27日

注5) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

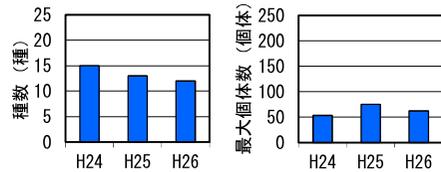
## (11) 干陸地周辺の生物 9) 鳥類(ラインセンサス、越冬期)

### ② ルート3干拓地、ルート3干陸地

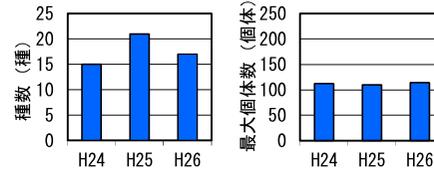
- 種数はルート3干拓地で12～15種、ルート3干陸地で15～21種であった。
- 個体数はルート3干拓地で53～75個体、ルート3干陸地で110～114個体であった。
- 主な種はルート3干拓地でタヒバリ、ホオジロなど、ルート3干陸地でホオジロなどであった。



### 各ルートにおける鳥類の出現状況



ルート3干拓地



ルート3干陸地

### ルート3干拓地

項目		年度			
		24年度	25年度	26年度	
主な出現種 (%)	水鳥	マガモ	11.3		
		オカヨシガモ	7.5		
	陸鳥	ヒバリ	15.1	20.0	22.6
		ハクセキレイ	○	8.0	4.8
		タヒバリ	17.0	26.7	11.3
		ツグミ	○		14.5
		ホオジロ	15.1	12.0	27.4
		カワラヒワ	7.5	9.3	4.8
		スズメ		○	4.8

### ルート3干陸地

項目		年度			
		24年度	25年度	26年度	
主な出現種 (%)	水鳥	マガモ	8.0	4.5	
		陸鳥	タヒバリ	8.0	22.7
	ツグミ	10.7	4.5	14.9	
	ツリスガラ	○		7.9	
	ホオジロ	27.7	30.0	35.1	
	アオジ	○	8.5	○	
	オオジュリン	○	○	9.6	
	アトリ	○	4.5		
	カワラヒワ	16.1	○	9.6	

**主な出現種**



タヒバリ



ホオジロ

注1) 主な出現種表中の数値は各年で上位5種となった種の個体数構成比率(%), ○は上位5種以外の出現種を示す。

注2) 主な出現種表中の水鳥、水辺鳥、陸鳥の定義は次のとおり 水鳥: 海上・池・河川などに生息する鳥類のうち、主に水上で生活する種、水辺鳥: 池・河川・干潟・海岸などに生息する鳥類のうち、主に水辺で生活している種、陸鳥: 主に陸域に生息する種

注3) 各ルートの主な植生等は次のとおり、ルート3干拓地: 農耕地、シバ群落、ルート3干陸地: ヨシ群落

注4) 調査時期 平成24年度越冬期: 1月23～24日、平成25年度越冬期: 1月24～25日、平成26年度越冬期: 1月26～27日

注5) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

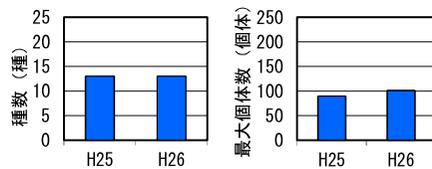
## (11) 干陸地周辺の生物 9) 鳥類(ラインセンサス、繁殖期)

### ③ ルート1、ルート2、ルート4

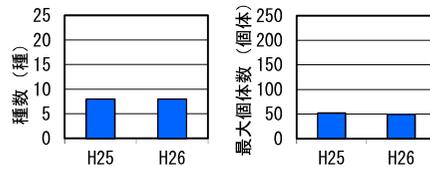
- 種数はルート1で13種、ルート2で8種、ルート4で8～10種であった。
- 個体数はルート1で90～101個体、ルート2で49～52個体、ルート4で57～72個体であった。
- 主な種はルート1でオオヨシキリなど、ルート2でヒバリなど、ルート4でオオヨシキリなどであった。



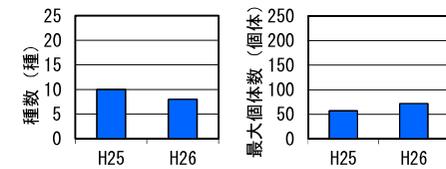
### 各ルートにおける鳥類の出現状況



ルート1



ルート2



ルート4

#### ルート1

項目		年度		25年度	26年度
主な出現種 (%)	水辺鳥	アオサギ		2.2	○
	水鳥	マガモ		2.2	
	陸鳥	キジバト		2.2	○
		ヒバリ		28.9	14.9
		ツバメ		2.2	○
		オオヨシキリ		35.6	30.7
		セッカ		11.1	8.9
		ホオジロ		10.0	11.9
		ハシボソガラス		○	8.9

#### ルート2

項目		年度		25年度	26年度
主な出現種 (%)	水鳥	カルガモ			4.1
		トビ		1.9	
	陸鳥	ヒバリ		50.0	55.1
		ツバメ			4.1
		セッカ		17.3	16.3
		ホオジロ		1.9	4.1
		カワラヒワ		1.9	
		スズメ		19.2	
		ムクドリ		1.9	
	ハシボソガラス		5.8	12.2	

#### ルート4

項目		年度		25年度	26年度
主な出現種 (%)	水辺鳥	ゴイサギ		1.8	
		チュウヒ		1.8	
	陸鳥	キジバト			2.8
		ヒバリ		1.8	
		ツバメ		1.8	
		ウグイス		1.8	2.8
		オオヨシキリ		57.9	47.2
		セッカ		26.3	22.2
		ホオジロ		1.8	9.7
		ハシボソガラス		1.8	12.5
	ハシブトガラス		3.5		

#### 主な出現種



オオヨシキリ



ヒバリ

注1) 主な出現種表中の数値は各年で上位5種となった種の個体数構成比率(%)

注2) 主な出現種表中の水鳥、水辺鳥、陸鳥の定義は次のとおり 水鳥:海上・池・河川などに生息する鳥類のうち、主に水上で生活する種、水辺鳥:池・河川・干潟・海岸などに生息する鳥類のうち、主に水辺で生活している種、陸鳥:主に陸域に生息する種

注3) 各ルートの主な植生等は次のとおり、ルート1:ヨシ群落、シバ群落、タチスズメノヒエ群落、ルート2:農耕地、ルート4:ヨシ群落

注4) 調査時期 平成25年度繁殖期:6月5～6日、平成26年度繁殖期:6月3～4日

注5) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

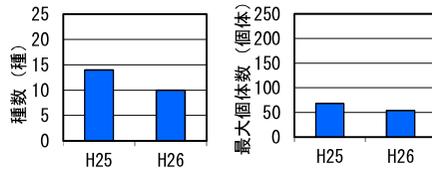
## (11) 干陸地周辺の生物 9) 鳥類(ラインセンサス、繁殖期)

### ④ ルート3干拓地、ルート3干陸地

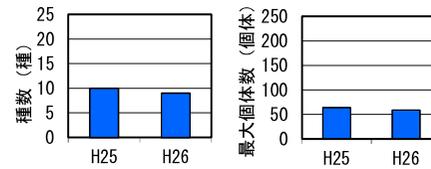
- 種数はルート3干拓地で10～14種、ルート3干陸地で9～10種であった。
- 個体数はルート3干拓地で54～68個体、ルート3干陸地で59～64個体であった。
- 主な種はルート3干拓地でヒバリなど、ルート3干陸地でオオヨシキリなどであった。



### 各ルートにおける鳥類の出現状況



ルート3干拓地



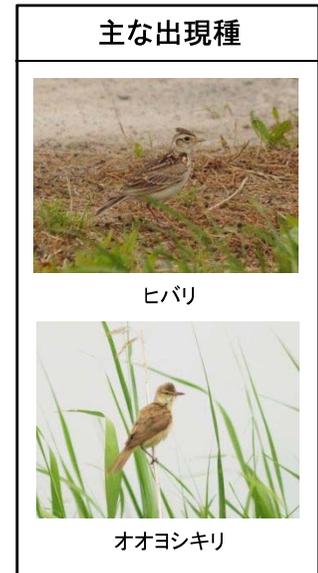
ルート3干陸地

### ルート3干拓地

項目		年度	
		25年度	26年度
主な出現種 (%)	陸鳥		
	ヒバリ	26.5	40.7
	ツバメ	○	11.1
	セッカ	10.3	16.7
	ホオジロ	14.7	9.3
	カワラヒワ	8.8	○
スズメ	19.1	7.4	

### ルート3干陸地

項目		年度	
		25年度	26年度
主な出現種 (%)	水辺鳥		
	アオサギ	3.1	○
	陸鳥		
	ヒバリ	6.3	13.6
	ツバメ	3.1	○
	オオヨシキリ	53.1	37.3
	セッカ	9.4	13.6
	ホオジロ	17.2	10.2
カワラヒワ		15.3	
ハシブトガラス	3.1		



注1) 主な出現種表中の数値は各年で上位5種となった種の個体数構成比率(%)

注2) 主な出現種表中の水鳥、水辺鳥、陸鳥の定義は次のとおり 水鳥:海上・池・河川などに生息する鳥類のうち、主に水上で生活する種、水辺鳥:池・河川・干潟・海岸などに生息する鳥類のうち、主に水辺で生活している種、陸鳥:主に陸域に生息する種

注3) 各ルートの主な植生等は次のとおり、ルート3干拓地:農耕地、シバ群落、ルート3干陸地:ヨシ群落

注4) 調査時期 平成25年度繁殖期:6月5～6日、平成26年度繁殖期:6月3～4日

注5) 主な出現種の写真は調整池、諫早湾あるいは有明海のいずれかで採取・確認された個体である。

(12) 漁業生産 1) 漁業種類毎の漁場と代表種(諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価における予測対象種)

- 有明海の漁船漁業については、小型底びき網、船びき網、袋待網、固定式刺網、流し網、小型定置網、はえ縄、釣、採貝漁業、潜水器漁業、かご漁業及びたこ縄が操業されている。  
 ○養殖業については、マガキ、のり類、わかめ類、こんぶ類が養殖されている。

有明海で操業されている漁業種類と代表種及び主な漁場位置

漁業種類		諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価で 選定した代表種 (漁業種類毎の主な漁獲物から最も漁獲量が多いものを標準和名で整理)	漁業種類別漁場位置			
			有明海湾奥部	有明海湾中部	有明海湾口部	諫早湾及びその周辺海域
漁 船 漁 業	小型底びき網(じょれん)	サルボウ	○	○		○
	小型底びき網(えびこぎ網)	クルマエビ		○		○
	小型底びき網(しお打瀬網)	-			○	
	船びき網(吾智網)	-			○	
	袋待網(あんこう網)	シバエビ	○	○	○	○
	固定式刺網(浮刺網)	エツ	○	○	○	
	固定式刺網(底刺網)	あかしたびらめ	○	○	○	○
	流し網(浮流し網)	スズキ	○	○	○	○
	流し網(底流し網)	シロギス		○	○	○
	流し網(えび流し網)	シバエビ	○	○	○	○
	流し網(源式網)	クルマエビ	○	○	○	○
	小型定置網	コノシロ	○	○	○	○
	はえ縄	トラフグ	○	○	○	○
	釣	スズキ	○	○	○	○
	採貝漁業	アサリ	○	○	○	○
	潜水器漁業(たいらぎ漁)	タイラギ	○	○		○
	かご漁業(あなごかご)	シャコ	○	○	○	○
	かご漁業(いかかご)	コウイカ	○	○	○	○
	かご漁業(かにかご)	ガザミ	○	○	○	○
かご漁業(たこつぼ)	マダコ	○	○	○	○	
たこ縄(いいだこ漁)	イイダコ	○	○	○	○	
養 殖 業	かき類養殖業	マガキ	○	○		○
	のり類養殖業	のり類	○	○		○
	わかめ類養殖業	わかめ類		○	○	
	こんぶ類養殖業	こんぶ類		○		

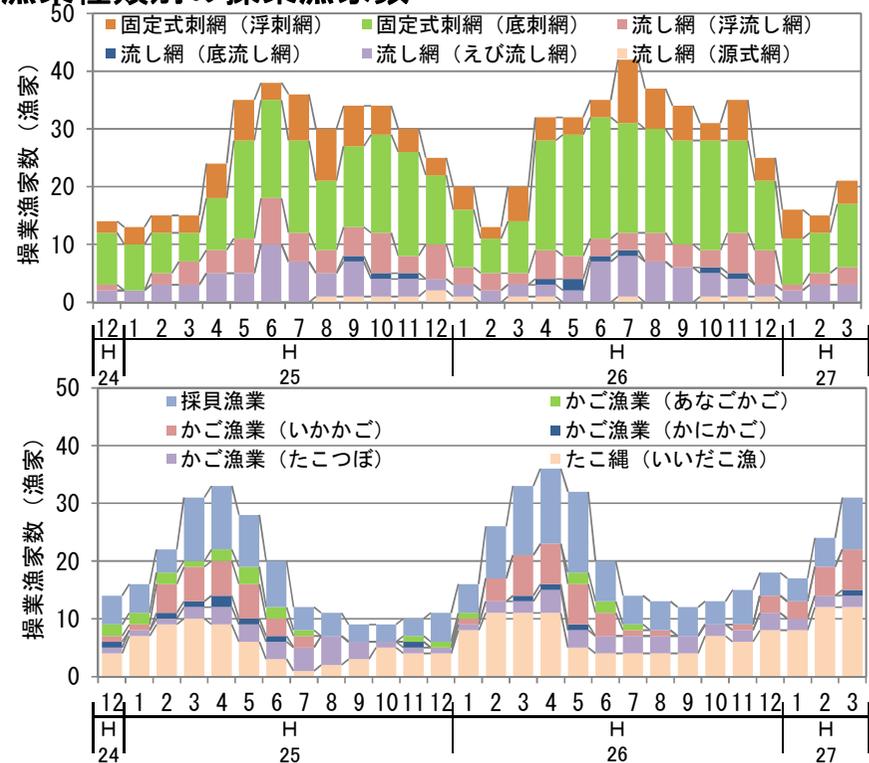
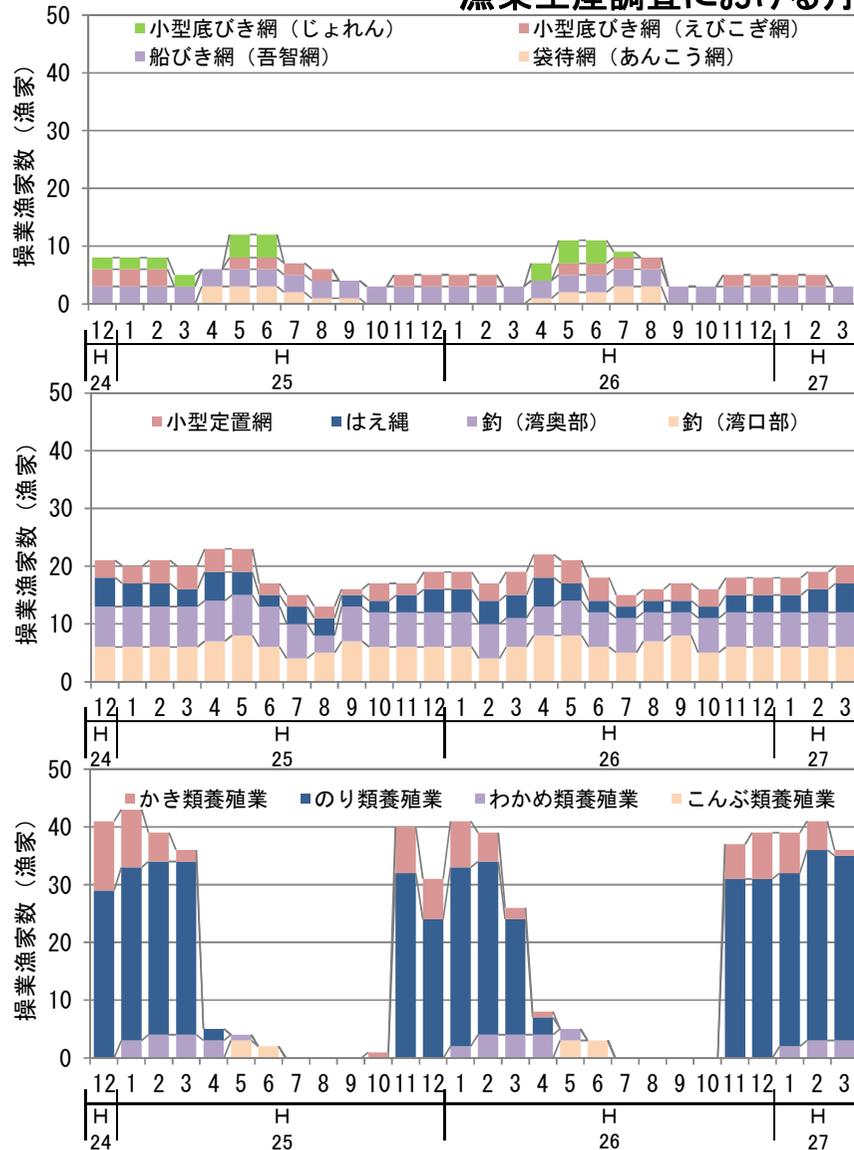
備考) 代表種欄の“-”は設定なし。

出典) 「諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価書 概要版」(p. 53~p. 54) をもとに作成

(12) 漁業生産 2) 調査概要

○有明海及び諫早湾における漁船漁業及び養殖業の状況を把握するため、漁業種類別の漁家を標本とした操業日誌をもとに、平成24年12月から漁業種類別及び魚種別の漁場範囲、漁獲量、漁獲努力量並びに養殖業種類別の収穫量等を調査した。  
 ○調査結果は、有明海の1分格子(東西方向約1.5km、南北方向約1.8km)のメッシュ図としてとりまとめた。

漁業生産調査における月別・漁業種類別の操業漁家数

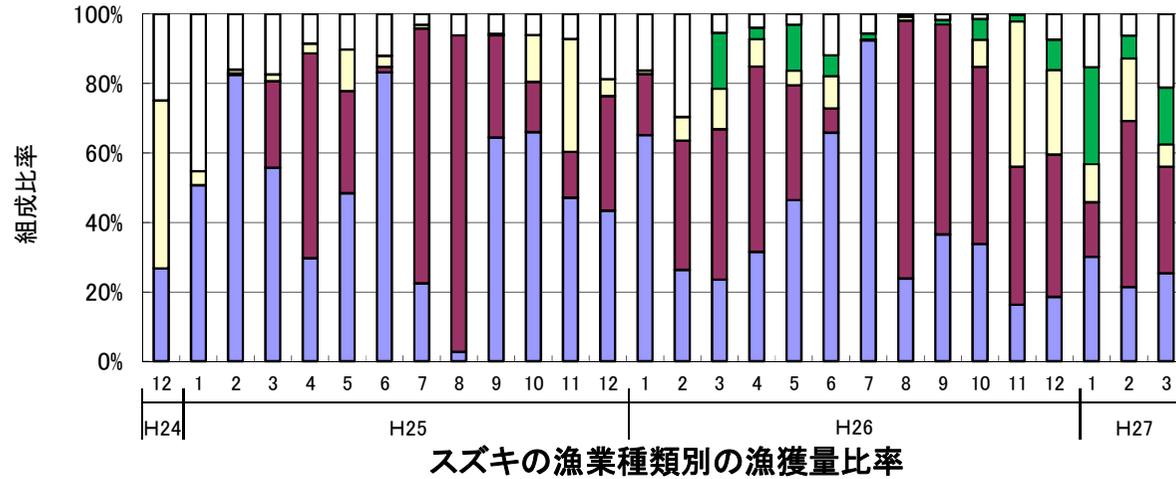


※船びき網(吾智網)、わかめ類養殖業、こんぶ類養殖業は諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価の予測対象外  
 ※採貝漁業は、あさり漁、さるぼう漁。

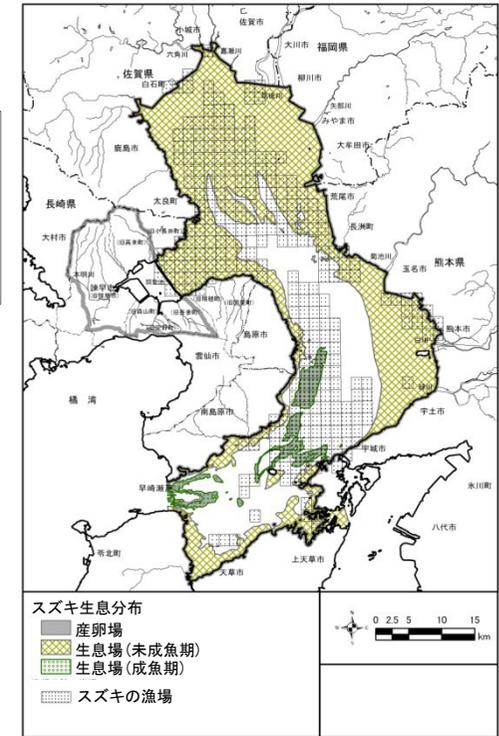
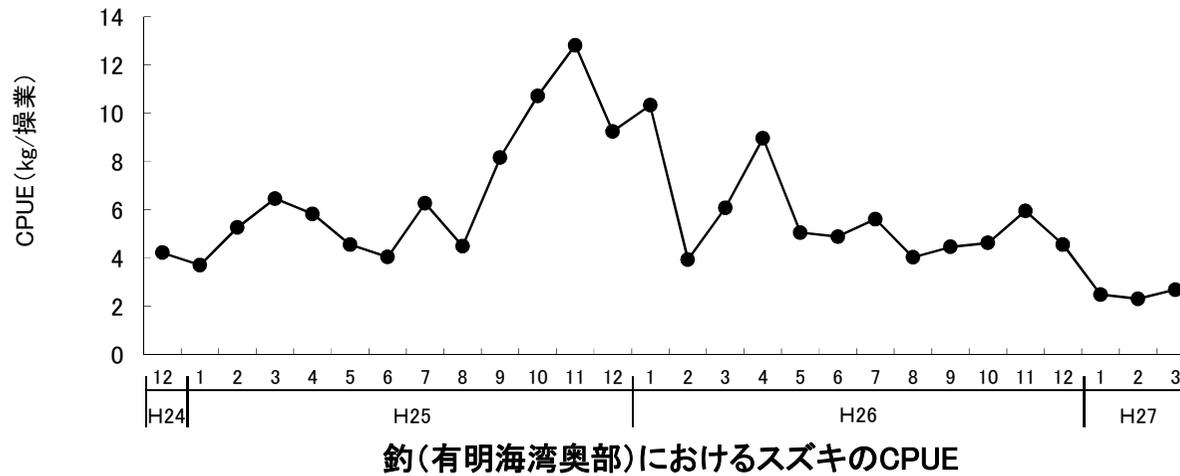
(12) 漁業生産 3) 漁船漁業: 代表種の漁業種類別の漁獲量比率及びCPUE(単位漁獲努力量当たり漁獲量)

① スズキ(諫早湾内を漁場としている回遊性魚介類の代表種)

○平成24年12月～平成27年3月において、スズキは主に釣、浮流し網及び浮刺網で漁獲されていた。スズキの釣(有明海灣奥部)における1操業当たりの漁獲量(CPUE)は、約2～13kg/操業であり、平成25年11月が最も多かった。



□ その他  
■ 小型定置網  
□ 浮刺網  
■ 浮流し網  
■ 釣-湾奥部

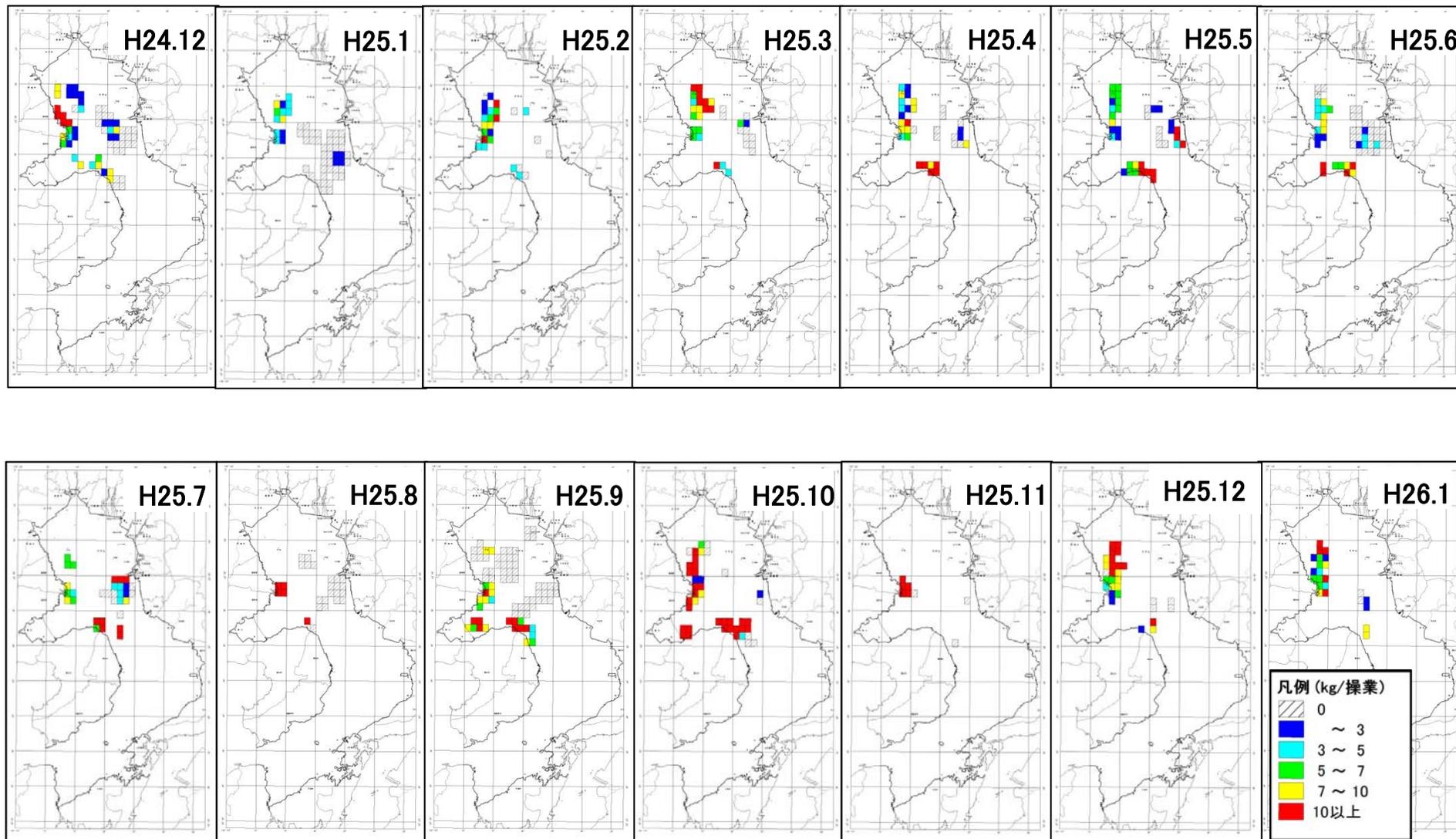


スズキの漁場及び生息域

注) スズキの産卵場及び生息場は「諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価書」、漁場は「平成22年度 農地等整備・保全推進環境調査漁業状況調査業務報告書」をもとに作成

スズキの漁場(諫早湾内を漁場としている回遊性魚介類の代表種) ①

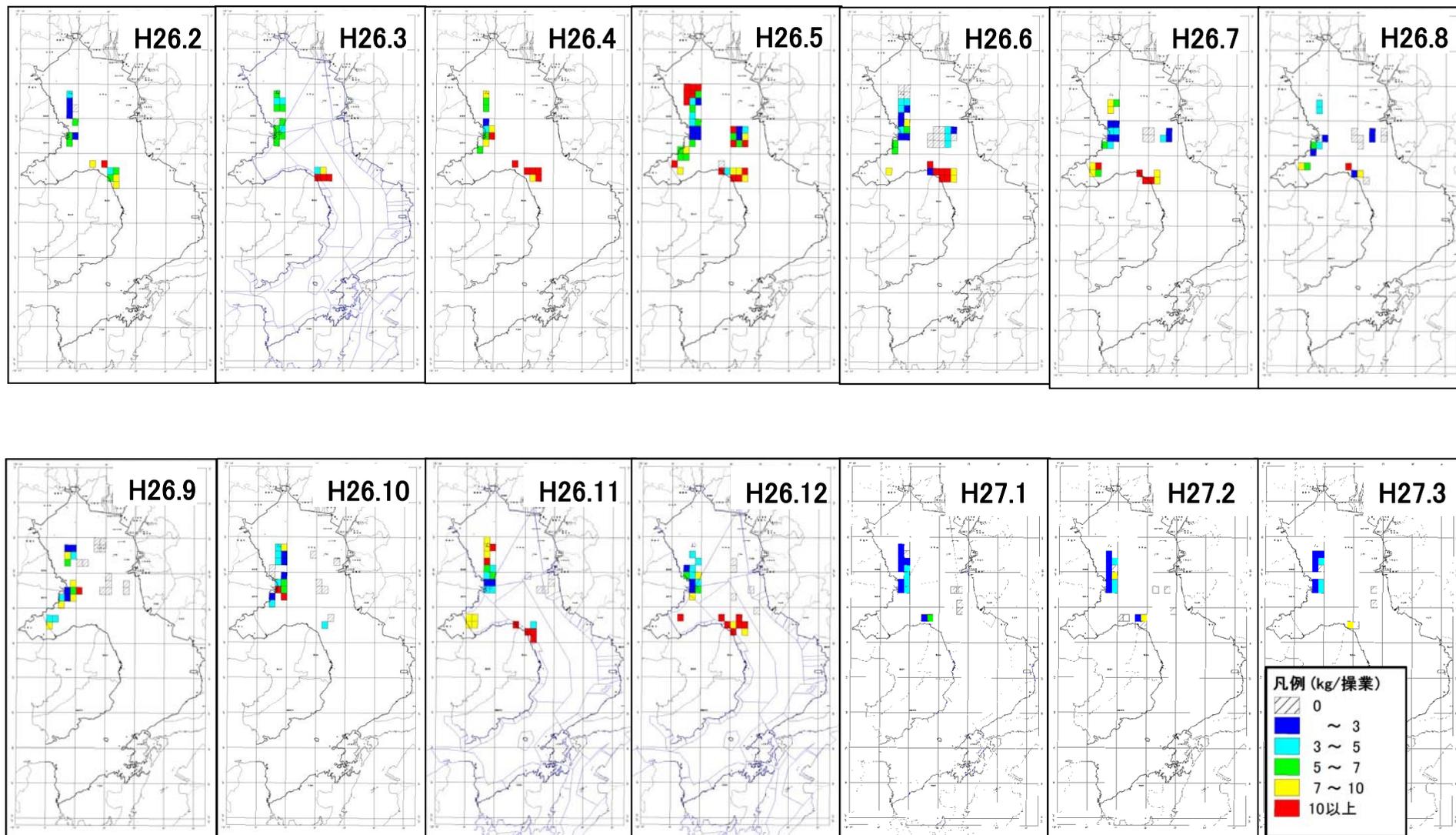
○スズキの漁場は、有明海湾奥部から湾口部にかけて有明海に広く形成されていた。釣(有明海湾奥部)におけるスズキのCPUEは、全般に有明海湾奥部から湾中央部西部沿岸域で高い傾向がみられた。



釣(有明海湾奥部)におけるスズキのCPUEの分布

スズキの漁場(諫早湾内を漁場としている回遊性魚介類の代表種) ②

○スズキの漁場は、有明海湾奥部から湾口部にかけて有明海に広く形成されていた。釣(有明海湾奥部)におけるスズキのCPUEは、全般に有明海湾奥部から湾央部西部沿岸域で高い傾向がみられた。

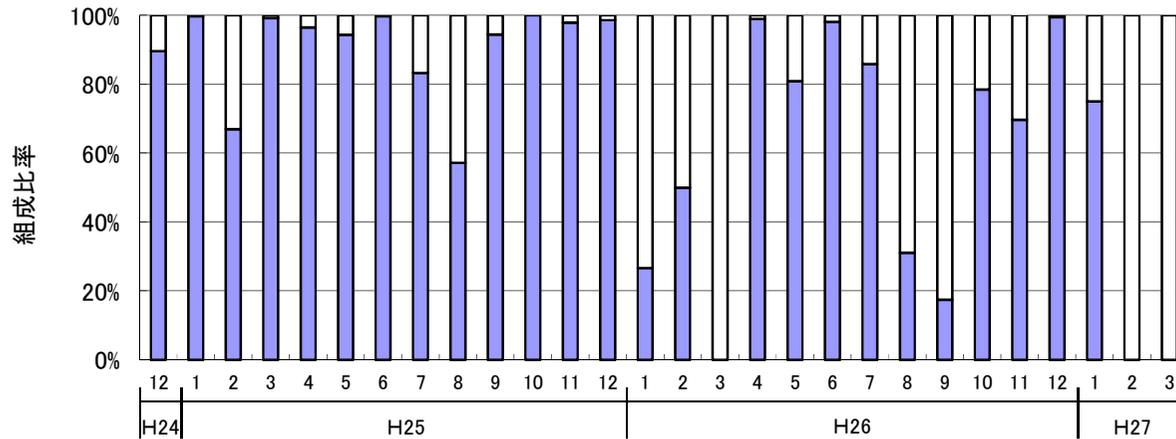


釣(有明海湾奥部)におけるスズキのCPUEの分布

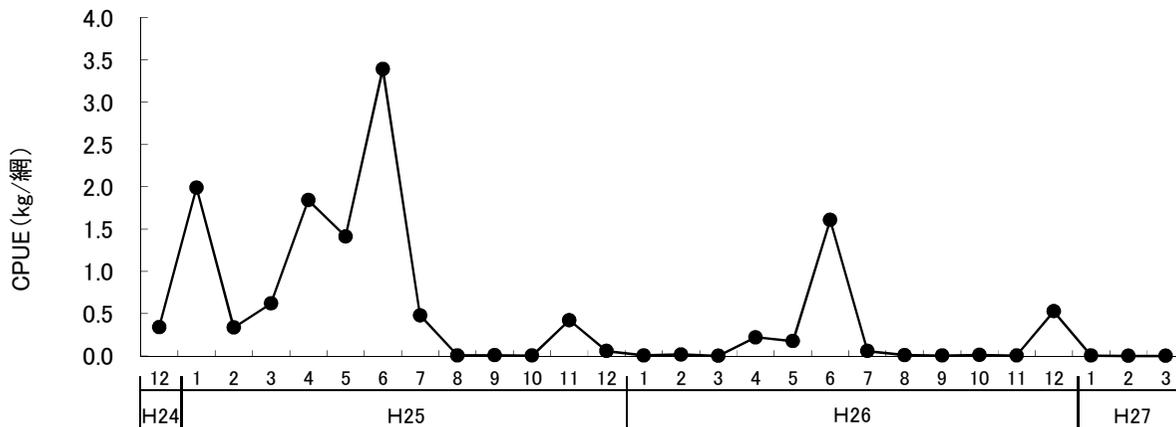
(12) 漁業生産 3) 漁船漁業: 代表種の漁業種類別の漁獲量比率及びCPUE(単位漁獲努力量当たり漁獲量)

②あかしたびらめ(諫早湾内を漁場としている底生性魚介類の代表種)

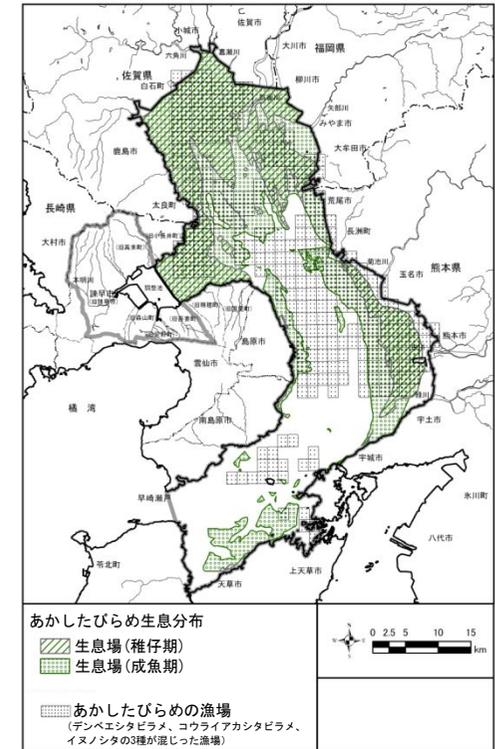
○平成24年12月～平成27年3月において、あかしたびらめは主に底刺網で漁獲されていた。あかしたびらめの底刺網における1網当たりの漁獲量(CPUE)は、約0.0～3.5kg/網であり、平成25年、平成26年ともに6月が高かった。



あかしたびらめの漁業種類別の漁獲量比率



固定式刺網(底刺網)におけるあかしたびらめのCPUE

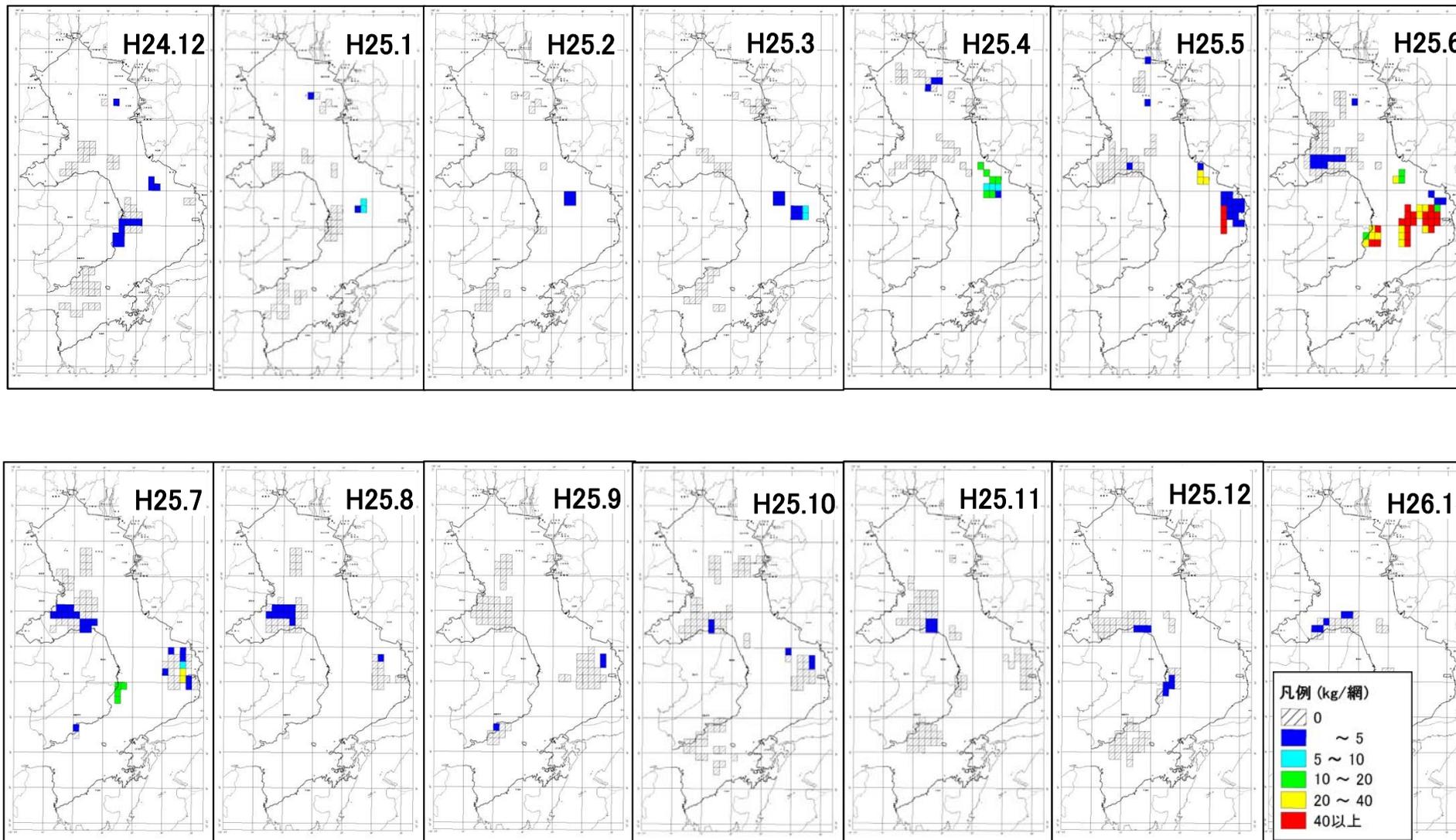


あかしたびらめの漁場及び生息域

注)あかしたびらめの生息場は「諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価書」、漁場は「平成22年度 農地等整備・保全推進環境調査漁業状況調査業務報告書」をもとに作成

あかしたびらめの漁場(諫早湾内を漁場としている底生性魚介類の代表種) ①

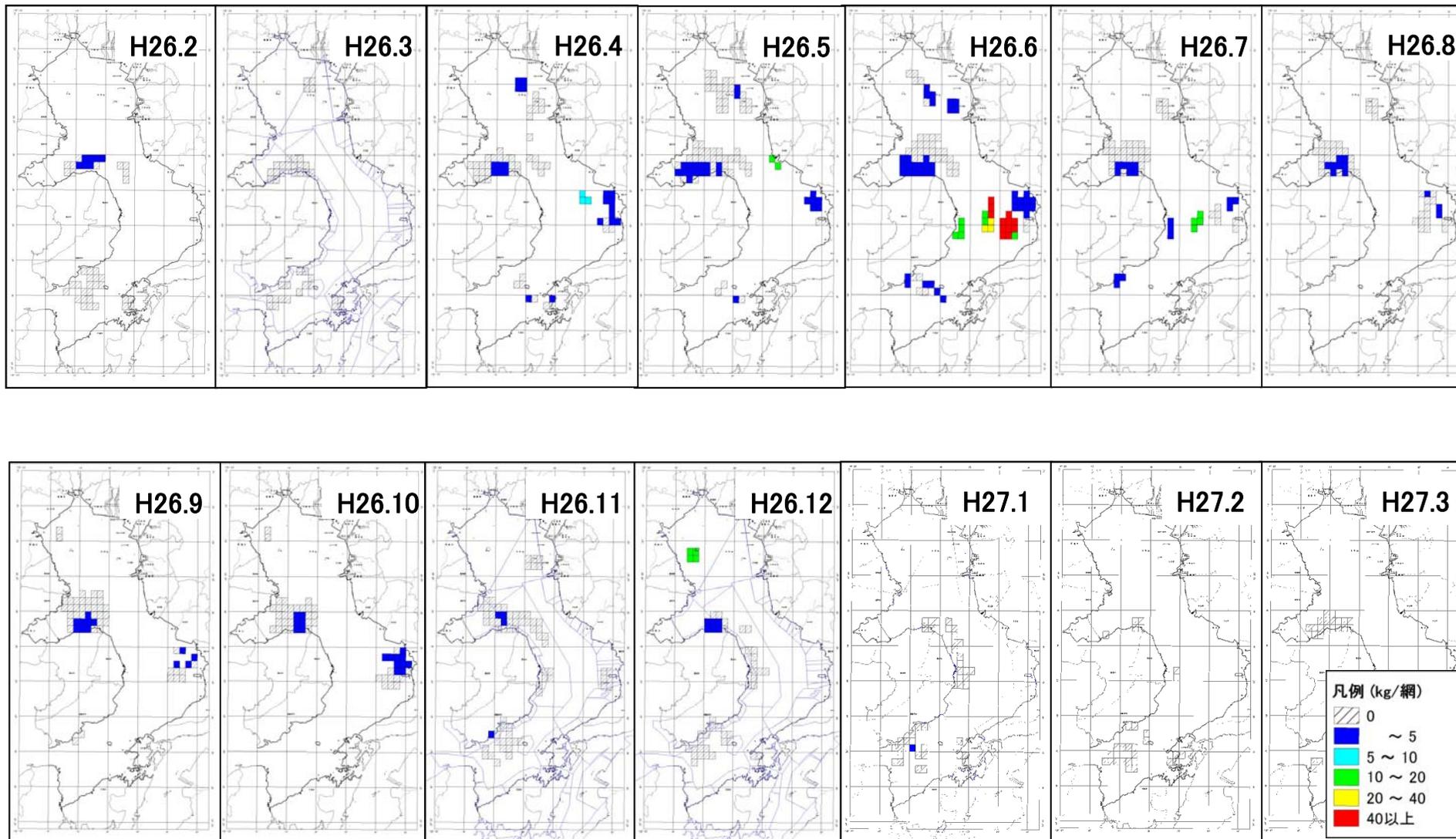
○あかしたびらめの漁場は、有明海湾奥部から湾口部にかけて点在して形成されていた。底刺網におけるあかしたびらめのCPUEは、全般に有明海湾中央部で高い傾向がみられた。



底刺網におけるあかしたびらめのCPUEの分布

あかしたびらめの漁場(諫早湾内を漁場としている底生性魚介類の代表種) ②

○あかしたびらめの漁場は、有明海湾奥部から湾口部にかけて点在して形成されていた。底刺網におけるあかしたびらめのCPUEは、全般に有明海湾中央部で高い傾向がみられた。

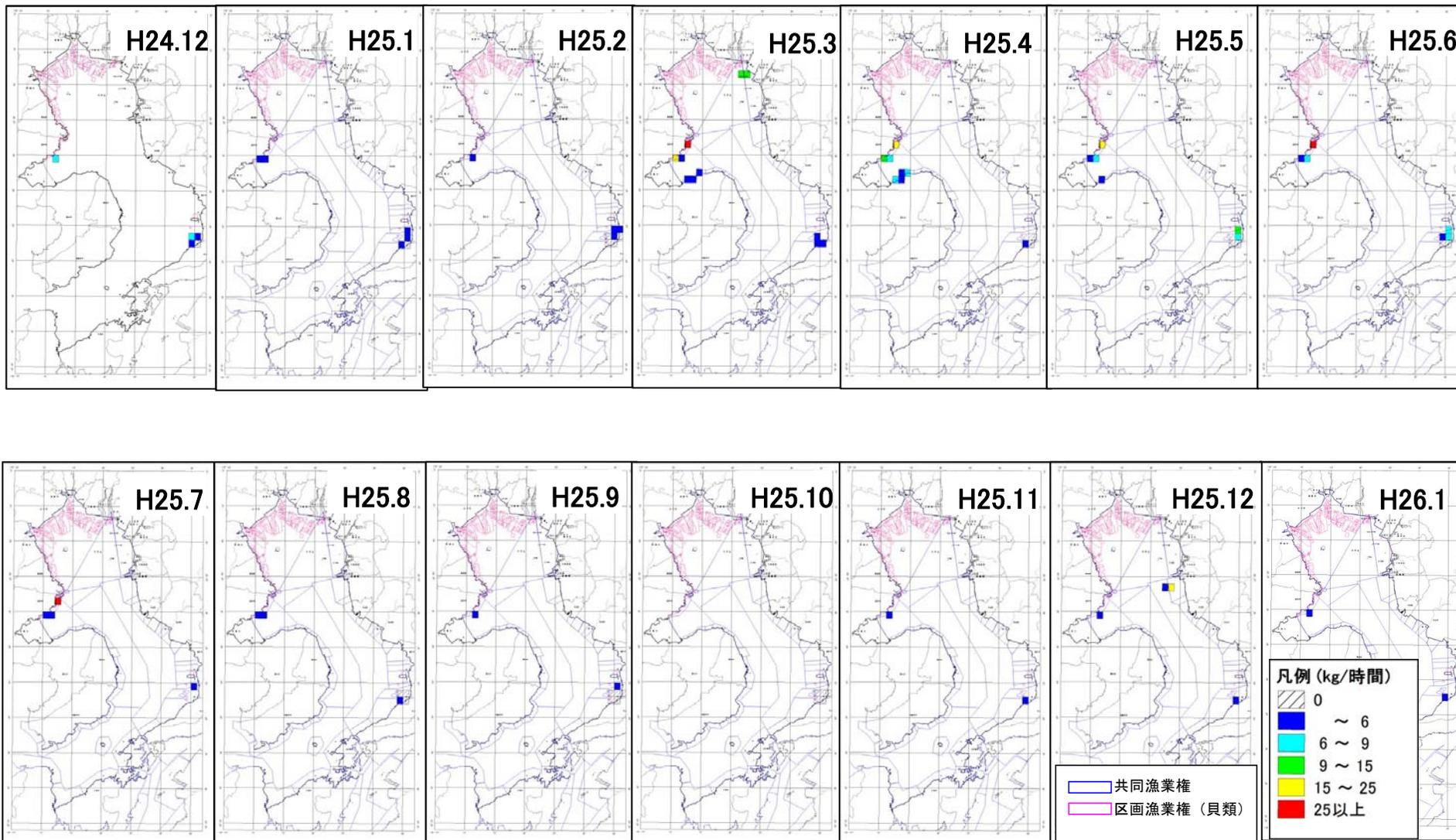


底刺網におけるあかしたびらめのCPUEの分布



アサリの漁場(諫早湾内を漁場としている貝類の代表種) ①

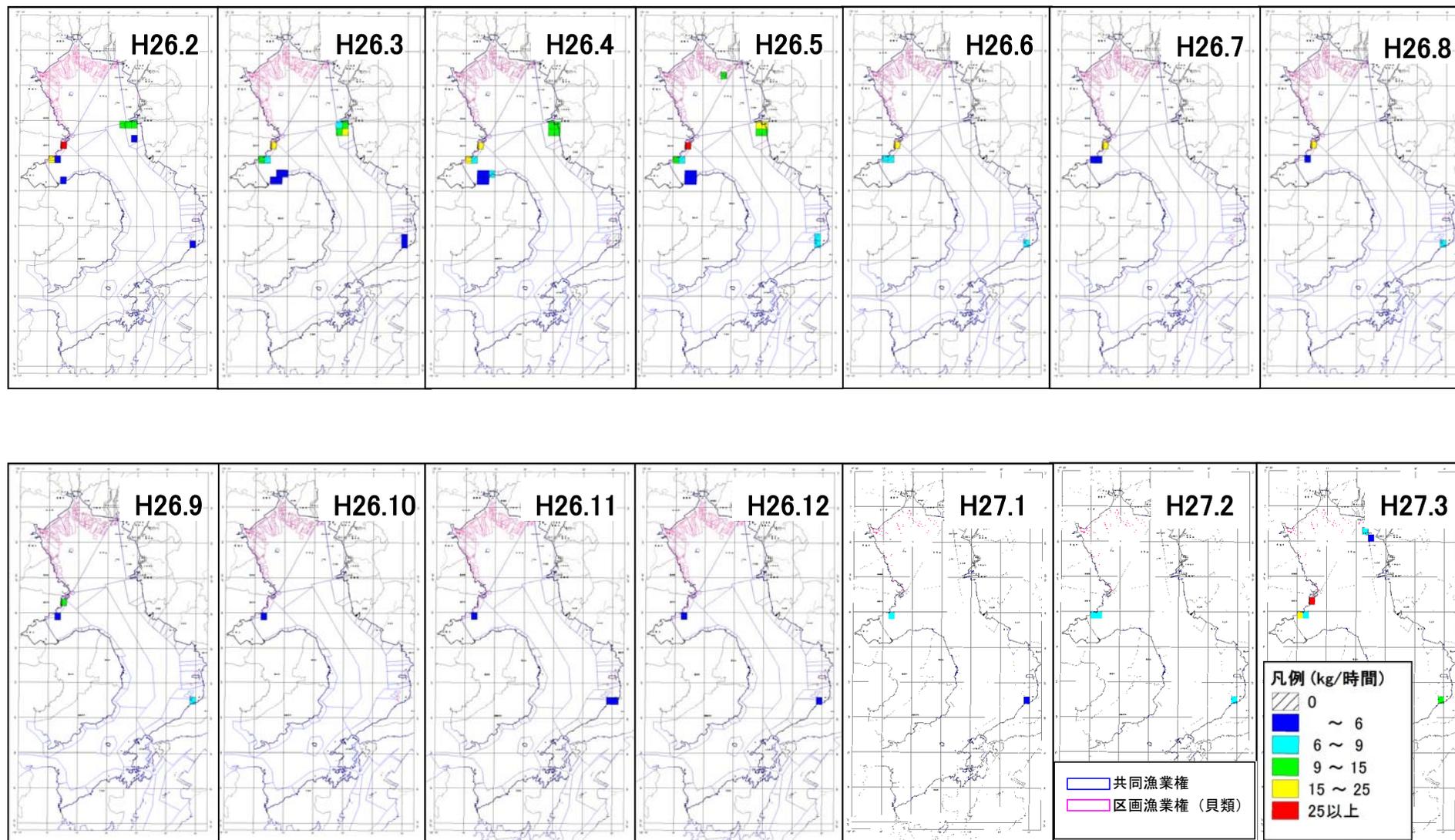
○アサリの漁場は、採貝漁業(アサリ漁)の漁場と一致しており、有明海沿岸の漁業権区域内に形成されていた。採貝漁業におけるアサリのCPUEは、全般に諫早湾北部沿岸域で高い傾向がみられた。



採貝漁業におけるアサリのCPUEの分布

アサリの漁場(諫早湾内を漁場としている貝類の代表種) ②

○アサリの漁場は、採貝漁業(アサリ漁)の漁場と一致しており、有明海沿岸の漁業権区域内に形成されていた。採貝漁業におけるアサリのCPUEは、全般に諫早湾北部沿岸域で高い傾向がみられた。



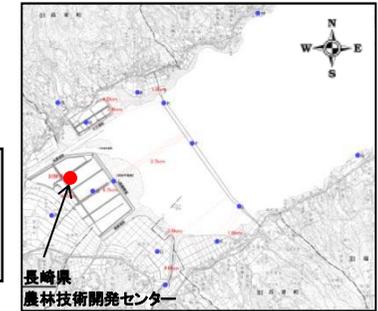
採貝漁業におけるアサリのCPUEの分布

2. 陸域の調査

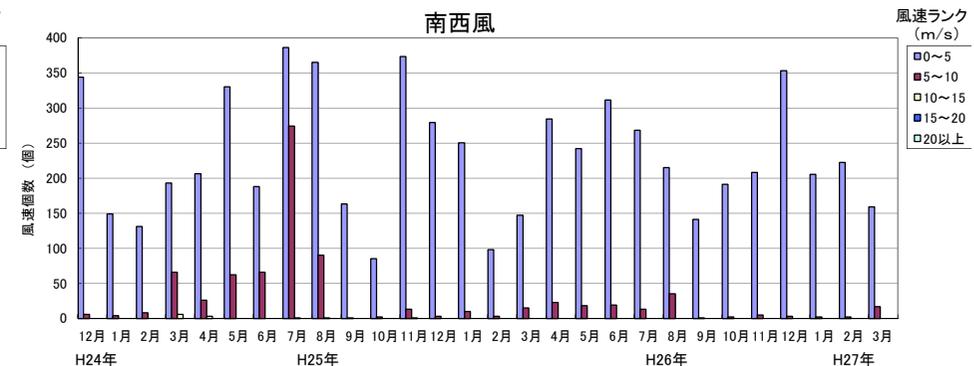
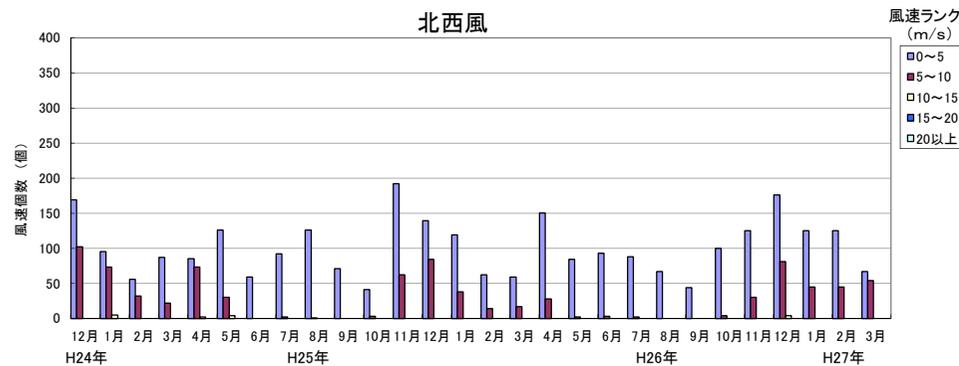
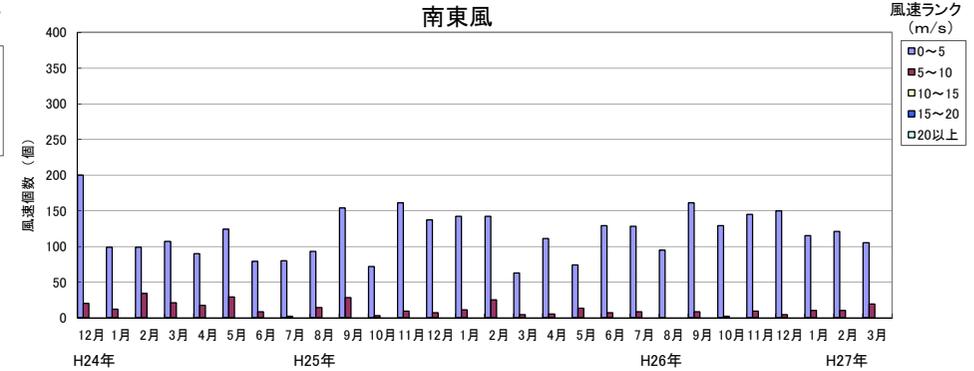
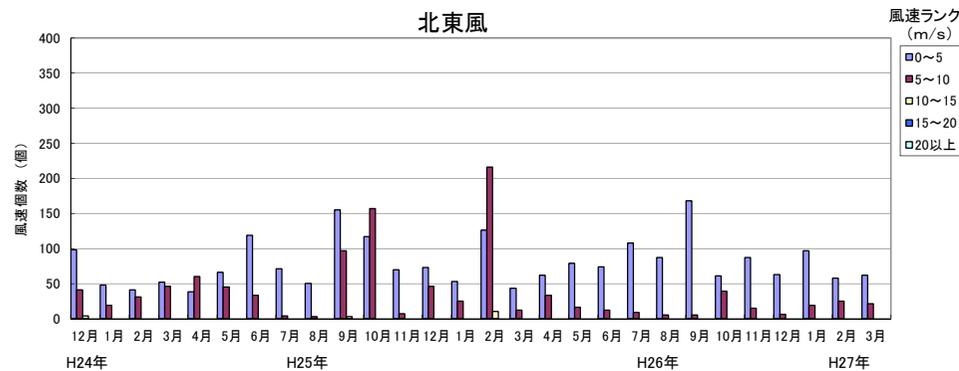
(1) 潮風害(飛来塩分量)

1) 調査期間の風況

○調査期間(H24年12月～H27年3月)は、風速5m/s以下、5m/s以上ともに、南西風の出現回数が多かった。次いで、南東風、北西風の出現回数が多く、飛来塩分の影響を受けやすい北東風の出現回数は比較的少なかった。



注) 風向・風速結果は、「長崎県農林技術開発センター」で観測されたデータを使用している。



注) 上図における各月の集計期間は次頁の飛来塩分量の調査期間に対応している。

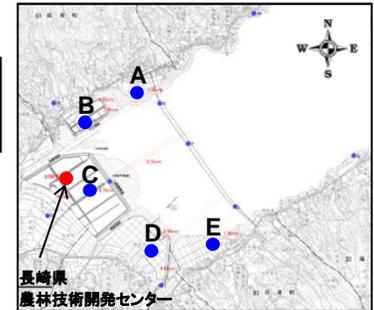
風向(4方位)毎の月別風速別出現回数(時間値) (観測地点:長崎県農林技術開発センター)

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

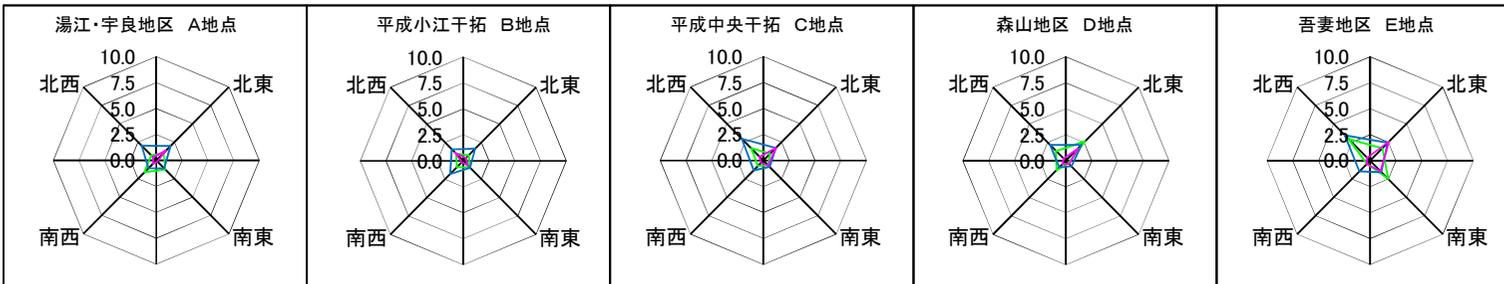
## (1) 潮風害(飛来塩分量)

### 2) 飛来塩分量①

○調査期間(H24年12月～H25年8月)の方向別の飛来塩分量は、出現回数が多かった南西方向、及び北西方向でやや高い傾向がみられた。

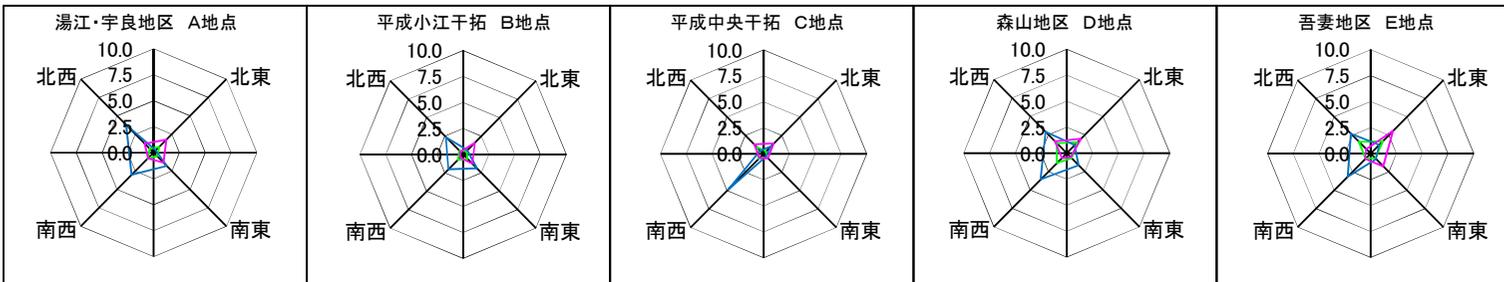


注) 風向・風速結果は、「長崎県農林技術開発センター」で観測されたデータを使用している。



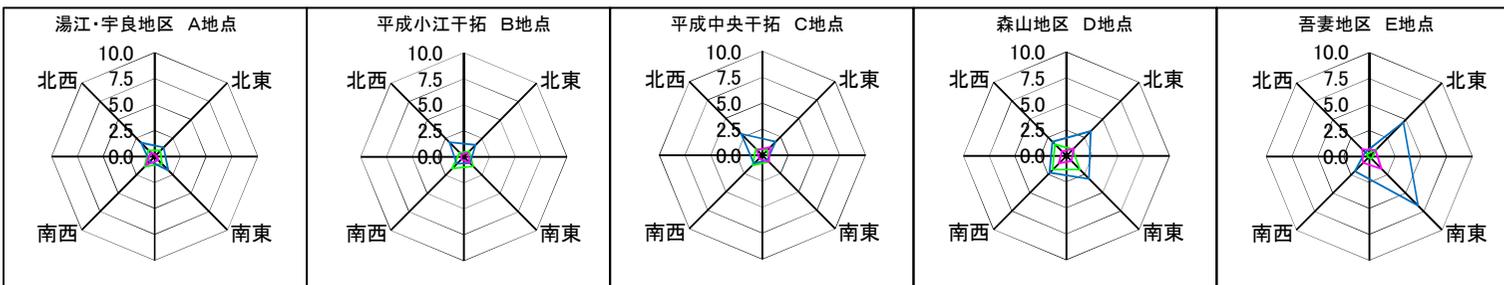
#### 調査期間区分

- 平成24年12月通常時[12/14～1/24]
- 平成25年1月通常時[1/24～2/14]
- 平成25年2月通常時[2/14～3/4]



#### 調査期間区分

- 平成25年3月通常時[3/4～3/29]
- 平成25年4月通常時[3/29～4/23]
- 平成25年5月通常時[4/23～5/27]



#### 調査期間区分

- 平成25年6月通常時[5/27～6/19]
- 平成25年7月通常時[6/22～7/30]
- 平成25年8月通常時[7/30～8/30]

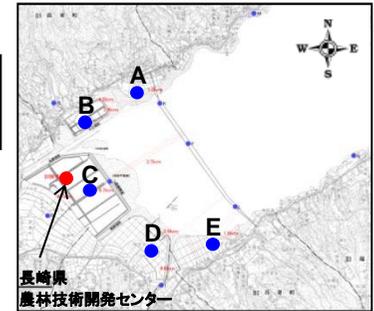
月別の方向(4方位)別飛来塩分量(mg/100cm<sup>2</sup>)

# 諫早湾干拓事業 《Ⅱ 調査結果の概要》

## (1) 潮風害(飛来塩分量)

### 2) 飛来塩分量②

○調査期間(H25年9月～H26年5月)の方向別の飛来塩分量は、出現回数が多かった南西方向、及び北西方向でやや高い傾向がみられた。



注) 風向・風速結果は、「長崎県農林技術開発センター」で観測されたデータを使用している。

#### 調査期間区分

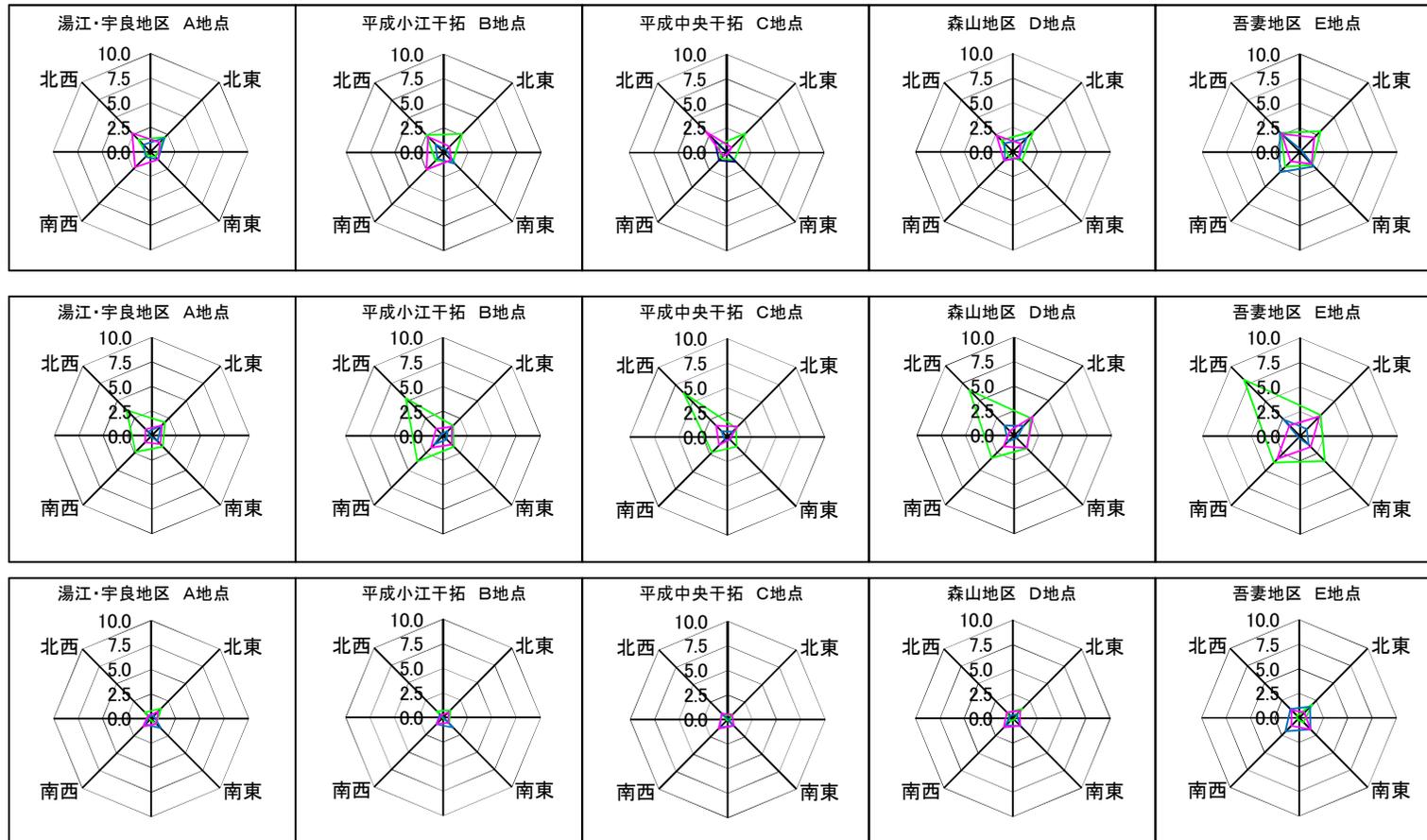
- 平成25年9月通常時[9/3～10/1]
- 平成25年10月通常時[10/10～10/24]
- 平成25年11月通常時[10/30～12/6]

#### 調査期間区分

- 平成25年12月通常時[12/6～1/7]
- 平成26年1月通常時[1/7～2/3]
- 平成26年2月通常時[2/3～3/4]

#### 調査期間区分

- 平成26年3月通常時[3/4～3/19]
- 平成26年4月通常時[3/19～4/17]
- 平成26年5月通常時[4/17～5/9]

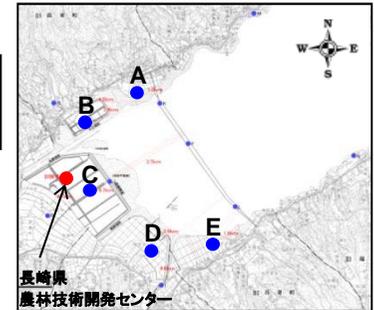


月別の方向(4方位)別飛来塩分量(mg/100cm<sup>2</sup>)

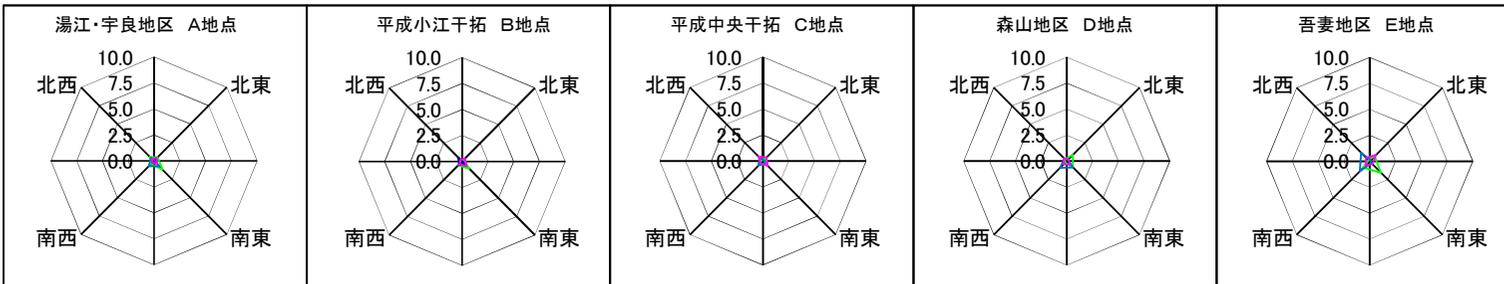
(1) 潮風害(飛来塩分量)

2) 飛来塩分量③

○調査期間(H26年6月～H27年3月)の方向別の飛来塩分量は、出現回数が多かった南西方向、及び北西方向でやや高い傾向がみられた。また、H26年6月～8月は、飛来塩分量は少なかった。

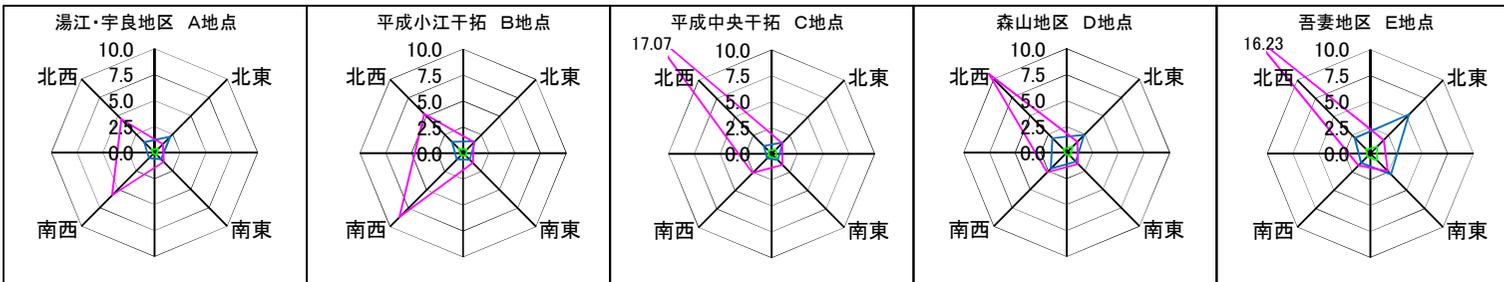


注) 風向・風速結果は、「長崎県農林技術開発センター」で観測されたデータを使用している。



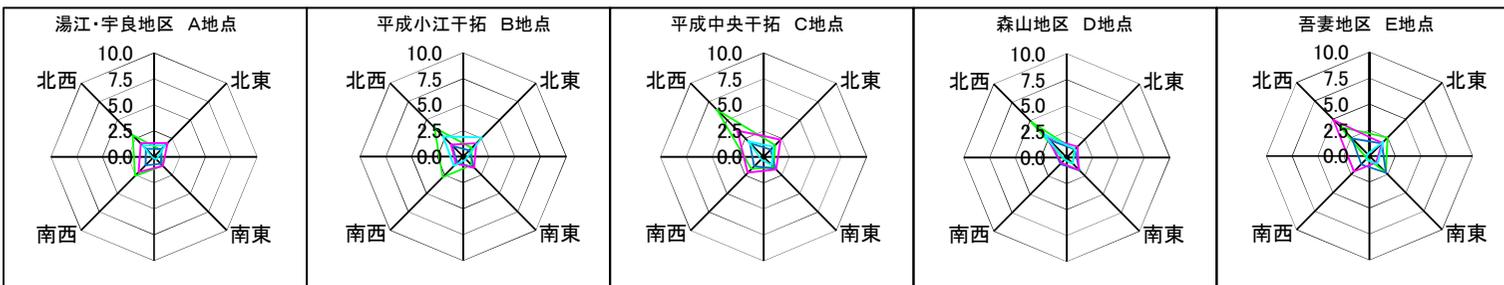
調査期間区分

- 平成26年6月通常時[5/9～6/5]
- 平成26年7月通常時[6/5～7/1]
- 平成26年8月通常時[8/11～9/1]



調査期間区分

- 平成26年9月通常時[9/1～9/23]
- 平成26年10月通常時[10/15～11/6]
- 平成26年11月通常時[11/6～12/2]



調査期間区分

- 平成26年12月通常時[12/2～1/6]
- 平成27年1月通常時[1/6～2/2]
- 平成27年2月通常時[2/2～3/2]
- 平成27年3月通常時[3/2～3/23]

月別の方向(4方位)別飛来塩分量(mg/100cm<sup>2</sup>)